三訂新日本讀本

吉澤義則編

五

3759
Y019
資料室

41434
教科書文庫
4
810
~~200020~~
~~41-1931~~
~~1708~~
2000301708

昭和六年十一月二十八日
中學校國語漢文科用
昭和八年七月六日
實業學校國語科用

文部省檢定濟

修文館發行

資料室

3759
K19

三/二
前峠勝

大阪桃山中學校	
學籍	第三學年二組
氏名	前峠勝

槍ヶ岳　（第十六課參照）

廣島大學圖書之印

廣島大學
教
39910
圖書

卷五

一　我が國體　黑板勝美　一
二　建國讃歌　西條八十　一一
三　人臣の道（神皇正統記）　一三
四　花影の中に　田山花袋　一五
五　春宵漫歩　夏目漱石　二一
六　五月の光　吉田絃二郎　二六

七　新緑の野　安倍能成　三一
八　耕人　川路柳虹　三七
九　樹の根　和辻哲郎　四〇
一〇　向上　徳富蘇峰　四八
一一　仁は心のいのち　（駿臺雜話）　五三
一二　俳句に就いて　高濱虚子　五八
一三　一茶の童心　荻原井泉水　六八
一四　狂歌と狂句　（諸家）　七二

一五　しみのすみか物語抄　石川雅望　七五
一六　登山の意義　田部重治　八一
一七　上高地の神祕境　（日本アルプスと秩父巡禮）　八六
一八　待賢門の戰　（平治物語）　九五
一九　重盛諫言　（平家物語）　一〇六
二〇　諫を喜ぶべし　（大和俗訓）　一一六
二一　鞭　吉田絃二郎　一二一
二二　乃木大將の殉死　徳富蘇峰　一二六

二三 男性美　笹川臨風　一三四
二四 手巾　芥川龍之介　一三九
二五 日蓮の溫情　高山樗牛　一五五
二六 自覺　幸田露伴　一五九
二七 生活の心境　豐島與志雄　一六二
二八 思想上の三勢力　北村透谷　一六七

——終——

帝國圖書館之印

三訂 新日本讀本 卷五

一 我が國體

黑板勝美

黑板勝美
長崎縣の人、明治七年生、文學博士、東京帝國大學教授。

准后
北畠親房
吉野朝の忠臣、正平九年(一三五四)薨、年六十三。

神皇正統記
北畠親房の著、神武天皇より後村上天皇までの事蹟を記した書。

寶祚

准后北畠親房の書いた神皇正統記の開卷第一に、「大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神永く統を傳へ給ふ。我が國のみこのことあり。異朝にはその類なし。この故に神國といふなり。」とある通り、天照大神以來、萬世一系の天皇を上に戴いてゐる我が大日本帝國が、寶祚と國運と天壤無窮であり、そこに國民の榮があることは、我が日本に生まれたものの誰も心に思ひ、口にしてゐるところである。けれども、さてどうして我が日本が、神の國として今日まで數千年の間傳はり、なほ將來もこの

數千年間傳はつて來た言ふべからざる一つの力を以て進んで行くかといふことは、肇國以來の歷史を味はひ、さうしてこゝに皇室と國民との關係を知り、それに依つて、我が國體が、いかに自然に發達して來たかを知らなければ、了解することはできないのである。

尤も、從來傳はつてゐる日本の太古から上代の歷史が、そのまますべて正確であるとは、もとより考へることはできない。しかし、その中に含まれてゐる神話或は傳說の起原、及びその發達して來た途をたどつて見て、その神話・傳說が、萬世一系なる歷史的事實を基礎として起つてゐるものと考へ得られぬであらうか。また、我が日本の上代の神話・傳說の中に、この萬世一系といふ信條が、生き〳〵としてあるのは何故であらうか。この意味に於て、我々は從來の傳說に囚はれた行き方でなく、寧ろ今日の

信條

文化史的研究

文化史的研究の上に、萬世一系の事實であるか否かを研究して見なければならぬと思ふ。

環境

これに就いての研究は、まづ人類社會の成立に對して、その環境並びに自然界がどういふ關係であつたかといふことを、地理的にも、生活狀態の上からも、考へねばならぬ。その關係が我が日本にはいかに現れてゐるか。いかに日本の國家が現れ、日本の社會が現れて來たかを觀察して見ねばならぬ。まづ、我が日本の如き島國で、しかも平野の少い山國であるのと、支那或は印度の如き大平原國であるのとでは、その社會的集團の進みが異なつてゐる。我が國の如き島國や山國では、まづ限られた地方で社會的集團が起るから、他の民族との接觸がよほど遲れる。隨つて、その社會には、生存競爭といふことよりも、寧ろ相互に依存する平和な氣分が、より多く現れたであらうと思はれる。ま

相互依存

原始的

だ原始的の社會であつて、たゞ自分等の目に觸れる範圍が、世界の全體であると考へて居つた時代に於ては、もし我々の祖先の起つた所が四方山で圍まれ、或は山もしくは海で圍まれた高天原、又は日高見國といふものであつたとすれば、その狹い小さな世界で、一つの社會的集團を作つて行くには、よほど平和的であつて、かの强者が弱者を苦しめるやうな意味はなかつたらうと思ふ。その社會を平和的に作り上げることに進んで行かなければ、その社會は滅亡となるのである。このことは、社會の一つの細胞ともいふべき家庭の組織に就いても考へ得ることである。隨つて、家庭の組織せられる本となつてゐる夫婦の成婚にも、日本の上代の社會に於ては、近親結婚で社會を作り出してゐたことは、神話・傳說の中によく現れてゐる。さういふ風で出來た家庭は、夫婦・親子の關係は極めて親密であつて、隨つて、平和な

中臣
天兒屋根命より出た氏族の名、世々祭祀を掌る。

齋部
天太玉命より出た氏族の名、代々祭器を作り、祭祀を掌る。

物部
可美眞手命より出た氏族の名、宿衞を掌る。

氏族制度

愛を以て結ばれた社會が、こゝに成り立つて來たことを信じ得るいろ〳〵な條件が、日本の社會の發達の上に備はつてゐるのである。

さて、この平和な社會のだん〳〵發達する具合を見ると、一番初めには、別に專門的の職業が各家々にあつたものではなかつたらしい。それがだん〳〵進んで來た時に於て、その社會の成立、その國民生活に必要な精神的や物質的の分業が、自然に行はれて來たものであらう。さうして、その家々の名前は、最初は職業の名前を以て家の名稱とすることに進んで行つたものである。中臣とか、齋部とか、或は物部とかいふ名稱は職業の名稱であるが、それで一つの家の名前が出來てゐるのである。この場合に、それがまた國家的組織と一致してゐるのが、卽ちまた我が國上古の氏族制度で、特殊な職業がなくて國家の最高地位を占

められる家は、たゞ一軒しかないのであるから、別に家の名稱を呼ばぬ。隨つてこれを作る必要がなく、たゞ尊稱だけを作ればよろしい。今も、お上とか、上樣とか、陛下とか申し上げれば、天皇陛下の御事であるやうに、大昔から我が皇室には御家名といふものがない。たゞ親王や皇族の御方が別家をなされば、何の宮樣と申すのみである。天皇陛下には「すめらみこと」即ち我々を統べてゐられる御方といふやうな意味の尊稱はあるが、それ以上に、特別に皇室として御名前を附して、かういふ御家の誰といふ必要はないのである。

主權者

主權者の家に名稱を持つてゐない國は、世界中今日に於てただ我が大日本皇國あるのみである。いかなる國でも、日本以外の國では、皆主權者の家名がある。これは要するに、もと國民の一部であつた者が、後に勢力を得て主權者となつたからである。

革命

國民的自覺

日本の皇室は、この點に於て、社會發達の最初から、主權者として今日まで繼續せられたことを、事實の上に於て示すもので、實に世界に類例のない萬世一系を、この事實の上に證明してゐるのである。日本にいづれの時代にか革命が行はれたものとすれば、現主權者には必ず家の名前がなければならぬはずである。

以上の所說によつて、皇室の天壤無窮なるべき天照大神の神勅の、實に皇室にも國民にも國民的自覺を作るべき根原となつてゐる根本義が了解せられるであらう。さうして、我々がこの肇國の昔に遡つて、祖先の偉業を回顧する時に、我々は國民としての信仰に生きる。我々はその信仰を益〻養成して行かねばならぬ。即ち歷代天皇は、萬世一系を事實に於て永久に傳へることに御努力あり、我々日本國民は、その意味に於て皇室をお助け申すことに於て努力があり、こゝに始めて日本民族として進ん

武烈天皇
第二十五代。
末多王
百濟の暴君。
仁德天皇
第十六代。
醍醐天皇
第六十代

で來た意義が現れるのである。さうして、前に述べた日本の最初に出來た家庭の成立に於ける親子及び夫婦の關係を推し擴げたものが、この皇室と國民との關係となつたので、一に歷代天皇が、義は君臣であるが親しみは父子のやうな大御心で國民に君臨せられ、隨つて神武天皇から今日まで連綿として皇統を傳へられ、御一人の天皇も國民を虐げられた御方がおいでにならぬといふ美しい歷史となつて現れてゐるのである。武烈天皇の御事蹟として日本書紀にある物語には、百濟末多王の事蹟が混入してゐることは、早く學者の定說となつてゐる。さうして、仁德天皇が民家の煙を御覽になつての御仁政も、醍醐天皇が寒夜に御衣を脫がせられた御事も、皆各時代の天皇の御仁慈の御心が、仁德天皇や醍醐天皇の御聖德の上に現れてゐるので、仁德天皇・醍醐天皇のみが、聖德の天皇であらせられたといふのでな

後奈良天皇
第百五代。
供御
宸筆
式微

い。後奈良天皇が、その日の供御にも御困りになつてゐるほど皇室の衰微した時代にも、なほ宸筆を染めて般若心經を書寫し給ひ、國民の病苦を救はうとせられたことは、この皇室の式微から二たび盛な皇運の光がさして來た所以である。隨つて、我々日本臣民は、皇室のために身命を捧げて御奉公をするといふ考の上に立つて、始めてこの萬世一系の皇運を扶翼し奉ることが出來るのである。

神皇正統記にも、「窮あるべからざるは我が國を傳ふる寶祚なり。仰ぎて尊み奉るべきは日嗣をうけたまふ皇になんおはします。」といつてあり、また「凡そ王土に生まれて忠を致し身を捨つるは、人臣の道なり。かならずこれを身の高名と思ふべきにあらず。されど、後の人を勵まし、その跡を憐びて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ爭ひ申すべきにはあらぬにや。」

中核

矛盾

永劫

と述べてあるのは、親房がいかによく日本國民の精神の中核に觸れてゐたかを觀るに足るもので、我等國民が服膺すべきモットーであらねばならぬ。

我々は、皇室の繁榮は同時に日本國の繁榮であり、日本國の幸福と一致する皇室の繁榮であるといふことでなければ、肇國の大精神と矛盾するものと考へねばならぬ。　またそこに始めて天照大神の神勅の意味が強く現れて、日本の國運と民福が進んで來るのである。　卽ち、我々は外來の文化に對して、我が皇室及び國體を中心として、精神的にも物質的にも向上を圖るべきであるが、皇室及び國體を忘れて、たゞ外來の文化に心醉して、國民的自覺を失ふことがあつたら、それと同時に日本民族の滅亡が到來する。　我々日本國民は、永劫にこの大信條の下に進まねばならぬ。

二　建國讃歌

西條八十

きよし、きよし、日の本。
そは蒼海の潮のしづく、
天の瓊矛より滴り落ち、
こゞりて成りし國土なれば。

雄々し、雄々し、日の本。
そは開闢の闇のそこひに、
俠勇魔妖を斬るの巨人、
素戔嗚命を仰ぎたる國土なれば。

貴し、貴し、日の本。

そは五瀬、稲氷、御毛沼の命、
畏くも神武の帝の御兄弟の、
悲しき御血もてあがなはれし國土なれば。

美はし、美はし、日の本。
そは神武の帝をはじめ、
神の御裔なる代々のすめらぎの、
愛もてとこしなへに統べたまふ國土なれば。

建國は古ならじ、
建國は今日につゞけり、
いざわれら幼けれども、大君の語畏み、
その御業扶けまつらむ。

（少年詩集）

前車の轍
なりぬれば
制符

三人臣の道

凡そ王土に生まれて忠を致し命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。されど、後の人を勵ましし、その跡を憐びて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ爭ひ申すべきにはあらぬにや。まして、させる功もなくして、過分の望をいたすこと、自ら危うする端なれど、前車の轍を見ることは、まことに有難き習ひなりけんかし。中古までは、人のさのみ豪强なるをば戒められき。豪强になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅ぼし家を失ふためしあれば、戒めらるゝも理なり。鳥羽院の御代にや「諸國の武士の源平の家に屬する事を停むべし。」といふ制符度々ありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて、諸國のつはものを

語らはる
下さーれーにーき
いひがひなし

申すめる

言語は
易の繫辭傳の語。
樞機
あからさまに
事にこそ
堅き氷
霜ヲ履ンデ堅氷至ル。
（易經）

徵し具しけるに、近代となりて、やがて語らはるゝやから多くなりしによりて、この制符は下されにき。果して今までの亂世の基なれば、いひがひなき事になりにけり。この頃の諺には、一たび軍に駈け合ひ、或は家子・郎從節に死ぬる類もあれば「我が功におきては日本國を賜へ。」若しは「半國を賜はりても足るべからず。」などと申すめる。誠にさまで思ふことはあらじなれど、やがてこれより亂るゝ端ともなり、又朝威の輕々しさも推し量らるゝものなり。「言語は君子の樞機なり。」といへり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕る事はあるべからぬ事にこそ。堅き氷は霜を履むより至る習ひなれば、亂臣・賊子といふものは、その初め、心・言葉を愼まざるより出でくるなり。「世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色の改まるにもあらず、人の心の悪しくなりゆくを末世とはいへるにや。（神皇正統記）

巻末地圖參照
田山花袋
名は錄彌、群馬縣の人、小說家、昭和五年歿、年六十。
六田の渡
吉野川の渡。

閃々

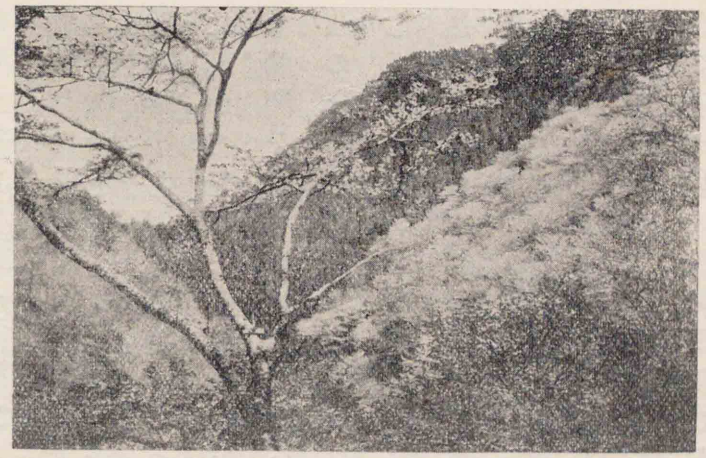
四　花影の中に

田山花袋

金剛山を越えて、吉野の六田の渡をわたつたのは、その日の午後四時少し過ぎた頃であつたが、途中、花を挿して歸つて來る人に聞いて見ると、花は今眞盛りとの事で、今一日早くても、遲くても、滿開を見る事は出來ないとの話であつた。漸く六田の柳の渡のほとりに來た頃は、夕日がもう彼方の山の凹處に沈まうとして、清い速い吉野川の流は閃々と美しい紋を川の面に描いて居た。自分は船が前岸に著くと、そのまゝ急いで飛び下りて、一直線にそのなつかしい吉野山へと志した。

街のはづれに一つの黑い門があつて、此處から奥の院まで六十町餘と書いた札などが立つてゐるが、それを潛ると、もう山で、櫻の花が段々路の兩側に見え出して來る。入口は盛りが過ぎ

端坐
護良親王
後醍醐天皇の第三子、大塔宮、
十津川
吉野郡、熊野川の上流。
鼎立



吉野山（中の千本）

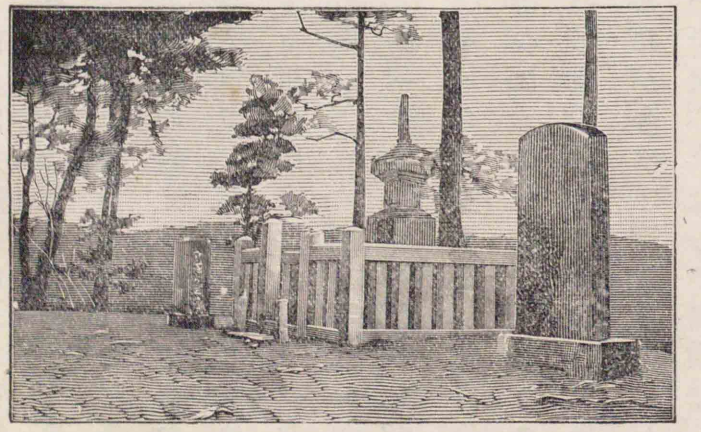
て、花びらの枝に残つて居るのも極めて少いが、次第に登れば登る程、花は多く盛になつて、四邊の眺望の美しさは、殆ど言葉にも筆にも盡くす事が出來ない程である。右手には越えて來た金剛山が、偉丈夫の端坐してゐるやうに聳えてゐて、それを仰ぐと、護良親王が十津川から此の地に入つて、千早赤坂と共に三足鼎立の勢ひを作つた時の事などが、すぐ胸をついて浮かんで來る。

兩道の花はいよ〳〵美しい。

悠久

自分は行く〳〵右と左の大澤を見下しながら、夕日の花やかな光がぱつと谷間々々の櫻花の上に匂ひ渡るのを見て、獨りつく〴〵とこの山の景のいかに懷古の情を起すに適して居るかを思つた。花も好い、境も好い、山も面白い、けれども吉野朝の遺跡が無かつたら、決してこれ程の感興を起す事はなかつたらうに……。

村上彦四郎義光の墓の前にひざまづいた時は、自分はなんとも知れぬ悠久な感にうたれて、しばしは其



村上義光の墓

玉置山　奈良縣吉野郡。

蹌々踉々

罵倒

處を立ち去ることが出來なかつた。前には片岡八郎があつて親王の難を玉置山に救ひまゐらせ、後には此の彦四郎義光があつて、身を以てこの吉野の退口を安全に守りまゐらせたのであるが、もし後半にいたるまで、この忠勇無二の義光が生きて居たならば、親王は決してはかない最期を遂げさせ給ふやうな事はなく、或は吉野朝の衰へたのを恢復する事が出來たかも知れない。つたないのは吉野朝の運命である。

この時である、自分の立つて居る傍を、一群の醉客が蹌々踉々として歩いて來たが、卑しい歌を歌ひながら、遠慮もなしに、自分の肩をかすめるやうにして過ぎて行つた。自分はすでにこの山に登つた時から、心もない花見客のわい〳〵と酒に醉つて歩くさまを非常に心よからず思つてゐたが、今は丁度自分の心が無限の感慨にうたれてゐる事とて、一層深く憤慨して、罵倒してやらうかと思ふ程癪に障つた。

草莽の孤臣

藏王權現堂　聖武天皇の創建、一名金峰神社。

吉水院　藏王堂の南三丁。

けれど花の穗に咲き匂つてゐる間を、一歩二歩とたどつて行くと、その癪に障つた念は、一種深い〳〵悲哀の情に變つて、どうにもかうにもたまらないやうな心地になつたと思ふと、涙がはらはらとやつれ果てた旅の衣の袖を傳つて落ちた。そして草莽の孤臣といふ感が胸も狹しと溢れて來て、自分も若し其の時代に生まれたならば、たとひ雜兵となつても、この勤王の志を致したであらうにと思つた。

其處から吉野の山奥までは五十町、自分はこの間をどんな感慨と、どんな涙とを以て行き過ぎたであらうか。護良親王の奮戰した藏王權現堂の高く櫻花の上に聳えて居るのを仰いでは、どんなに烈しい懷古の情にうたれたのであらうか。吉水院の行在所のあとを尋ねては、どんなに深い暗涙にむせんだであら

うか。

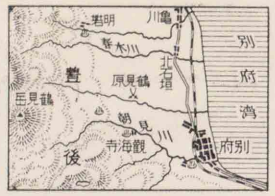
此處で、この花の中で、後醍醐天皇は劒を按じておかくれなされたのである。此處で楠正行は歌を扉の上に遺し、死を決して、敵軍に向つたのである。此處で吉野五十年の帝業は建てられて、正義といふ精神は赫々として光を日月と爭つたのである。そしてその六百年前の夢のあとは、今もなほ美しい滿山の花影の中に、微に匂ふばかりに殘つてゐるではないか。

これ程美しい詩があらうかと、自分は幾度も思つた。

自分はかういふ風にこの吉野朝の遺跡を處々に見て、一層深くこれに對する同情の念を增したが、翌日吉野山を下る時には、幾度となく振り返つて、殆ど別れ難い思ひがした。

（花袋紀行集）

夏目漱石
名は金之助、東京の人、文學者、大正五年歿、年五十。



觀海寺

五 春宵漫歩

夏目漱石

山里の朧月夜に乘じてそゞろ歩きす。觀海寺の石段を登りながら、「仰數春星一二三。」といふ句を得た。余は別に和尙に逢ふ用事もない。逢うて雜話をする氣もない。偶然と宿を出て、足の向くにまかせてぶら〳〵するうち、ついこの石段の下に出た。しばらく「不許葷酒入山門。」といふ石を撫でて立つてゐたが、急に嬉しくなつて登り出したのである。石段を登るにも骨を折つては登らない。一段登つて佇む時、何となく愉快だ。それだから二段登る。二段目に詩が作りたくなる。默然として我が影を見る。角石に遮られて、三段に切れてゐるのは妙だ。妙だから又登る。仰いで天を望む。寢ぼけた空の奥から、小さい星がしきりに瞬をする。句になると思つて又登る。かくして、

五山　建長寺・圓覺寺・淨智寺・淨明寺・壽福寺。

塔頭

洒落

觀海寺

余はたうとう上まで登り詰めた。

石段の上で思ひ出す。昔鎌倉へ遊びに行つて、所謂五山なるものをぐる〳〵尋ねて廻つた時、たしか圓覺寺の塔頭であつたらう、やはりこんな風に石段をのそり〳〵と登つて行くと、門内から黄色な衣を著た、頭の鉢の開いた坊主が出て來た。余は上る、坊主は下る。すれ違つた時、坊主が鋭い聲で、何處へ御出でなさる。」と問うた。余は只、「境内を拜見に。」と答へて、同時に足をとゞめたら、坊主はすぐに、「何もありませんぞ。」と言ひすてて、すたすた下りて行つた。あまり洒落だから、余は少しく先を越され

庫裡

た氣味で、段上に立つて坊主を見送ると、坊主はかの鉢の開いた頭を振りたて〳〵、遂に姿を杉の木の間に隱した。その間かつて一度も振り返りはしない。成程禪僧は面白い、きび〳〵してゐるなと、のつそり山門を入つて見ると廣い庫裡も本堂もがらんとして、人影はまるでない。

余はその時に心から嬉しく感じた。世の中にこんな洒落な人があつて、こんなに洒落に人を取扱つてくれたかと思ふと、何となく氣分が晴々した。禪を心得てゐたからといふ譯ではない。禪の「ぜ」の字も未だに知らぬ、唯あの鉢の開いた坊主の所作が氣に入つたのである。かうやつて、美しい春の夜に、何等の方針も立てずに歩いてゐるのは實際高尚だ。興來れば、興來るを以て方針とする。興去れば、興去るを以て方針とする。句を得れば、得た所に方針が立つ。得なければ、得ないところに方針が

立つ。しかも誰の迷惑にもならない。

「仰(イヲ)數春星一二三。」の句を得て石段を登り盡くした時、朧に光る春の海が帶の如くに見えた。山門を入る。絶句は纏める氣にならなくなつた。即座にやめにする。

石を發(た)んで庫裡に通ずる一筋道の右側は、岡躑躅の生垣で、垣のむかうは墓場であらう。左は本堂だ。屋根瓦が高い處で幽に光る。數萬の甍に數萬の月が落ちたやうだと見上げる。何處やらでしきりに鳩の聲がする。棟の下にでもゐるらしい。

雨垂落の處に妙な影が一列に竝んでゐる。木とも見えぬ、草では無論ない。感じからいふと、又平のかいた鬼の念佛が、念佛をやめて踊つてゐる姿である。本堂の端から端まで、一列に行儀よく竝んで、踊つてゐる。その影が、又本堂の端から端まで一列に行儀よく竝んで、踊つてゐる。朧夜にそゝのかされて、鉦も

絶句

又平
元祿頃の畫家、大津繪の祖。

撞木(しゅもく)も奉加帳も打捨てて、誘ひ合はせるや否やこの山寺へ踊りに來たのだらう。

近寄つて見ると、大きな覇王樹(さぼてん)である。高さは七八尺もあらう。絲瓜ほどな青い胡瓜を杓子のやうに壓しひしやげて、柄の方を下に、上へ〳〵と繼ぎあはせたやうに見える。あの杓子がいくつ繋がつたらお仕舞になるのかわからない。今夜のうちにも廂をつき破つて、屋根瓦の上まで出さうだ。あの杓子が出來るときには、何でも不意にどこからか出て來て、びしやりと飛びつくにちがひない。古い杓子が新しい小杓子を生んで、その小杓子が長い年月のうちにだん〳〵大きくなるやうには思はれない。杓子と杓子の連續が如何にも突飛である。こんな滑稽な樹は、世の中にたんとあるまい。しかも澄ましたものだ。

（漱石全集第二卷）

奉加帳

覇王樹

六五月の光

吉田絃二郎

吉田絃二郎
本名は源次郎、佐賀縣の人、明治十九年生、小説家、早稲田大學講師。

苗賣る男たちの爽やかな聲を聞く五月が來る。たゞ一荷の草花の苗に、五月の光も、ありがたさも、佗しさもこめられてゐる。からたちの花も白く咲いた。白いからたちの花の下蔭には、苗賣る男も、金魚賣る男も憩ふ。世を生きのびた人々の嬉しさが、しみ〴〵と嫩葉の下に動く。土も薫り、名もなき草花の露も、五月なればこそ尊く思はれる。

五月の若葉の蔭には白い花が多い。卯の花も咲き、野苺も咲き、野薔薇も咲く。母の柩を送つた夕暮の山徑に、雪のやうに白く咲いてゐた五月の野薔薇を思ひ出す。

奈良を出て、法隆寺あたりをさ迷うた頃、麥畑のところ〴〵に、眞白な罌粟の花を見出した日暮の旅を思ふ。淀川のあたり、月

さ迷うた罌粟の花

の下にほのかな白罌粟の野をさ迷うたのもそのころであつた。

馬醉木は寂しい花である。併し忘れられぬ花である。奈良の馬醉木、吉野の奥の西行庵の軒端の馬醉木、伊豆の山の馬醉木、思ひ出づることが多い。

五月の白い花で思ひ出すのは、北國のアカシヤの花である。立山・白山の雪はまだ眞白に輝いてゐる。山の麓では早苗田の上を燕が飛んでゐる。北の國のアカシヤは、雪の遠山をわびしき背景にして、雪よりも白くあはれな花を開く。五月の末、加賀の金澤を訪れたことがあつた。日本海を抱く五月の空は低かつた。憂鬱であつた。海は暗かつた。砂丘は砂丘へとつゞいた。低い砂丘であつた。疲れ果てた旅人を聯想させるやうな砂丘であつた。私はそこの懶げな砂丘の上に柔らかな影を投げてゐるアカシヤの木立を見出した。洞然たる北の海のわび

馬醉木

立山　富山縣南部の高山、海拔二九二米。

白山　石川縣と岐阜縣の國境の高山、海拔二七〇二米。

洞然

しさをこめて、砂丘のアカシヤは五月の夢よりも白く微に薫る。黄昏の眞白な藤に似て、藤よりもはかないアカシヤの花は五月の微風に散る。どんよりと鉛を沈めたやうな北の水平線のあたりから、眞つ白な翅の海鳥が、アカシヤの砂丘をめぐつてやがて暗い海に消える。

北の國の五月は雪の山を負うて、桐の花も咲き、山藤の花も咲く。はろ〴〵と山の雪を眺めつゝ、早苗田に立つ若い女たちの頭を掠めて、海鳥の群がかけめぐつてゐる。

沖深く沈めた鐘の音も聞かれさうな靜な五月の日の午後、北の國の少年たちは、アカシヤの窓に凭り、アカシヤの小徑に蹲踞して、山の雪を見る。かゞやかにも孤獨なる山の雪ではある。學校の窓にも、村役場の門のあたりにも、獵師町の古い倉のまはりにも、アカシヤの花は山の雪よりも悲しく旅人の心をひく。

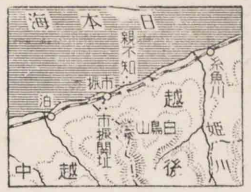
蹲踞

北の國の獵師町は、雪の山を負ひつゝ、死よりも靜な海光を北に待ちつゝ横たはつてゐる。白山や立山の懸崖が直に日本海に落ちる。その嶮しい崖に沿うて、たとへば運命の前に戰いてゐるやうな姿に見出さるゝのが北國の獵師町である。凄慘といはうか、賴りないといはうか。死の町である。併し、そこの死の町にも、桐が咲き、山藤がかゝり、アカシヤの花が薫る。五月の蒼空はかゞやく。

わたしたちは生きてゐるのだ。泣け、生きてあることの嬉しさに泣け。アカシヤは咲き、桐の花は咲き、白罌粟は咲く。

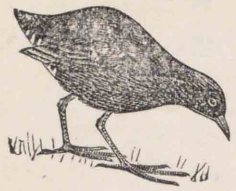
糸魚川の友人の家をたづねたのは五月の末であつた。窓からは山の雪が見えた。「つい二三箇月前までは、電柱も、この窓も、雪に埋まつてゐたのだよ。」といひながら、友人は山をながめた。そこにもアカシヤの花は雪よりも白く咲いてゐた。糸魚川を

友人
相馬御風のこと。



親不知
新潟縣西頸城郡市振・外波兩村間の海岸、北陸線中の難所。

市振の關
新潟縣西頸城郡にある。



たゆたげ
水鷄

過ぎて、親不知のトンネルをくゞつて、間もなく市振の關の跡を過ぎた、雪の山をながめつゝ。そこでも桐の花は盛りであつた。海はたゆたげにかゞやいてゐた。新潟の町を訪ねたのも五月であつた。北の國の村々は桐の花につゝまれてゐた。新潟の柳の町を歩いて、幾度か葦の葉のかゞやかな信濃川の漫々たる水に魂を打たれた。日の傾くころ砂丘に立つて佐渡が島を眺めた。北の國の夜の空は、秋のごとく星も澄んでゐた。わたくしは五月の流を愛する、光を愛する。藻の底の游魚、燈心草のそよぎ、わすれられたやうに咲く五月の白い野苺の花。われ等生きてあればこそ。

五月の太陽は、五月の微風は、五月の大河は、一切の人間を嬰兒に還らしめる。水鷄の聲、葦の葉の輝き、細なる蟹の戯れ！　生きてあることのうれしさ。魂はすゝり泣く。

（大阪朝日新聞）

安倍能成
松山市の人、明治十六年生、哲學者、京城帝國大學教授。

「新綠から與へられる充實感」

七　新綠の野

安倍能成

新綠の野の景色は非常に僕の心を引く。目もさめる樣な綠の野は、晴れた日も、曇つた日も、雨の降る日もよい。殊に晴れた日の朝、日のまだ多く上らぬ、空氣の清らかな、心の新しい時に、生命に充ちた新綠に對する心持は實に何とも言へない。僕は近年僕の生活になかつた充實を新綠から與へられて居る。

新綠の梢を仰いで僕の胸の中に充ちる思ひは、一種の驚歎である。讃美である。新綠に對すると、僕の眼にはいつしか涙がこみあげて來る。僕は何よりも今年の新綠が、僕のこの四五年の生活に殆ど涸れて居た悲哀の涙を復活させてくれる緣となつたのが嬉しい。若い楓の葉をすかして日光の洩れる時の樣な色調が、和やかに僕の腸まで滲みて來る樣な氣がする。爽涼

「新綠に催される悲哀の涙」

愛著

「新綠の持つ若い力」

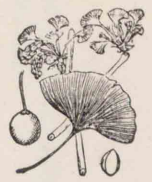
の感に濕潤の氣を缺かぬ樣な一脈の悲しみが、涙に少し熱くなつた僕の眼邊から、しづかに全身に廻つて行く樣に思はれる。靜な併しながら緊張した、充實して居て而も寂しい悲哀である。自然の懷に抱かれ、人の世を厭はずして悲しむ樣な心持である。新綠に催された涙を靜に胸に湛へて、頭を垂れつゝ晩春の野に樣々な瞑想に耽るのは、心ゆくことである。

あゝ若き自然の力、新綠の野にはこの力が溢れて居る。晩春の野を吹く風は、この若き力の包むに餘る歡喜を運びつゝある かの如く思はれる。風にゆらぐ樹々の梢に對しては、いつまでもこの刹那を持續したいといふ愛著が起る。僕はこの力を讃美したい。

新しい若芽が段々と硬くなり、黑くなつて來るのは悲しいものである。花の散るのよりもこの方が大分惜しい。花は散るけれど、葉は殘つて居るからかも知れぬ。木々の葉の中にも一番この感じの多いのは櫻である。華やかな花の色に春の盛りを示したその梢は、眞先に現實的な夏の色となるのがはかないやうに思はれる。枳殼の芽の出たての色の若々しい新しい心持。あの固い木針も、その頃は指の押へるまゝに、和らかに甘えたやうに頭を下げるのである。東京の近郊に木の多いのは何よりも愉快である。中野のステーションから出て、二三町も來て右手の方を見廻すと、水田の彼方に麥畑が見え、その向うにすぐ幾重の木々の梢が見える。松の木がむら〳〵と集まつた向うに、山毛欅の淺綠色の新しい梢が高く聳えて居る。そのまたこちらに杉の林があると、その隣には竹藪がある。竹藪の新しい葉の色が、この頃は柔らかい潤ひのある茶褐色に見える。

要するに新綠はいゝ、實にいゝ、たまらなくいゝと言つたら濟

中野　東京府豐多摩郡中野町。



「感傷的な心持」
公孫樹

むのか知らぬが、それだけでは物足りない。僕はこの頃新綠に對すると、いつも一種の感傷的な心持になつて來る。

公孫樹は面白い木だ。秋になつて、黃色い葉の梢に夕日を浴びた雄姿は格別だけれども、春の初め、小さな芽があの大きな體軀に出て來た時分には、大男が尻のあたりで細い帶をちよこなんと結んで居るやうな滑稽な所がある。柿若葉といふことをいふが、此の頃の柿の葉の色は實に驚くべきものである。黃色の勝つた潤澤の多いあの若葉が、晩春の日を浴びて立つて居る姿は、實に魂を奪ふばかりである。櫟の木は平凡で他の奇がないやうで居て、中々捨て難い。この木の芽を吹くのは外の木よりは遲い。外の木が已に綠になつてゐる時分、やう〳〵この木が芽を出して來る。少し遠方から見ると、綠の色がわづかに薄く櫟林に動いて居る樣が、如何にも謙遜な、ひかへ目な樣に感ぜ

「若葉の下道を踏む心よさ」

られる。この頃はもうはや梢一ぱいの葉となつた。僕は日に青くすいて見えるこの葉の下道を、さら〳〵と梢を吹くこの頃の心持よい風に吹かれながら、ゆらぐ葉影を踏んで行くのが愉快でたまらぬ。

幾叢の森に圍まれた麥畑の麥も、この頃は穗を出した。ずつと見渡すと、畑から森から、綠の色の見えるあたりに、地の下からむら〳〵と力が溢れ出て居る樣に感ぜられる。僕はこれを見ると、雪の上に轉ぶ狗兒の樣に、ころりと麥畑の上に引つくりかへつてやりたいやうな原始的な氣持になつてしまふ。

朝など少し薄暗い樹蔭の道を行く時に、ふと傍の杉垣の黑色の中に、灯のやうに、新しい芽が去年の舊い葉の上に點々と出て居るのを發見するのも一種の驚きである。垣の隙間から新しい筍が竹藪の中に生え出したのを見ても、何だか非常に珍らし

い、新しい心持がする。

自分の實生活に對する一種の不安を感じて、いやな氣持を抱いて、この新綠の野に對した時、何故にこの美しい天地を外にして下らぬことを考へたり、したりするのだらうと思ふ。そして自分は一生何物をも背負はずに、森から森へと漂泊して行つたらどうであらう、寂しい、そして悲しい心に、積もり重なつた綠の梢から洩れる日の光を仰ぐ時の氣持はどうであらうなどと空想を馳せても見る。自然の兒、人間は自然の兒であるべきものではないのか。嗚呼自然の兒、如何に簡單にしてわづらひなき名よ。

（山中雜記）

「自然の兒」

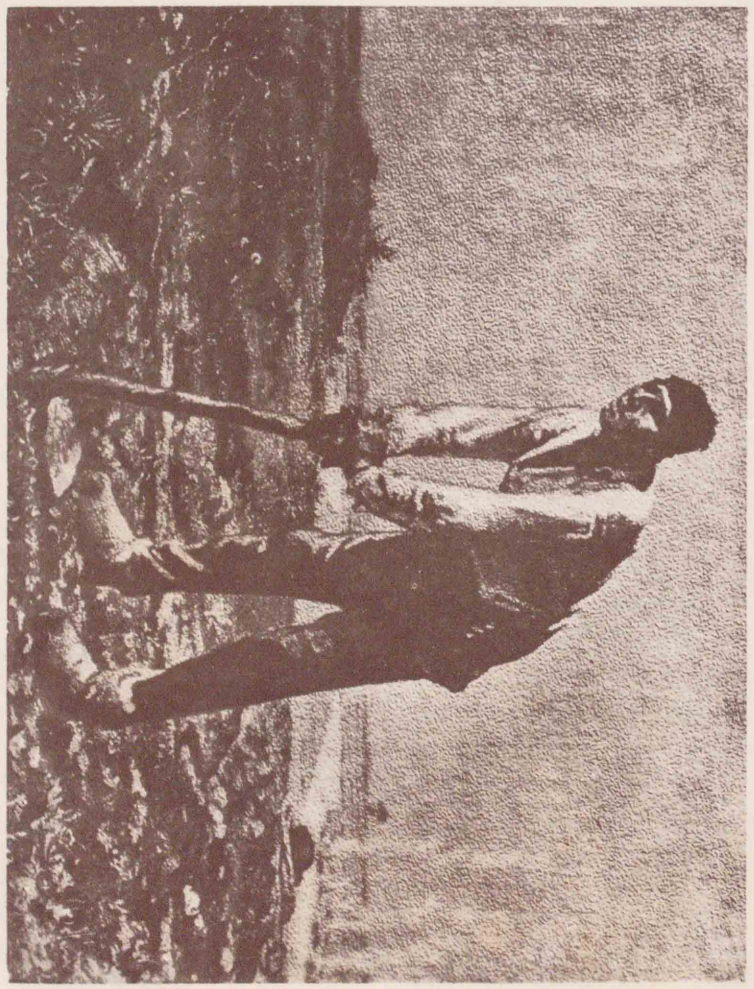
八 耕人

川路柳虹

土は固い、土は冷たい、まめやかの耕人よ、
きみの腕のくだくるまで鋤をば揮ふ耕人よ。
空は銀色の黄昏、鈍い石榴を滲ました日のひかり。
影かとばかり枯れた梢も交じる遠い森、
あゝ無窮の果までも肩をのばし、
その伸びやかな體軀を横たへた土よ、地平よ、
遮るものもない空に浮く鋤もつ人の姿。
「永遠」をこぼちゆく「時」のごとく、

しづかにおごそかに默つた足どり。
土は固い、土は冷たい、まめやかの耕人よ、
君の瞳はいつもたゞ地を映す、
また日光と雨と霧とを、雲と虹と星とを窺ひ見る。
けれども君の腕はいつも地に下りる、
黑いふかい土の上、また搖れる麥の上、
黃金の穗の上、碧玉の野菜の上に、
さながら珠玉を覓めて海に下る人の如く。

土は固い、土は冷たい、まめやかの耕人よ、
君はよしないこの世の「理」を知る。



（ミレー畫）

苦しみを嚙み、苦しみに耐へ、さては鋤振る腕の瘤をば愛する。
君の手は暗い畝のふちに泥を黄金にかへすまで、
青い葡萄を紫の酒に釀すまで、土を踏む耕人よ、
土は聖い、土は樂しい。
あゝ、その土壤の下に絶えず流れる溫い血の音――君の踏む
足の下に、
君の瞳に、君の腕に、あゝ君の鋤持つ故に、
苦患は愛となる、土は綠となる。

（川路柳虹詩集）

和辻哲郎
兵庫縣の人、明治二十二年生、京都帝國大學教授。

「永い馴染である松の樹の全體」

しをらし

漂うて

九樹の根

和辻哲郎

松の樹に圍まれた家の中に住んでゐても、松の樹の根が地中でどうなつてゐるかはあまり考へて見た事がなかつた。美しい赤褐色の幹や、わりに色の淺い清らかな綠の葉が、永い馴染である松の樹の全體であるやうな氣持がしてゐた。雨が降ると、幹の色はしつとりと落ちついた潤ひのある鮮やかさを見せる。綠の葉は涙に濡れたやうなしをらしい色艶を增して來る。雨のあとで太陽が輝き出すと、早朝のやうな爽やかな氣分が樹の色や光の內に漂うて、いかにも朗らかな生の喜びがそこに躍つてゐるやうに感ぜられる。折節可愛い小鳥の群が活き〳〵した聲で囀り交はして、綠の葉の間を樂しさうに往來する。——それが私の親しい松の樹であつた。

「地上の枝幹の總量よりも多いと思はれる根」

然るに或時、私は松の樹の生ひ育つた小高い砂山を崩してゐる處に佇んで、砂の中に喰ひ込んだ複雜な根を見ることが出來た。地上と地下との姿が何と甚しく相違してゐることであらう。一本の幹と、簡素に並んだ枝と、樂しさうに葉先を揃へた針葉と、——それに比べて地下の根は、戰ひ、もがき、苦しみ、精一杯の努力をつくしたやうに、枝から枝と分れて、亂れた女の髮の如く、地上の枝幹の總量よりも多いと思はれる太い根、細い根の無數を以て、一齊に大地に抱きついてゐる。私はこのやうな根が地下にあることを知つてはゐた。しかしそれを目の前にまざまざと見たときには、思はず驚異の情に打たれぬわけには行かなかつた。私は永い馴染の間に、このやうな地下の苦しみが不斷に彼等にあることを、一度も自分の心臟で感じたことがなかつたのである。彼の苦しみの聲を聞いたのは、時折に吹く烈風の

「地下の營」

高野山
和歌山縣伊都郡の南部にある山、僧空海此の地に金剛峯寺を創む。

際であつた。彼のくるしさうな顏を見たのは、濕りのない炎熱の日が一月以上も續いた後であつた。しかしその叫び聲や萎れた顏も、その機會さへ過ぐれば、すぐに元の快活に歸つて、苦しみの痕を滅多に殘さない。而も彼等は、我々の眼に祕められた地下の營を、一日も怠つたことがないのであつた。あの美しい幹も葉も、五月の風に吹かれて飛ぶ綠の花粉も、實はこのやうな勞苦の上にのみ可能なのであつた。

此の時以來、私は松の樹のみならず、あらゆる植物に心から親しみを感ずるやうになつた。彼等は我々と共に生きてゐるのである。それは誰でも知つてゐる事だが、私には新しい事實としか思へなかつた。

私は高野山へ登つた。さうして不動坂にさしかゝつた時に、

「莊嚴な心持」

弘法大師
僧空海の諡、眞言宗の祖、俗姓は佐伯氏、讃岐國の人、承和二年（一四九五）寂、年六十二。

金剛不壞

「漂うてゐる生々の氣」

亭々
強靱

數知れず立並んでゐるあの太い檜から、何とも云へぬ莊嚴な心持を押しつけられた。なるほどこれは靈山だと思はずにはゐられなかつた。此の地を選んだ弘法大師の見識にも、つく〴〵敬服するやうな氣持になつた。

それは外郭に連なる山々によつて、平野から切り離された急峻な山の斜面である。幾世紀を經て來たか分らない老樹たちは、金剛不壞といふ言葉に似つかはしいほど、どつしりとした、迷ひの無い、壯大な力强さを以て、天を目指して直立してゐる。さうして樹々の間に漂うてゐる生々の氣は、ひた〳〵と人間の肌にも迫つて來る。私は底力のある興奮を心の奥底に感じ始めた。

私の眼はすぐに老樹の根に向つた。地下の烈しい營は既に地上一尺の處に明に現れてゐる。土の層の深くないらしい此の山に育つて、あの亭々たる巨幹を支へるために、太い强靱な根

は力かぎり四方へ擴がつて、地下の岩にしつかりと抱きついてゐるらしい。あの巨大な樹身にふさはしい根は、一體どんなになつてゐるだらう。殊に相隣つた樹の根と入りまじつて、薄い地の層の間に複雜に絡み合つてゐる有樣は、想像するだけでも我々に驚異の情を起させる。

確に山は烈しい生の力の營によつて、殘る所なく包まれてゐるのである。我々はそれを肉眼によつて見る事は出來なかつたが、しかし一種の靈氣として感ずることは出來た。隱れたる努力の威壓が神祕の影をさへ帶びて、我々に敬虔の情を起させずにはゐなかつたのである。

「一種の靈氣」

「根の浅い自分」

私は老樹の前に根の浅い自分を恥ぢた。さうして地下の營に沒頭することを自分に誓つた。今氣づいてもまだ遲くはない。

成長を欲するものは先づ根を確におろさなくてはならぬ。上に延びる事をのみ欲するな。まづ下に喰ひ入ることを努めよ。

早年にして成長のとまる人がある。根をおろそかにしたからである。

四十に近づいて急に美しい花を開き、豐な實を結ぶ人がある。下に喰ひ入る事に沒頭してゐたからである。

私の知人にも、理解のよい頭と、感激の強い心臟と、能く立つ筆とを持ちながら、まるで勞作を發表しようとしない人がある。彼は今生きることの苦しさに壓倒せられて、自分のやうなものは生きる値うちもないとさへ思つてゐる。しかしそれは彼の

「根の確な人」

「雄大な根の營」

根が一つの地殼に突き當つて、それを突破する努力に惱んでゐるからである。やがてその突破が實現せられた時に、どのやうな飛躍が彼の上に起るか。――私は彼の前途を信じてゐる。根の確な人から貧弱な果實が生まれる筈はない。

古來の偉人には雄大な根の營があつた。それ故に、彼等の仕事は味はふほど深い味を示してくる。

現代にはたとへ根に對する注意が缺けてゐないにしても、もすれば、それが小さい植木鉢の中の仕事に墮してゐはしないか。いかにすれば珍らしい變種が出來るだらうかとか、いかにすれば豫定の時日の間に注文通りの果實を結ぶだらうかとか、すべてが餘りに人工的である。限られた土壤の中で、纖細に發達した根は深い大地に移されても、自由に其の手足を伸ばすこ

「根に對する崇敬」

「汝の根に注意を集めよ」

とが出來ない。

天を衝かうとするやうな大きな願望は、いぢけた根からは生まれる筈がない。

偉大な物に對する崇敬は、また偉大なる根に對する崇敬であることを考へて見なければならぬ。

根のためには、出來るならば地の質を選ばなくてはならぬ。果實のためには、出來るならば、根を培ふ肥料を選ばなくてはならぬ。

教養は培養である。それが有效であるためには、先づ生活の大地に喰ひ入らうとする根がなくてはならぬ。

汝の根に注意を集めよ。

（偶像再興）

徳富蘇峰
名は猪一郎、熊本縣の人、文久三年(一八六三)生、評論家、歴史家。

舜何人ぞや
孟子の語。

雪舟
本名は小田等揚、岡山縣の人、山水畫の名人、永正三年(一五〇六)歿、年八十七。

ラファエル
伊太利の畫家。(西暦一四八三—一五二〇)

杜少陵(トセウリヨウ)
名は甫、少陵はその號、支那唐代の大詩人。

沙翁
シェクスピア、英國の劇作家。(西暦一五六四—一六一六)

メンデルゾーン
ドイツの音樂家。(西暦一八〇九—一八四七)

ワグネル
ドイツの歌劇作家。(西暦一八一三—一八八三)

一〇 向上

徳富蘇峰

人には、天分あり。何人も、如何なる方面に向ひても、同一に長進せんとするは思ひもよらぬ事なり。「舜何人ぞや、我何人ぞや」とは、男兒發憤の意氣を示したる豪語なれども、舜には舜の天分あり、我には我の天分あり、我の舜たり難きは、猶、舜の我たり難きが如し。横綱には生まれながら横綱の素質あり、本因坊には生まれながら本因坊の素質あり、雪舟にても、ラファエルにても、杜少陵にても、沙翁にても、或は、メンデルゾーン・ワグネルにても、苟くも第一流の達人には、自らその天分ありて、之に加ふるに修養を以てしたるなり。その素質ありてその域に達せざるは、これ修養の足らざればなり。

人間は、唯、我が最善の力を竭くして、達すべき所に達すべきの

基督
ユダヤの人、キリスト教の教主。

釋迦
中印度、カビラ王國の淨飯王の子、佛教の祖、(西暦前三六六)入滅、年八十。

孔子
名は丘、字は仲尼、支那魯の人、儒教の祖。周の敬王四十一年(西暦前四七九)卒、年七十三。

誇大妄想狂

綽々乎

[向上の意義]

み、是に於てか、向上の工夫は出で來らざるを得ず。向上とは、總ての人を驅りて、基督たり、釋迦たり、孔子たらしめんとするにあらず。吾人が三聖たる能はざるは、猶、吾人が沙翁たり、少陵たり、雪舟たる能はざるが如し。

徳富蘇峰

人、往々、天分の先天的に存するを無視す。此に於て、動もすれば誇大妄想狂者となり、然らざれば、自ら失望して窮途の餓鬼となる。人若し向上せんと欲せば、天分の範圍内に於て向上せよ。綽々乎として、進修の餘地存せずんばあらず。

所謂己を知るとは、我が天分を知るなり。所謂己を修むとは、

精進
正鵠

遑々
争うて
全うす

「向上の快樂」

我が天分内に於て精進するなり。向上の正鵠、斷じて是に在り。若し徒に他人が大臣たるが故に、我も亦大臣たるべしといひ、他人が元帥たるが故に、我も亦元帥たるべしといはば、終生遑々、唯他人と長短を争うて、これ暇あらざらんとす。何を以て我が天分を全うするを得んや。

向上の正鵠一たび定まる、故に向上の快樂あるなり。人間の行路は圓環を行くが如く、唯幾回となく同一の範圍を往來すべからず。宜しく正面に目的を定め、之に向ひて前進すべし。而して、その努力がこれ快樂なり、その努力の結果がこれ快樂なり、その努力の結果の豫期がこれ快樂なり、昨日の我に比すれば、今日の我には一段の進歩あり、これ豈悦ばしからずや。凡そ世に快樂多きも、向上の快樂の如く、清且高なるものはあらじ。

しかも、向上は自己の勢力を周圍に擴大する意義にのみ專用

マルクス＝オウレリウス
ローマの帝王。（西暦一二一—一八〇）

全幅

周匝

すべからず、須く自己を完全ならしむる點に於て、その力を用ひざるべからず。凡そ外に自己を擴大せんと欲せば、宜しく内に自己を完全ならしめざるべからず。言ひ換ふれば、自己の性情を錬磨し、自己の性癖を矯正し、自己をして少くとも中心に大なる悔恨なからしむるだけの工夫を要す。余嘗て、羅馬の賢帝マルクス＝オウレリウスの、「汝の全幅の注意を眼前の事物に與へよ。苟くも之を閑却せんか、これ自ら不幸を招くなり。何となれば、汝は今日の過失を今日に改むることを得ずして、之を明日に遷延せしむればなり。」との語を讀み、轉、その平凡に驚きたり。今にしてこれを思へば、哲人の用意實に周匝なるを見る。苟くもこの心を以て、日常の事物に處せんか、一日には一日の向上あり、一年には一年の向上あり。終生此の如くならば、所謂聖人たらざるも、亦聖人の徒たるに怍づることなかるべし。

「自己の天分を完からしむる義務」

凡そ、一生を無益に消費すると、有益に消費するとの差別は、一生の總勘定によりて定まるが如しと雖も、その實は、向上心を有すると否とによりて決せらるゝものといふも過言にあらず。縱令總勘定に於ては剩す所多からざるも、若し、向上心を持して一生を始終せんか、一日の生活には必ず一日の意義あり。苟くも意義ある生活は、決して無益の生活なりといふべからず。人はその同胞に盡くすの義務あり、卽ち自己の天分を完からしむるの義務あり、向上の生活は、主として自己の天分を全からしむる所以の生活たるを知らば、之に加ふる有益なる生活は斷じて無かるべきなり。

ものの哀
齒德
遜讓
痛痒
なりなん

一一 仁は心のいのち

心に仁あるは、人に元氣あるが如し。人の元氣は脈に現れ、心の元氣は愛に現る。脈の通ひ絶ゆれば人死する如く、愛の理滅ぶれば心死すほどに、仁は心のいのちとも申すべし。それ、心は活物なるにより、人に情あり、ものの哀を知りて、常に生きたるものぞかし。よりて父母を見ては自然に親愛し、親愛せざるに忍びず。君長を見ては自然に尊敬し、尊敬せざるに忍びず。齒德を見ては自然に遜讓し、遜讓せざるに忍びず。義を聞いては必ず感ずることを知り、不義を聞いては必ず恥づることを知る。若し情なく哀を知らずば、その心頑然として鬼畜木石の如く、痛さ痒さも知らずなりなん。何をもて自愛し、何をもて恭敬せん。義を聞いて感ずることなく、不義を聞いても恥づることなかる

物語こそ候へ

天德寺
豐臣時代の武將佐野了伯のこと、慶長六年(三六一)歿、年四十四。

佐佐木四郎高綱
源頼朝の臣、宇治川の戰に梶原景季と先陣を爭つた。

雨雫と泣く

那須與市宗高
源義經の臣、屋島の戰に扇の的を射落した。

べし。これをもていふに、仁義禮智いづれも心の德にして、各、その理わかるれども、その本源は仁に外ならず。人として不仁なれば、義も、禮も、智もそのさまあり、その用ありといへど、所詮内より生ぜねば、眞の德にあらず、公の理にあらず。この故に仁に心の德といひて、外に德をいはず、仁に愛の理といひて、外に理をいはず、そのいはざるところに深き意ありと知るべし。

それにつきて、一つの物語こそ候へ。相州北條の幕下、佐野の城主天德寺、豪健の勇將なりしが、或時琵琶法師を招きて、平家を語らせて聽きけるに、未だ語らぬ先に琵琶法師にいひけるは、「某はたゞ哀なることを聽きたくこそあれ。その心得して語り候へ。」といへば、法師「心得候。」とて、佐佐木四郎高綱が宇治川の先陣を語りけるに、天德寺哀がりて、雨雫と泣きけり。さて、「今一曲前の如く哀なることを聽きたし。」といへば、那須與市宗高が扇

いかが聽きつる

蒲冠者
頼朝の弟範頼。

梶原
梶原景季。

哀ならぬことかは

の的を語りけるに、平家半ばより、天德寺また落涙數行に及べり。後日に家臣の輩に、「過ぎし日の平家はいかが聽きつる。」といふに、家臣ども、「最もおもしろきことにて候。但し我等ども一つ心得ぬことこそ候へ。前後二曲共に勇烈なることにて、哀なる方は少しも候はぬに、君には御感涙に咽ばれて候。これはいかがのことにて候ふにや、今に不審なることにいづれも申し合ひ候。」といへば、天德寺驚きて、「たゞ今までは各をたのもしく思ひ候ひしが、今の一言にて、さて〳〵力を落して候。まづ佐佐木が先陣をよく合點して見られ候へ。頼朝舍弟の蒲冠者にも賜はらず、寵臣の梶原にも賜はらぬ生嗟を、高綱に賜はるにあらずや。さればそのかひもなく、この馬にて宇治川を先陣せずして、人に先を越されなば、必ず討死して再び歸るまじと、頼朝に暇乞して出でける、その志を察して見られよ。哀ならぬことかは。」とて、屢、

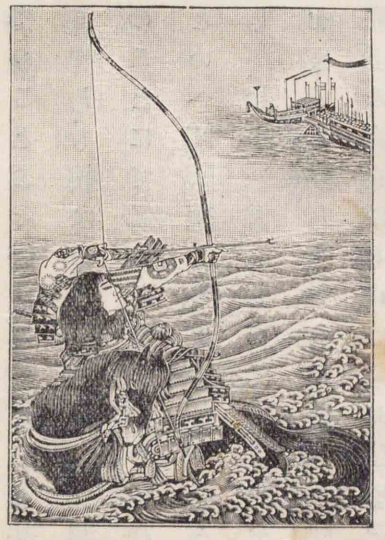
名折れ

葛飾北齋

通稱中島秀一、德川末期の畫家、嘉永二年(一八五九)歿、年九十。

武邊

涙を拭ひつゝ、暫しありていひけるは、「また、那須與市も大勢の中より選ばれて、たゞ一騎陣頭に出でしより、馬を海中に乘り入れて的に向ふに至るまで、源平兩家鳴りを靜めてこれを見物するに、若し射損じなば、身方の名折れたるべし、馬上にて腹搔切つて海に入らんと覺悟したる心を察して見られ候へ。武士の道ほど哀なるものは候はず。某は毎に戰場に臨みては、高綱・宗高が心にて槍を取り候故、右の平家を聽くときも、兩人の心を思ひやりて、落涙に堪へざりき。然るに、各〻には哀になかりしと申さるゝにつけて思ふに、各〻の武邊はたゞ一旦の勇氣にまかせて、眞實より出づ



那須與市（葛飾北齋筆）

迷惑す

武邊

惻隱

油然

忍びざるの心

疑かあるべき

駿臺雜話

五卷、室鳩巢の學術・道德に關する隨筆書。室鳩巢―名は直清、江戸の人、儒學者、享保十九年(一七三四)歿、年七十七。

るにてはなきにやと思はれ候。それにてはたのもしからずこそ候へ。」といひしかば、諸臣皆迷惑して辭なかりしとなり。

これ、天德寺が武邊は涙より出づれば、もとより仁者にはあらねど、武の一筋は仁に根ざして、惻隱の心より發するにあらずや。然るに武は殺獲のことにて、手荒き道なれば、いはば仁とは黑白のたがひあるやうなれども、仁より出でざるは、眞の武にあらず。況やその餘のことは、なほもて知るべし。されば忠孝も禮儀も、文道も武道も、內より油然として潤ひわたりて發するにあらざれば、眞のものにあらず。これ則ち前にいひし人に情あり、ものの哀を知るの心なり。すべて諸の言行共に、義理に當りては悉く忍びざるの心より出でて、天德寺が涙をこぼすやうにだにあらば、これ心德の全きなり。仁者といはんに何の疑ひかあるべき。

（駿臺雜話卷二）

高濱虚子
名は清、松山市の人、明治七年生、小説家・俳人。

畢竟

縷々

一三　俳句に就いて

高濱虚子

俳句は十七字の詩であるといふことは解りきつたことのやうであるが、私はこゝに改めて、「俳句は十七字の詩である。」といふ事を、第一にはつきり言つて置く。

和歌は千數百年の歴史をもつ短い詩である。この和歌から連歌が起り、連歌から俳諧となり、俳諧から俳句が生まれて來た。この變遷は、少くとも百年・二百年の年月を經て成つたものであるが、畢竟、俳句は和歌の上の句が獨立して出來たものである。隨つて、和歌では五七五七の調であるが、俳句は五七五の調である。

この和歌の五七五七七といふ調子は、或感じを縷々として述べるに適してゐる。たとへば、

あまの原
安倍仲麻呂の歌。（古今集）
安倍仲麻呂―中務大輔船守の子、靈龜二年（一七六）遣唐留學生、在唐五十餘年、寶龜元年（一四〇）歿　年七十。

芭蕉　筆

古池や蛙飛びこむ水の音　はせを

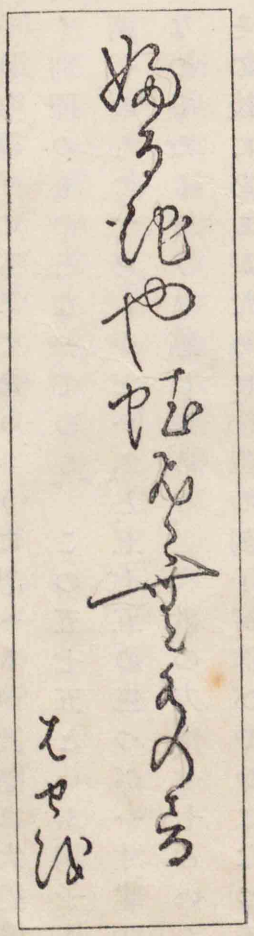
芭蕉
松尾芭蕉、伊賀の人、俳壇正風の祖、元祿七年（一六九四）歿、年五十一。

綿々

あまの原ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に出でし月かも

といふ歌の如きは、たゞ月に對し、海原遠く離れた故山を偲ぶものであるが、かく三十一字になつて見ると、如何にも遣るせない情緒が綿々として出てゐるやうな感じがする。これは五七五七七の調子が、自然に縷々としてその感じを述べるに適してゐるからである。ところが、俳句になると、

古池や蛙飛びこむ水の音



芭蕉筆

渾然

といふやうに、和歌では下の句として缺くことの出來ない七七の文字が省かれて、單に五七五といふ調子であるから、大に面目を改めて、ぼく〳〵した調子になつて來る。上に述べたやうに、俳句も和歌の上の句だけを取つたものであるから、やはり和歌のやうな調子のものでありさうに思へるが、實際は大變違つて、全く別種のものとなつてゐる。この五七五といふ調子は、どんな調子のものであるかといふと、五七五の三つが一寸離れ〴〵になつてゐるやうな感じがある。和歌の方は、七七といふ文字がその後にあるがために、全體の調子が伸びやかになつて、渾然として一つに溶け合つてゐるのであるが、その七七の文字が無くなつて、單に五七五だけになると、その五と七と五とが各、獨立して、別々のものとなつて行かうとする傾向がある。これが和歌と俳句との大變な相違となるのである。

奈良七重
芭蕉の句。

即ち、この古池の句にしても、先づ「古池や」といふ五字で、讀者に古池の景色を想像させ、次に「蛙飛びこむ水の音」といふ十二字で、蛙の飛び込む水音がするぞと、第二段の想像をさせるといふ順序になつて來る。換言すれば、古池の句の場合は、初めの五字だけが獨立してゐて、あとの七と五とは連なつてゐるのである。

奈良七重七堂伽藍八重櫻

といふやうな句になると、五と七と五と皆離れ〴〵になつてゐる。この句意は後に述べよう。

和歌は「テニヲハ」の文學といつてもよい程に、「テニヲハ」をやかましくいふが、これもやはり、綿々として盡きぬ情を歌ふに適した文學だからである。然るに、俳句では「テニヲハ」は勿論、說明的な言葉は出來るだけ省略し、「や」とか「かな」とかいふ特別の助辭を使用する。隨つて「テニヲハ」には重きを置かない。この俳句の

調子から來る特色が、情を述べるのにはどうも不適當なのである。

この情を述べるに幾分でも不適當な文學である俳句の使命は、然らば何であるかと言へば、それは景色を描くといふ點にある。恰も繪畫のやうに、景色を言葉で、文字で、描くのである。

元來、文學は言葉で出來てゐるもので、言葉は時間的のものであるから、感じを順々に歌つて行くとか、又は事件を順々に述べて行くとかいふのには適してゐる。長い小說のやうなものでも、短い和歌のやうなものでも、或事件の推移を寫すとか、或感じを述べるとかいふ性質のものである。それが畫であると、目に見る或瞬間の景色を畫面に描き現すものであつて、時間的でなくて、全く空間的のものである。然るに、俳句は意外にも、――私は「意外にも」といふ――繪畫に近いものとして存在してゐる。

空間的描寫

季題

併しながら、景色を描くといつても、文學であるから繪畫とは全然同一にはならないが、大體に於て、文學本來の性質たる時間的變化を描くに適しないで、空間的描寫に適してゐると言へようと思ふ。これは五七五といふ調子と、切り詰めた短い詩形とから起つた當然な結果で、これがやがて一方に大なる特色を形造つてゐるのである。尤も、かういへばとて、俳句も文學であるく、又古來さうした俳句は全く無いなどといふのではない。以上、勿論、感じとか事件とかを述べてはならぬと言ふのではなく、又、俳句には「季題」といつて、春夏秋冬の季を述べなければならぬ事になつてゐるが、これは景色を描く上には當然の要求である。何故、なれば、四季を超越した景色といふものは、全然この世界には存在しないからである。次に、實際の句に就いて說明を二三試みよう。これは極端な例であるが、

女郎花腰黑茶碗髯奴

といふのがある。これはどんな意味かといふと、女郎花が咲いてゐる、その側で髯の生えた奴が腰黑茶碗で飯を食つてゐるといふのである。これは前にも述べたやうに、五七五の調子から自然に離れ〴〵になつてゐるのである。即ち、女郎花・腰黑茶碗・髯奴と、別々に離して述べてあるので、たゞ我々が心の中でその離れ〴〵になつてゐる物に連絡をつけて、女郎花が咲いてゐる側で、髯奴が腰黑茶碗で飯を食つてゐる樣子を思ひ浮べるのである。これは繪畫にすれば、女郎花と腰黑茶碗と髯奴との三つの別々な物が、一畫面に描き現されてゐる譯になる。同じやうな極端な例であるが、前に擧げた芭蕉の句、

奈良七重七堂伽藍八重櫻

といふのは、奈良は古の都であつて、「奈良七重」は、人家が澤山立ち

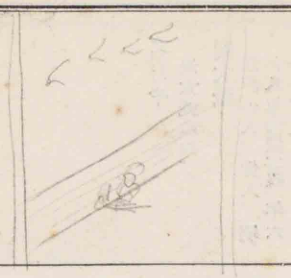
名月や
炭太祇の句。

炭太祇
江戸の人、俳人、明和八年(一七七一)歿、年六十三。

並んで賑やかであつたといふことをいひ、「七堂伽藍」は、立派なお寺の大きなのがあり、そして「八重櫻」は、奈良は八重櫻の名所であるから、櫻の盛りの奈良といふ事を現した句である。この句はどうかといふと、一寸とりとめのつかないやうな句らしく考へられるが、我々は勝手に想像して、一幅の古の奈良の畫を描き出すのである。これらの句は共に極端な例であるが、次は、

名月や舟なき磯の岩づたひ

といふ句に就いて考へて見よう。こゝに「名月や」といふのは、空に名月がかゞやき渡つてゐるといふので、「舟なき磯」は、舟が一艘も見えない磯といふのであり、「岩づたひ」は、その磯の岩の上を人が傳うて歩いて行くといふのである。これにも言葉が大變に省略されてゐる。私は前に和歌は「テニヲハ」の文學であると言つたが、俳句では「テニヲハ」のみならず、その他の色々な言葉も省



蕪村　谷口長庚、攝津の人、俳人、天明三年（一七八三）歿、年六十七。

略される。羇奴の句も、たゞ名詞をつゞけたばかりであり、奈良の句も、名詞ばかりである。岩づたひの句はどうかといふと、何も別にいつてはゐないが、月の好い晩に岩づたひに人が歩いて行き、舟は一艘もなくてさびしい、といふことが想像される。して見ると、この句に於ても「テニヲハ」のみならず、如何にも多くの言葉が略され、簡略になつてゐるのが解る。このやうに景色を描くといふ點に於ては繪畫と同じやうであるが、俳句の方には、岩づたひに歩いて行くといふやうな時間的なことも吟じ得るが、畫の方にはそれが全く出來ない。

蕪村の句に、

水鳥や舟に菜を洗ふ女あり

といふのがある。これは、水鳥が浮いてゐると、舟の中で女が菜葉を洗つてゐる景である。京都の賀茂川などには、よく菜を洗つてゐる女を見受けるが、場所は何處と限らない。舟で女が菜を洗つてゐる。菜を洗つてゐる女に特別に何の關係があるといふのでもなしに、水鳥が浮いてゐる、といふ景色で、全く繪畫と同じであり、卽ち、舟に菜を洗ふ女と水鳥とで、近景と遠景とを描いてゐるのである。

かういふ風に、俳句は和歌の上の句から獨立した十七字から成つたものであるが、それが十七字になつて今日に到るまでに、十七字の詩として獨立する必要上、和歌の範圍を脱して、別に景色を描くといふ一つの大きな特色を成したのである。然もこれは偶然に成つたのではなく、五七五といふ調子から來た當然の結果である。

（講演筆記）

荻原井泉水
名は藤吉、東京市の人、明治十七年生、俳人。

一茶
通稱小林彌太郎、信濃の俳人、文政十年(一八二七)歿、年六十五。

因襲

一三 一茶の童心

荻原井泉水

一茶といふ人は尊い人であると私は思ふ。それは彼がいつまでも子供らしさを失はなかつたところにある。

人は誰でも齢を取つていくにつれて、感情が堅くなり、分別臭くなり、理窟つぽくなり、物に感激することが少くなり、すべてのことに新鮮味を失つてしまふ。

小林一茶

是は仕方がないといへば仕方がないかも知れぬが、もしこゝに或人があつて、その人はいつ迄も子供の時のやうに柔らかい感情を持つてゐて、自然を愛し、自然のすべてのものに、自分と同じ喜びや悲しみを感ずることが出來、世間臭い因襲や儀禮に拘束されないで、自由に振舞ひ自由に歌ひ、そしてその自由が、子供の自由のやうに、他人に迷惑をかけることのないばかりか、他の人から微笑を以て眺められるとしたならば、それは稀な人といはねばならぬ。かういふ稀な尊い人として、私は一茶を見るのである。試みに、一茶の藝術たるその俳句集を開いて見よう。

雀の子そこのけ〳〵お馬が通る
畫飯をたべにおりたる雲雀かな
ぼうふりよ精出してふれあすは盆
どれほどに面白いのか灯とり蟲
初螢なぜ引きかへすおれだぞよ
おんひら〳〵蝶も金毘羅まゐりかな
朝やけが喜ばしいかかたつむり
赤い月あれは誰がのぢや子供達

常住

下りよ雁一目散に我がまへへ
おとなしく留守をしてゐろきりぐ〳〵す
あとの人三つ栗三つひろひけり
うまさうな雪がふうはり〳〵と

かういふ句を拾つていけば際限がない。彼の句全體の三分の一は、子供の心になつて歌つたものである。現今童謠がもてはやされてゐる。それは子供が作つたものばかりでなく、大人が子供の頃に持つてゐた純眞な心の故郷を尋ねようとする心持から歌はうと試みるのだが、一茶の句などは、それが皆立派な童謠といつて然るべきではないか。彼が口を開けば、無造作にかやうな句を歌ひ得たのは、彼の心が、常住に子供心の自然な自由な純眞な境地に住してゐたために外ならない。

我と來て遊べや親のない雀

氣稟

打算的

稟性

これは彼が六歳の時に作つたものとして名高い句である。彼は幼い頃から立派な童謠詩人だつた。この氣稟が老いる事なくして益〻成長したのだつた。だから、彼が永久の子供だつたといふ事は、彼の天稟にさういふ性情があつたのだらう。彼は「親のない雀」を歌つた當時、慈母を失つてゐたのだが、その後、彼に繼母が出來た。その母の腹から弟が生まれた。それから、彼には悲しい虐げられる日が續く樣になつた。少年の時、遙、江戸に出されてからは、また困苦と侮辱とに堪へて生きねばならなかつた。かういふ境遇の下に長じた人は、とかく若い時から老成して、惡賢く、疑ひ深く、打算的になりがちのものであるが、一茶はそれとは正反對な人となつた所を見ると、永久の子供らしさは、全くその稟性だつたものと思はれる。

（一茶選集序）

四方赤良
本名は太田覃、號は南畝、蜀山人、江戸の人、德川末期の狂歌師、文政六年(一八二三)歿、年七十五。

宿屋飯盛
本名は石川雅望、江戸の俳人、狂歌師、天保元年(一八三〇)歿、年七十八。

唐衣橘洲
本名は小島謙之、江戸の狂歌師、享和二年(一八〇二)歿、年六十。

一四 狂歌と狂句

山吹のはながみばかり金入に　四方赤良

みの一つだになきぞ悲しき

さわらびが握拳をふりあげて

山の横面はるかぜぞ吹く

ほとゝぎす啼きつる跡に呆れたる

後德大寺のありあけの顏　宿屋飯盛

歌よみは下手こそよけれ天地の

動きいだしてたまるものかは　唐衣橘洲

鯛屋貞柳
榎並氏、大阪の俳人、享保十九年(一七三四)歿、年八十二。

つむり光
本名岸誠之、江戸の狂歌師、寛政八年(一七九六)歿、年四十三。

鹿都部眞顏
本名は北川嘉兵衛、江戸の狂歌師、文政十二年(一八二九)歿、年七十七。

栗柯亭木端
大阪一向宗某寺の僧、貞柳の高弟、安永二年(一七七三)歿、年六十四。

菜もなき膳にあはれは知られけり

しぎやき茄子の秋の夕ぐれ　鯛屋貞柳

富士の山夢に見るこそ果報なれ

路銀もいらず草臥もせず　つむり光

ほとゝぎす自由自在に聞く里は

酒屋へ三里豆腐屋へ二里　鹿都部眞顏

爭はぬ風の柳の絲にこそ

堪忍袋縫ふべかりけれ　栗柯亭木端

世の中は何のへちまと思へども

大屋裏住
本名は久須美、通稱白子屋孫左衛門、江戸の狂歌師、文化七年(一八一〇)歿、年七十七。

柄井川柳
通稱八右衛門、名は正通、江戸の人、川柳第一世、寛政二年(一七九〇)歿、年七十三。

ぶらりとしては暮らされもせず　大屋裏住

鶯も蛙もおなじ歌なかま
　經よむもあり歌よむもあり　柄井川柳

孝行のしたい時には親はなし
轉寢の顔へ一册家根に葺き
義貞の勢はあさりをふみつぶし
講釋師見て來たやうな嘘を吐き
まけ將棊逃げるたんびにお手に何
芭蕉は飛び込み道風は飛び上り
居候三杯目にはそつと出し
元日や昨日の鬼が禮に來る

石川雅望
江戸の人、俳人、狂歌師、狂名宿屋飯盛、天保元年(一八三〇)歿、年七十八。

をぞいふなる
李太白
唐の大詩人。(西暦七一一—七六二)

白髮三千丈
白髮三千丈、愁ニ緣リテ箇ノ如ク長シ、知ラズ明鏡ノ裏何處ニ秋霜ヲ得タル。

はるけん

一五　しみのすみか物語抄

石川雅望

一　白髮三千丈

學生源廣が家に童あり。常に主につきて文讀むことを習ひけり。或時家のおとなに向ひていひけるは、「もろこし人はすべてあらぬいつはりごとをぞいふなる。學問の道はなか〳〵世に用なし。」といふ。おとな、「何事のありてさはいふぞ。」と問へば、わらは、「今ほど李太白集を讀みて侍るに、白髮三千丈といへる句あり。これ限りなき空言ならずや。」といふ。おとな、「あらず。わぬしがもの學びすることの足らざれば、さる疑ひも出でくるなり。いま大學に入りて、おほざうの博士の御前にて學問して見よ。さる疑ははるけん。抑、かしこは我が日の本には優りて、

顔淵云々
顔淵・閔子騫共に孔子の高弟。

とこそ見えたれ

端つ方
よろぼふ
たむけの神
けうの事

國も四百餘州ありとか。さる廣き所なれば、さばかり髪ながき人もあらざらんやは。わぬし論語をば讀みたるべし。かの書に、顔淵鬢四間とこそ見えたれ。」といへば、わらは、「げに〳〵。」と、いひてうなづきけるとか。

二　桶屋の思案

都の端つ方に、桶を造りて賣る男あり。秋の頃、風烈しく吹き出でて、よろぼひたる家を打倒し、木の枝をさへ折りさきなどす。檜皮屋の板のはがれたるが空に飛び交ふさま、さながらたむけの神に幣參らす心地す。桶づくり妻に向ひて「わが家たからに富むべき時來ぬ。疾く神の御前に御酒・糀米奉りてよ。」といふ。妻「野分烈しかりとて、家の富むべき道理やはある。けうの事いふ男かな。」といへば「女はあさましきまで、物の心をたどり知ら

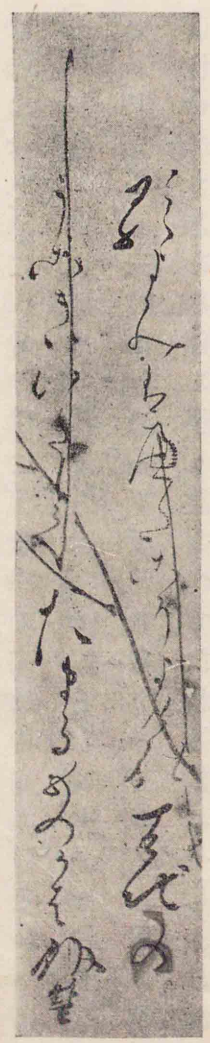
朱買臣
支那呉の人、家貧しかつたが、刻苦して、會稽の太守となつた。

成りいづ
いみじき位
なでふ

宿屋飯盛筆
歌よみは下手こそよけれ天地の動きいだしてたまるものかは
飯盛

出できなん
いぶかる

ぬものなり。昔、唐國に朱買臣といひし賢き人、わが身今に成りいでなんといひけるを、その妻の聞きもいれで、終に別れけるが、程なく夫はいみじき位を得たりけるを悔みつる例もぞある。すべて男のいへることを、侮りざまにもてなさば、よきことはあらじ。」といふ。妻「さらば、かゝる風につけて、なでふよき幸かある。」といへば、夫がいはく「風荒く吹きぬれば、砂埃起りて人の眼に入るぞかし。されば、眼を病む人多く出できなん。これ喜び祝ふべき事にこそ。」といふに、妻は愈、いぶかりて「人の眼を病むが、いかで我が身の幸とはなる。」と問へば、夫「深く物の心たどら


宿屋飯盛筆

ようせずば
なりーぬーべし
こそなるべけれ
すなり
するなり
行はれぬべし
行はるべし
なるべう。
ありとある
こゝら
損ひつべし

ざる人は、その由をえ知らじ。眼を煩ふ人多かれば、ようせずば、眼潰れて、かたはとなりぬべし。さるかたはになりなば、法師とこそなるべけれ。盲法師は近き世に唐國より渡したる三絃といふものを彈きて、なりはひとすなり。さらば、三絃世の中に行はれぬべし。これ我が爲によき幸の來れるなり。」といへば、妻、「しか三絃の世にはやり行くとも、身の幸となるべうもなし。」といふ。夫、「そも三絃は、猫の皮もて造るなり。三絃のはやり行かば、世のありとある猫の限り殺されて、たね盡きぬべし。これよき幸のま近く來れるなり。」といふを、なほいぶかりて問へば、「猫死にたえなば、鼠時を得てはびこり、廚の棚、座敷といはず、こゝらの鼠ほこり騷ぎ、よろずの桶ども皆食ひやぶり、或はなげ落して、くだき損ひつべし。さらば、我が家に商物の數まさりて、富みさかゆべきものなるをや。」と、手を打ちたゝきて、躍り喜びけり。

桶だくみ
あざる
わなゝく
筍
乞ひて居り
食ひに食ふ

深きたどりある桶だくみにぞありける。

三　河豚汁

昔、博打あつまりて、河豚の魚を買ひて、とり〴〵食はんとせしに、惡しき香のしければ、「こはあざれたり。この魚は人を殺すこととためしなきにあらず。されば打捨てよ。」などいふを、「さるにても徒にあしつひやし、おほかたに食はでやみなんも惜しき心ぞする。」と、いひ爭ひけるに、老いたる乞食のわなゝきて通りければ、こゝろみに呼びて、「この魚食へ。」とてやれば、缺けたる筍に入れ、うちさゝげて行きぬ。とばかりすごして、かの乞食いかになれると、河原に人やりて見すれば、「こともなく物乞ひて居り。」といふ。「さらば、この魚食ひたりとて惡しからじ。」とて、たゞ食ひに食ひつ。されど猶わろき香のすれば、思ふさまにも食はず。

食はせまし

置きて侍り

やつがれ

乞食すら

しみのすみか物語　二卷、石川雅望の見聞雜話集。

いさゝか食ひあまれるを「これ犬にや食はせまし。」などいひて居る時、乞食また門を通りければ、呼びて「これ猶持ちていね。」とてやれば、はじめの笥に入れて、手に持ちいたゞきつゝいひけるは「君達この魚とくめされつるにや。」といふ。みな「今食ひて、その殘りなり。」といへば「さらばきこしめしたるにこそ。はじめ賜ひつるもの、少々くさき香のし侍れば、ようせずば腹をそこなひなんとて、なほ食はで置きて侍り。君達のしかきこしめしたる上、こともなくおはせば、やつがれもまかりてすなはち食べなん。」とて、立ち走り河原のかなたへいにけり。身を大切に思へば、乞食すら惡しき香のせしを食はざりける。この博打、乞食には劣りたるものなりけりと、心ある人は笑ひけるとか。

（しみのすみか物語）

口繪參照

田部重治　富山縣の人、法政大學教授・東洋大學教授、日本山岳會員。

憧憬

「心の淨化」

一六　登山の意義

田部重治

あざやかな雪を戴き、朝日を浴びつゝ、地平線上に雄偉なる姿を浮べてゐる山相は、自然が作れる最も偉大なる藝術である。幾度眺めても仰いでも、それは見る人に雄々しき心と、氣高き理想と、漲る血潮とを與へずば止まない。山の姿ほど無私な心を以て、清淨なる魂を以て、憧憬し得られるものはない。

山を憧憬し、その姿に自らを虛しうすることの出來る心に、眞純ならざるものはない。山を求むる心は、この偉大なる自然の藝術を通じて、自然の魂と融け合ひ、それが最も活ける力であることを感ずる。山の姿に憧憬する心の淨化は、かくの如くして絶えず行はれてゆく。

かのアルプスの姿を見て、それを見るに堪へぬほどに醜いと

思惟
渇望
傾倒
傳統
「大自然崇拜の精神」

思惟する文學者を多くもつてゐた歐洲の十八世紀は、社會のどの方面に於ても、僞善と常識とに目立ち、創造と感激とに乏しい時代であつた。　また、歐洲歷史上、自然に對して深い憧憬をもつた時代は、最も意義ある時代であつた。

日本の歷史に於て、自然を最もありのまゝの姿に於て讃美し、氣高い山の姿に限りない渇望の目を投じたものは、日本民族の最もあからさまな、最も淸純なる情緒の源泉とも言ふべき、かの萬葉の詩人であつた。　その後、大自然を崇拜し、それに傾倒する心持は、餘り著しく表現されてはゐないけれども、それは一つの傳統となつて、民族の一部には登山の風習は絕えることなく行はれてゐた。　しかし、明治の時代になつてからは、この傾向は急激な歩みを取るやうになつた。　卽ち、大自然崇拜の精神は、登山の一般的風習となり、その文學となり、凄じい勢ひを以て社會の

攀ぢられ
文獻

初夏の燕岳

各方面に動いてゐる。

かくして、あそこの山こゝの溪谷は、攀ぢられ探求された。　のみならず、今まで顧みられなかつた文獻が引き出され、山岳・溪谷に關する傳說が求められるに至つた。　昔から登ることが不可能とされた山、足を蹈み入れることの出來ないと思はれてゐた溪谷も、追々知られるやうになつて、今では溪谷の或物を除いては、究められないところが殆どなくなつた。

しかし、山を眞に愛する人には、山

を究め溪谷を探り終へるといふことは、彼の山に對するよろこびの一小部分に過ぎない。彼の喜悅の大部分は、彼がこれらの自然に對して懷き得る無限の主觀的な情緒に存してゐる。いつまでも〳〵同一の山、同一の溪谷に對してすら湧出する無限の感情に存する。山に對する憧憬は、かくして絶えず向上し進展する。それはいつも無限に自己を超越する感情である。

「無限に自己を超越する感情」

一たび頂上を究めると、その山に對する興味を失ふ人、一つの山がもつ溪谷・深林、その美しい色調、その朝夕の光線によつて全容に與ふる變化、一歩々々を運ぶ間にも起る刻々の響と靜寂との多樣、そしてこれらの官能的に映ずる現象の下を流るゝ自然の生命の動きを認め、それに耳を立てることをしないものは、自然を機械的に見る人でなければならない。

官能的

自然の征服といふ言葉は、近代人の作つた最もあさましい言葉の一つである。山に憧憬する人の懷く心は、いつも自然との一致融合でなければならない。最もよい意味に於て、自然を征服することは、自然を最もよく理解し、自然と融合することでなければならない。

「自然と一致融合する心」

跋渉

私は山を愛するといふことは、量的に見た山岳の跋渉に存するのではなくして、飽くまで主觀的に、質的に、山岳に對して深まり行く情緒に存することを深く信ずるものである。そしてその意味に於て、山を愛するものにとつては、登山は山を登り盡くすといふことで決して行き詰るものではないことを、私は茲に斷言したい。

（山と溪谷）

巻末地圖參照

上高地　日本アルプスの南部梓川の上流の高原、海拔一八一八米。

島々　長野縣松本市の西約十六粁。

德本峠　島々から上高地に至る途中の峠。

常念山脈　日本アルプスの一支脈で、上高地の東北に連る。

豪宕

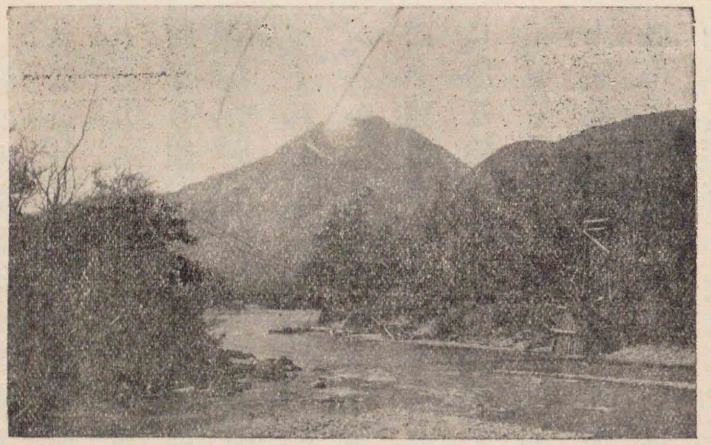
燒岳　上高地の西方にある火山。

霞澤岳　上高地の東南德本峠につゞく山。

一七　上高地の神祕境

島々から四里の林道を登つて德本峠の頂に出ると、白雪を戴いた穂高の秀麗な連嶺が俄然として現れ、常念山脈の豪宕な姿が、強い色彩で描かれてゐるのを見る。そして延長三里の上高地の高原は、整然とした木立の裝で全溪谷を埋めてゐる一方を、梓川の清流が穂高の裾について白くうねつてゐる。二十町餘も下つて上高地に下りきると、溪聲があちらこちらに聞えて、道は樅や落葉松や栂の淋しい林を分けて行くのである。

穂高の氣高い姿と、落葉松や白樺のえもいはれない色彩と、清澄な梓川がその間をくゞつてゆつたりと流れる情趣とは、上高地峽谷の最も飽かぬ眺である。行手に燒岳の二筋三筋の寂しい噴煙を眺めながら、樹間を辿ること七八町で、溫泉旅館の建物



上高地の神祕境（梓川及び河童橋・正面は燒岳）

が現れて來る。梓川の流はこゝでは一際ゆるやかに、向岸の柳の林が次第高に、白樺となり、栂となり、落葉松となつて、やがては秀麗な霞澤岳と聳えて、清淨な景色を作つてゐる。その流るゝ水、川向うの柳の林、漂ふ雲、それらを見るだけでも無限の情趣が味はれる。まして旅裝を宿に解いて、息もつきあへぬ程に變化するこの溪谷の自然の色彩と活動とを眺めるならば、わが心の忽に淨化されて行くのを感じるであらう。

河童橋
梓川にかゝる。

朝の上高地を味はうとする者は、まだこの溪谷に朝日のささない五時頃、宿の欄干によつて梓川のほとりに眼を轉じなければならない。先づ眼に入るものは霞澤岳である。秀麗な峰頭から滴り落つる綠の色は、流れて針葉樹や闊葉樹の林となり、ゆるやかにうねつて、對岸の柳と白樺と落葉松のゆつたりとつづく林となる。この林から川面にかけての一帶の薄靄は、いまかすかに搖り動いてゐる。と見れば、雄偉な燒岳は、その東の半面を薔薇色に染めてゐる。噴煙は今しも眠から覺めたかの樣に、靜な曉の空へと立昇るのである。

暫くすると、德本峠から旭が昇つた。朝靄が溶けるにつれて、上高地一帶の溪谷が俄に銀のやうに明るい光を漂はせて、梓川の川面がきら〳〵と光つて來る。しかし河童橋から德本峠へかけて、密林にとざされた約一里の間の冷たい空氣は、まだ溫め

潺流

斷腸の思

られずに、氷のやうな流れがその底を山裾に沿うて流れてゐる。靄はあとなく消えて、山膚の皺が殘りなく現れた。見渡すかぎりの溪谷は、綠に黃をまぜて、霞が連嶺の八合目あたりを隱した。耳を澄ませば、溪谷の曉は靜で、たゞ潺流の音が聞えるばかりである。

だん〳〵日があがる。しかし、この溪谷には、かしましい蟬の聲や、いつも聞き馴れてゐる鳥の聲はない。この溪谷の朝夕を通じて最も多く聞くのは、鶯の聲と時鳥の聲である。中にも時鳥の聲は、人は何處に住んでも悲しい生活から逃れられないといふことを告げるかのやうに、この峽間にも啼いて行く。繪を描く人や、そゞろ歩きの人が歸つてしまつて、その足痕のみが淋しく殘つてゐる梓川の岸をさすらふ夕に眞に斷腸の思ひあらしめるのはこの鳥の聲である。晝、二階の欄干にもたれて、屋根

鶺鴒

物象

の上に餌をあさる鶺鴒の姿を何心なく眺めてゐると、思ひがけぬ時鳥の聲の、梓川の流聲に消えて行くのに、憂へ心地のふと誘はれるのも折々である。

上高地の美は、雨によつて殊に發揮されるのである。雨の上高地は、いままでの翠綠の溪谷をして、俄に黃金の色どりに變ぜしめる。雨の日、欄干によつて、霞澤岳から梓川の岸の柳の林にかけて、この溪谷の物象がいかに移り變るかをつく〴〵と眺めよ。一條々々の雨のけぢめが、平地よりは一層明瞭なこの溪谷の雨は、先づ煙のやうなしぶきを横になびかせる。梓川の岸の林は見るまに萌黃色がまさる。あたりの爽やかな空氣は一層その度を增して來る。この時、溢れる溫泉にとびこんで、窓から霞澤岳を眺めながら、空想に耽るのも興味が多い。やがて夕暮近く雨が止むと、雲が盛に動いて、霞澤の峰頭が時々雲間に立つ。

咄嗟震駭

が、見渡す溪谷の底には靄が滿ちて來る。ぱつと谷が明るくなつた。しかし、それは靄が晴れたのではない。夕日が靄にうつつたのだ。この時のこの溪谷を充たす色彩の美しさは、平地の朝夕のみを知る人々に、どうして想像できよう。湧きかへる溪谷全部の卵黃色——これがその靄の色をあらはす極めて不十分な言葉である。

上高地の急激な雷雨に經驗のある人は、その光景を更に印象的なものの中に數へる。その起るや極めて咄嗟である。忽にして霞澤岳の峰頭が濛々と煙ると、はや殷々たる雷聲が全溪谷を震駭する、火柱が山の頂から林にかけて立つ、無數の雨脚が雲を貫いて一齊に溪聲の鳴りを止める。暫くして明るさが增し、雲がきれ〴〵になつて、日光が洩れて來る。すつかり霽れ上つた後までも、二片三片の雲が、柳の林に歸途を忘れてさまようて

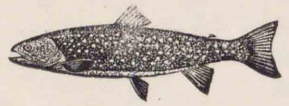
ゐる。そして雨の後の林の色は萌黄にゆらいで、今にも樂の音となつてとけ出しさうである。

日中の上高地は、珍らしい溫泉場の光景を呈する。昨夕迎へた幾十の人々、それらは何處へ行つたであらうか。或人は湖水のほとりへ、或人は穂高の眺を貪らうとして河童橋の附近へ、或人は槍ケ岳へ、そして或人は梓川の岸に竿を携へて往つてしまふ。この時はこの溫泉の最も閑暇な時である。女中は洗濯をする。男は掃除をする。殘つた二三の客は緣側に日なたぼつこをしながら、梓川の流れのまに〳〵心を泛べる。美しい鄙歌の聞えるのは女中のすさびである。追分や、松前や、幾百年の人の愁情も、この溪谷の清寂な自然の姿にふれて、一層哀愁の氣を帶びて來る。

追分　追分節。
松前　松前節。

夕暮、宿の前にたゝずんでゐると、時鳥の聲が頻にうしろの林

岩魚



をさまようてゐる。宿の後ろから流れて來て、浴槽の傍で淀んでゐる流れに、岩魚を釣る客が二三人糸を垂れてゐる。德本峠の方を見ると、柳と栂との林から人夫がやつて來る。洋服の人が來る。若い學生が來る。外國人が來る。そしてこの溪谷へ入るどの人もが懷くところの希望に、嬉々とした顏色を泛べて來る。これらの人々が著くと、宿の玄關は急に忙しくなる。草履の音が廊下にやかましい。浴槽に話聲が高まる。

月夜の上高地は、想像しただけでも美しい。月の上らぬ前に、先づ霞澤一帶の峰が明るみを帶びて來る。暫くすると白い太い光が、白銀の矢のやうに斜に谷を越えて、穂高の連峰にそゝぎかゝる。それから漸く月が山の端を出る。その月は、夏でありながら、平地で見る十月の色である。谷の底の流れも林も薄靄に包まれて、美しい光の衣をかける。かういふ夜の物靜けさ。

せゝらぎ

峰巒

淨化

雨戸を引かない部屋には、秋かと思ふ月の光がさしこんで、唯隣室の鼾聲とせゝらぎの音だけが枕元に落ちる。この時、人は、自分といふもののさゝやきが、今まで氣づかなかつた姿で現れて來るのを感じる。月の夜の朝、私は相變らず欄干にもたれてゐると、隣室のフランス人が、「昨夜は誠に結構な月でした。」と日本語で話しかけた事があつた。

十月になると、四圍の峰巒に白い斑雪が見え初め、穗高から梓川にかけて、身ぶるひのするやうな白く冴えきつた雪溪が出來る。その時、自然は上高地を更に〳〵淨化させて、人間をよそに、その壯大なる美觀をほしいまゝにすることであらう。

（日本アルプスと秩父巡禮）

巻末附圖參照

巻末地圖參照

重盛　平清盛の長子。

頼盛　平忠盛の第五子、清盛の弟。

教盛　清盛の弟。

龍頭の兜

花洛

一八　待賢門の戰

大内へ向ふ人々には、大將軍は左衞門佐重盛・三河守頼盛・淡路守教盛、侍には筑後守家貞・子息左衞門尉貞能・主馬判官盛國・子息右衞門尉盛俊・與三左衞門尉景安・新藤左衞門家泰・難波次郎經房・瀨尾太郎兼康・伊藤武者景綱・舘太郎貞康、同じき十郎貞景を始めとして、都合その勢三千餘騎、六波羅をうち出でて、賀茂河を馳せ渡し、西の河原に控へたり。

左衞門佐重盛は生年二十三、けふの軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に櫨の匂の鎧、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の兜の緒を締めて、小烏といふ太刀を佩き、切斑の矢負ひ、滋籐の弓持ちて、黄桃の花毛なる馬に、柳櫻摺つたる貝鞍置かせて乘り給へり。重盛のたまひけるは、「年號は平治なり、花洛は平安城なり、我等は平氏な

樊噲 支那漢の高祖の功臣、勇士。
張良 支那漢の高祖の功臣。

見えられつ

太りせむ

れば、三事相應せり。敵を平げんこと何の疑ひかあるべき。誰かこゝに樊噲・張良が勇をなさざらん。」とて、三千餘騎を三手に分けて、近衛・中御門・大炊御門、大宮表へうち出でて、陽明・待賢・郁芳門へ押寄せたり。

大内には南・西・北の三方の門をさし固め、東表をば開かれたり。承明・建禮の脇の小門をも共に開きて、大庭には馬ども多く引立てたり。梅壺・桐壺・紫宸殿の前後まで兵ひしとなみゐたり。これ皆源氏の勢なれば、白旗二十餘流れうち立つたり。大宮表には、平家の赤旗三十餘流れ差揚げて、勇み進める三千餘騎、一度に鬨をどつと作りければ、大内も響き渡りて夥し。

鬨の聲に驚きて、たゞ今までゆゝしく見えられつる信頼卿、顔色變りて草葉の如くにて南階を下られけるが、膝戰いて下りかねたり。人なみ〳〵に馬に乗らんと引寄せさせたれども、太り

逸物

穆王 周の穆王が八匹の駿馬を驅つて天下を周遊した故事。

押しーたりーけん

不覺人

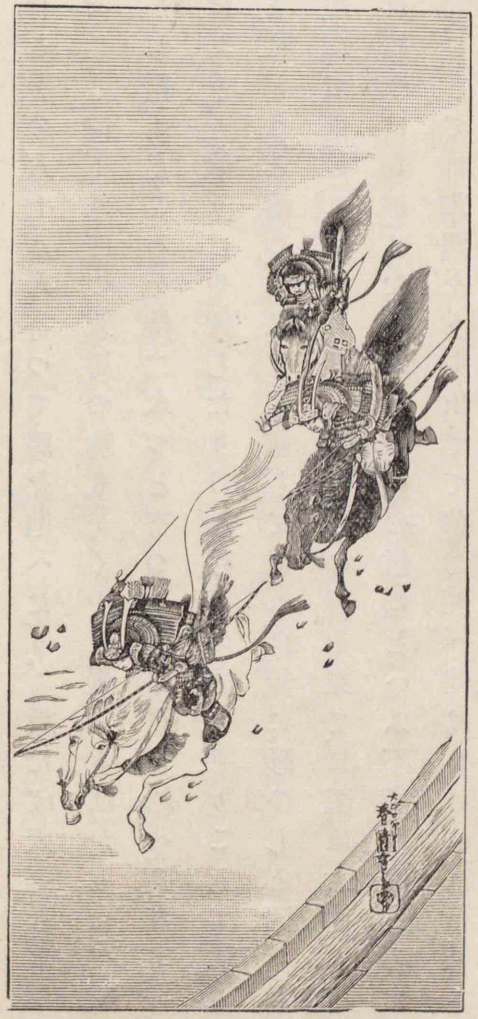
せめたる大の男の、大鎧は著たり、馬は大きなり、乘り煩ふ上、主の心には似も似ず、逸りきつたる逸物なれば、つと出でん〳〵としけるを、舍人七八人寄つて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒もかくやと覺ゆるばかりにて、乘りかね給ふところを、侍二人つと寄つて、「疾く召し給へ。」とて押上げたり。餘りにや押したりけん、弓手の方へ乘りこして伏しざまにどうと落つ。急ぎ引起して見れば、顔に砂ひしと附き、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝この體を見て、日頃は大將とて恐れ給ひけるが、はたと睨みて、「あの信頼といふ不覺人は臆したりな。」とて、日華門をうち出でて郁芳門へ向はれければ、信頼も鼻血押拭ひ、とかくして馬にかき乘せられ、待賢門へ向はれけるが、物の用にあふべしとも見えざりけり。

左衛門佐重盛、五百餘騎をば大宮表に殘し置き、五百餘騎にて

僻目
苗裔

谷口香嶠
通稱槌之助、京都市の人、畫家、大正四年歿、年五十二。

押寄せて、呼ばはり給ひけるは「この門の大將軍は信賴卿と見るは僻目か。かく申すは桓武天皇の苗裔太宰大貳清盛が嫡子左衞門佐重盛生年二十三。」と、名のり懸けければ、信賴返事にも及ばず「それ防げ、侍ども。」とて、引き退く。大將の引き給ふ間、防ぐ侍一人もなし、我先にと逃げければ、重盛愈、勇みて、大庭の椋の木



待賢門の戰（谷口香嶠筆）

惡源太
源義平、義朝の長子。

武藏の大藏
武藏國比企郡菅谷村。

の下まで攻めつけたり。義朝これを見て、「惡源太はなきか。信賴といふ大臆病人が、待賢門をはや破られつるぞや。かの敵追出せ。」と、宣ひければ、「承り候。」とて、驅けられたり。續く兵には鎌田兵衞・後藤兵衞佐々木源三・波多次郎・三浦荒次郎・須藤刑部・長井齋藤別當・岡部六彌太・猪俣小平六・熊谷次郎・平山武者所・金子十郎・足立右馬允・上總介八郎・關次郎・片桐小八郎大夫以上十七騎轡（くつはま）を並べて馳せ向ふ。大音聲を揚げて、「この手の大將は誰人ぞ。名のれ聞かん。」かく申すは、清和天皇九代の後胤左馬頭義朝が嫡子、鎌倉惡源太義平と申すものなり。生年十五歲、武藏の大藏の軍の大將として、叔父帶刀先生義賢を伐ちしよりこの方、たびたびの合戰に一度も不覺の名をとらず。年積つて十九歲。見參せん。」とて、五百騎の眞中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追ひ廻し、竪ざま横ざま十文字に敵をさつと蹴散

端武者
目な懸けそ

揉うだりける

曩祖
平將軍
平貞盛。
思はーれーけん

らして、「端武者どもには目な懸けそ。大將軍を組んで討て。櫨の匂の鎧に蝶の裾金物打つて、黄桃花毛の馬に乘つたるこそ重盛よ。押並べて組んで落ち、手捕にせよ。」と、下知すれば、大將を組ませじと防ぐ平家の侍ども、與三左衞門・新藤左衞門を始めとして、百騎許が中にぞ隔たりける。惡源太を始めとして十七騎の兵ども、大將軍に目を懸けて、大庭の椋の木を中に立て、左近の櫻・右近の橘を七八度まで追ひ廻して、組まん〳〵とぞ揉うだりける。十七騎に驅けたてられて、五百餘騎かなはじとや思ひけん、大宮表へさつと引く。

大將左衞門佐は弓杖突いて馬の息を繼がせ給ふところに、筑後守つと參りて、「曩祖平將軍の二たび生まれ替り給へる君かな。」と、向うざまに譽め奉れば、今一度驅けて家貞に見せんとや思はれけん、前の五百餘騎をば留め置き、新手五百餘騎を相具して、ま

かい挾む

組みぬべうもなし

防げばこそ……らめ

た大庭の椋の木まで攻め寄せたり。また惡源太驅け向ひ、見廻していひけるは、「たゞ今向ひたるは皆新手の兵なり。但し大將は、もとの大將重盛ぞ。以前こそ洩らすとも、今度に於ては餘すまじ押並べて組んで捕れ、兵ども。」と、下知すれば勇みに勇みたる十七騎、我先にと進みければ、今度は難波次郎・同じき三郎・瀨尾太郎・伊藤武者を始めとして、百餘騎が中に隔てたるに事ともせず、惡源太弓をば小脇にかい挾み、鐙踏ん張り突つ立ち上り、左右の手を擧げ、「幸に義平源氏の嫡々なり。御邊も平氏の嫡々なり。敵には誰か嫌はん。寄れや、組まん。」と、いふまゝに、先の如く大庭の椋の木の下に追ひ廻して、五六度までこそ揉うだりけれ。重盛組みぬべうもなくや思はれけん、また大宮表へ引いて出づ。惡源太二度まで敵を追ひまくり、弓杖突いて馬に息を繼がせけるに、義朝これを見て、須藤瀧口を以て、「汝が不覺に防げばこそ敵

たび〳〵驅け入るらめ。あれ速に追ひ出せ。」と、いひ遣されければ、俊綱馳せてこの由をいふに、「承り候。進めや、ものども。」とて、色もかはらぬ十七騎、大宮表に驅け出でて、敵五百餘騎が中へ面も振らず割つて入る。引き立てたる勢なれば、馬の足を立てかねて、大宮を下りに二條を東へ引きければ、「我が子ながらも義平はよく驅けたるかな。あ、驅けたり。」とぞ譽められける。

大將重盛・與三左衞門景安・新藤左衞門家泰主從三騎かけ離れ、二條を東へ引かれければ、惡源太・鎌田にきつと目合はせて、「こゝに落つるは大將とこそ見れ。返せや。」とて、追つかけたり。すでに堀川にて追つつめけるが、弓手の方に材木多く充ち滿ちたるに、惡源太の乘り給へる馬かたなづけの駒にて、材木にや驚きけん、馬手の方へけし飛んで、小膝を折つてどうと伏す。鎌田兵衞延ばさじと、十三束取つて交ひ、よつ引いてひやうと射る。重

かたなづけ
けし飛ぶ

射向の袖
鎧ござんなれ
よつ引いて
大童
紀信
高祖の臣、項羽が滎陽を圍んだ時、高祖の車に乘り、楚をあざむいて高祖を逃れしめた。
高祖
支那、漢の高祖、姓は劉、名は邦、沛の人、秦を滅ぼして漢帝となつた。

盛の射向の袖にはたと中りて飛び返る。やがて二の矢を射たりければ、押附けにちやうと中りて、箆かつぎ碎けて、跳り返れり。惡源太「これは聞ゆる唐皮といふ鎧ござんなれ。馬を射て落ちんとこころを討て。」と、下知せられければ、またよつ引いて追ひざまに、筈の隱るゝほど射こみたり。馬は屏風を返す如く倒るれば、材木の上に跳ね落され、兜も落ちて、大童になり給ふ。鎌田、堀川を馳せ越えて、重盛に組まんと落ち合ふ、重盛近づけてはかなはじとや思はれけん、弓の弭にて鎌田が兜の鉢をちやうと突く。突かれてゆらゆる間に、兜を取つてうち著つゝ、緒を强くこそ締められけれ。

與三左衞門馳せ寄つて中に隔たり、申しけるは、「漢の紀信は高祖の命に代りて滎陽の圍を出し、遂に天下を保たせき、『主辱しめらるゝ時は臣死す。』と、いふに非ずや。景安此に在り、寄れや、組

まん」と、いふまゝに、鎌田兵衛と引組んで、取つて押へけるところに、惡源太馬を引起し、これも堀川を馳せ越えて、重盛に組まんととんで懸りけるが、「鎌田をや助くる。大將をや討たん。」と、思案しけれども、「大將にはまたも寄せあふべし。政家を討たせては叶はじ。」と思ひ、與三左衛門に落ち合うて、三刀刺して首を取る。重盛は「頼みきつたる景安討たせて、命生きて何かせん。」とて、すでに惡源太と組まんとせられけるを、新藤左衛門馳せ來り、「家泰が候はざらん所にてこそ、大將の御命をば捨て給ふべけれ。」とて、我が馬を引向け、中に隔てて惡源太とむずと組む。政家は重盛に組まんとしけるが、主を討たせてはかなはじと思ひければ、新藤左衛門に落ち重なつて首を搔く。この間に重盛は虎口を遁れて、六波羅までぞ落ちられける。二人の侍なからましかば、助かり難き命なり。

…をや助くる

所にてこそ…給ふべけれ

虎口を遁る

巳の刻

手形

よりぞ始まれる

平治物語 三卷、著者不明。平治の亂の顚末を記した軍記物語。

十二月二十七日の巳の刻ばかりのことなるに、一むら雨さつとして、風は烈しく吹きたりけり。鎌田が鞍の前輪にも氷柱いたれば乘りかねたり。惡源太これを見給ひて、「手形をつけて乘れや。」と、宣ひければ、打物拔いて、つぶ〳〵と手形を切つてぞ乘りたりける。鞍に手形をつくること、この時よりぞ始まれる。

右兵衛佐頼朝は生年十三と名乘つて、敵二騎射おとし一騎に手負はせて、殊に進んで駈けられたり。左馬頭のたまひけるは「何といへども、若武者どもの軍するはまばらに見ゆるぞ、義朝駈けて見せん。」とて、眞先に進まれければ、一騎當千のつはもの共、打ちかこんでぞ戰ひける。頼盛しばらく支へられけるが、門より外へおひいださる。義朝つゞいて攻め戰へば、大宮表へ引きにけり。

（平治物語卷二、待賢門の軍付信頼落つる事）

卷末附圖參照

太政入道
平清盛。

ゆゝしうぞ見えし
筑後守貞能
姓は平氏、家貞の子。

保元
保元元年(一八六)。

平右馬助
清盛の叔父忠正。

新院
崇德上皇。

一の宮
崇德上皇の長子、重仁親王。

刑部卿
清盛の父忠盛。

一九 重盛諫言

太政入道は、かやうに人々數多いましめおいても、なほ心ゆかずや思はれけん、既に赤地の錦の直垂に、黑糸縅の腹卷の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜の序に靈夢を蒙つて、嚴島の大明神より現に賜はられたりける銀の蛭卷したる小長刀、常の枕を放たず立てられたりしを脇に挾み、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゝしうぞ見えし。

「貞能。」と、召す。

筑後守貞能は木蘭地の直垂に緋縅の鎧著て、御前に畏まつてぞ候ひける。入道宣ひけるは、いかに貞能、このことといかゞ思ふぞ。保元に平右馬助を始として、一門半ば過ぎて新院の御方に參りにき。一の宮の御事は、故刑部卿の殿の養君にてまし〳〵

故院
鳥羽法皇。

平治元年
(一八九)。

院
後白河法皇。

內
二條天皇。

經宗
權大納言藤原經宗。

惟方
檢非違使別當藤原惟方。

成親
藤原氏。

西光
俗名藤原師光。

いゝ、然るべからね

法皇
後白河法皇。

鳥羽の北殿
京都の南方にある。

しかば、旁見放ち參らせがたかりしかども、故院の御遺誡に任せて、御方にて先を驅けたりき。これ一つの奉公。次に平治元年十二月信頼・義朝が謀叛の時、院・內を取り奉つて大內にたてこもり、天下くらやみとなつたりしにも、入道隨分身を捨てて兇徒を追ひ落し、經宗・維方を召しいましめしに至るまで、君の御爲に既に命を失はんとすること度々におよぶ。されば人何と申すとも、いかでかこの一門をば七代までは思し召し捨てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづらもの、西光と申す下賤の不當人が申すことに君のつかせ給ひて、動もすればこの一門滅ぼさるべきよしの御結構こそ然るべからね。この後も讒奏する者あらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎭めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ移し參らするか。然らずば、これへまれ御幸

射んーずーらん

きせなが

小松殿　重盛の邸、東山にあつた。

刎ねーられーたんーな

法住寺　京都市下京區、三十三間堂の東にあつた。

をなし參らせんと思ふはいかに。　その儀ならば、定めて北面のものどもが中より矢をも一つ射んずらん。　その用意せよと、侍どもに觸るべし。　大方は、入道、院方の奉公思ひ切つたり。　馬に鞍おかせよ。　きせなが取り出せ。」と、こそ宣ひけれ。

主馬判官盛國、急ぎ小松殿へ參つて、「世ははやかう候。」と、申しければ、大臣聞きもあへ給はず、「嗚呼、はや成親卿の頭の刎ねられたんな。」と、宣へば、「その儀にては候はねど、入道殿のおんきせながを召され候上は、侍どもも皆打立つて、只今院の御所法住寺殿へ寄せんとこそ出で立ち候ひつれ。　暫く世を鎭めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ移し參らするか、然らずば、これへまれ御幸をなし參らせんとは候へども、内々は鎭西の方へ流し參らせんとこそ議せられ候ひつれ。」と、申しければ、大臣、何によりて只今さることのおはすべき。　とは思はれけれども、今朝の禪門の氣色、

卿相・雲客

へうする

五戒　殺生戒・偸盜戒・邪淫戒・妄語戒・飲酒戒。

五常　仁・義・禮・智・信。

さる物狂はしきこともやおはすらんとて、急ぎ車を飛ばせて、西八條殿へぞおはしたる。

門前にて車より下り、門の内へさし入つて見給ふに、入道腹卷を著給ふ上、一門の卿相・雲客數十人、各、色々の直垂に思ひ〳〵の鎧著て、中門の廊に二行に著かれたり。　その外、諸國の受領・衞府・諸司などは、緣にゐこぼれ、庭にもひしとなみゐたり。　旗竿ども引きそばめ〳〵、馬の腹帶をかため、冑の緒をしめ、只今皆打立たんずる氣色どもなるに、小松殿、烏帽子・直衣に大紋の指貫のそば取つてさやめき入り給へば、ことの外にぞ見えられける。　入道伏目になつて、「あはれ、例の内府が世をへうするやうに振舞ふものかな。　大きに諫めばや。」とは思はれけれども、流石子ながらも、内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を紊らず、禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹卷を著て對はんこと、流石

面はゆし

面はゆう恥づかしうや思はれけん、障子を少し引立てて、腹巻の上に素絹（そけん）の衣をあわてぎに著給ひたりけるが、胸板の金物の少し外れて見えけるを隠さうと、頻に衣を引違へ〳〵ぞし給ひける。

大臣は舍弟宗盛卿の座上に著き給ふ。入道宣ひ出さるゝこともなく、大臣もまた申し上げらるゝ旨もなし。

やゝあつて、入道宣ひけるは、「あの成親卿が謀叛は事の數にも候はず。一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎭めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずば、これへまれ御幸をなし參らせんと思ふはいかに。」と、宣へば、大臣聞きもあへ給はず、はら〳〵とぞ泣かれける。

入道「さて、いかにや、いかに、」と、あきれ給へば、稍あつて、大臣涙を押へて、「この仰せ承り候に、御運ははや末になりぬと覺え候。人、運命の傾かんとては、必ず惡事を思ひ立ち候なり。また御有樣

邊地・粟散

天兒屋根命
神皇產靈尊の子、藤原氏の祖、天照大神に臣事し、天孫降臨の時に隨從した。

鎧ふ

破戒・無慙

普天の下
普天ノ下王土ニ非ザルナク、率土ノ濱王臣ニ非ザルナシ。（詩經）

潁川云々
許由を指す。

首陽山云々
伯夷・叔齊を指す。

を見參らせ候に、更に現とも覺え候はず。流石我が朝は邊地・粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根命の御末、朝の政を掌らせ給ひしより以來、太政大臣の官に至る人の甲冑を鎧ふこと、禮儀を背くにあらずや。就中御出家の御身なり、忽に法衣を脫ぎ捨てて、甲冑を鎧ひ弓箭を帶しましまさんこと、內には破戒・無慙の罪を招くのみならず、外には仁・義・禮・智・信の法にも背き候ひなんず。旁、恐ある申し事にて候へども、心の底に旨趣を殘すべきにも候はず。まづ世に四恩の候。天地の恩・國王の恩・父母の恩・衆生の恩これなり。その中に最も重きは朝恩なり。普天の下王土にあらずといふことなく、率土の濱王臣にあらずといふことなし。されば、かの潁川の水に耳を洗ひ、首陽山に薇を折りし賢人も、勅命背きがたき禮儀をば存知すとこそ承れ。いかに況や、先祖にもいまだ聞かざりし太政大

蓮府・槐門

聖德太子
用明天皇の長子、厩戸皇子、推古天皇二十九年(二六一)薨、御年四十九。

人皆心あり云々
人皆心有リ、心各〻執有リ、彼是ナレバ則チ我非ニ、我必ズ聖ヲ非トセバ、彼必ズ愚ヲ非トス、共ニ是レ凡夫ノミ、是非ノ理、誰カ是レ定ムベキ、共ニ賢愚、鐶ノ端ナキガ如シ。是ヲ以テ彼ノ人瞋ルト雖モ還タ我ガ失ヲ恐ル。(十七憲法第十)

臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才・愚暗の身を以て、蓮府・槐門の位に至る。加之、國郡半ばは一門の所領となつて、田園盡く一家の進止たり。これ希代の朝恩にあらずや。今此等の莫大の御恩を思し召し忘れさせ給ひて、亂りがはしく法皇を傾け參らせさせ給はんこと、天照大神・正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなんず。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。然れば、君の思し召し立たせ給ふところ、道理半ばなきにあらず。中にもこの一門は、代々の朝敵を平げて、四海の逆浪を鎭めし事は無双の忠なれども、その賞に誇ることは傍若無人とも申しつべし。聖德太子十七箇條御憲法に『人皆心あり。心各〻執あり。彼を是し我を非し、我を是し彼を非す。是非の理誰か能く定むべき。相共に賢愚なり。鐶の如くにして端なし。爰を以て、たとひ人怒るといふとも、却つて我が咎を懼れよ。』とこそ

露れ〜させ〜給ひ〜候ひ〜ぬ

冥慮

などか候は〜ざる〜べき

併しながら

見えて候へ。然れども當家の運命未だ盡きざるによつて、御謀叛已に露れさせ給ひ候ひぬ、その上仰せ合はせらるゝ成親卿を召しおかれぬる上は、たとひ君いかなる不思議を思し召し立たせ給ふとも何の恐か候べき。所當の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈〻奉公の忠勤を盡くし、民の爲には益〻撫育の哀憐を致させ給はば、神明の加護に預つて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明佛陀感應あらば、君も思し召しなほすことなどか候はざるべき。君と臣とを比ぶるに、親疎分く方なし。道理と僻事とを並べんに、いかでか道理に附かざるべき。之は尤も君の御理にて候へば、叶はざらん迄も院中を守護し參らせ候べし。その故は、重盛初め叙爵より今大臣の大將に至る迄、併しながら君の御恩ならずといふことなし。この恩の重きことを思へば、千顆・萬顆の玉にも超え、その恩の深

一入再入

御大事でこそ候はんずらめ

迷盧八萬
須彌山のこと、高さ八萬四千由旬あるといふ。

忘れなんとす

蕭何
漢の高祖の功臣。

重う。深う。

き色を案ずるに、一入再入の紅にも過ぎたらん。然らば院中に參り籠り候べし。その儀にて候はば、重盛が身に代り命に代らんと契りたる侍ども少々候らん。これらを召し具して、院の御所法住寺殿を守護し參らせ候はば、流石以ての外の御大事でこそ候はんずらめ。悲しいかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷盧八萬の頂よりも尙高き父の恩忽に忘れなんとす。痛ましいかな不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲には已に不忠の逆臣ともなりぬべし。進退これ谷まれり。是非いかにも辨へ難し。申し受くる所詮は、たゞ重盛が首を召され候へ。その故は、院參の御供をも仕るべからず、また院中をも守護し參らすべからず。されば、かの蕭何は大功かたへに越えたるによつて官大相國に至り、劍を帶し沓を履きながら殿上へ昇ることを許されしかども、叡慮に背くことありしかば、高祖重う戒めて深

先蹤

果報

平家物語
十二卷、著者不明。別に灌頂卷と劍卷とがある、平治物語の後を承けて、二十餘年間の治亂を錄した軍記物語。

う罪せられにき。かやうの先蹤を思へば、富貴といひ榮華といひ朝恩と申し重職といひ、旁、極めさせ給ひぬれば、御運の盡きんこと難かるべきにあらず。富貴の家には祿位重疊せり、再び實なる木はその根必ず傷むと見えて候。心細うこそ候へ。いつまでか命生きて、亂れん世をも見候べき。たゞ末代に生を受けて、かゝる憂き目に遭ひ候重盛が果報のほどこそ拙う候へ。只今も侍一人に仰せつけられ、御壺の内へ引出されて、重盛が頭を刎ねられんずることは、いと易きほどの御事にこそ候はんずらめ。これを各、聞き給へ。」とて、直衣の袖も絞るばかりに搔口說き、さめ〴〵と泣き給へば、その座に並みゐたまへる平家一門の人々、皆袖をぞ濡されける。

（平家物語卷二、教訓）

「凡人には過多し」

二〇 諫を喜ぶべし

衆人の行、萬事につきて過と惡とあり。過とは、心に惡なけれども知らずして理にたがひ、或は心附かずして理にちがふをいふ。惡とは、善惡は知りながら、慾に引かれて理にたがふをいふ。これ自ら欺くなり。身を修むるには、過惡を改めて善に遷るを務とすべし。聖人には過なし。賢者以下には過なき事なし。殊に凡人には過多し。何ぞ今の世に過なき人あらんや。人の諫を聞きても用ひず、我に過あれども知らずして、過なしと思ふ人あり。これ自ら修むるに志なき故なり。若し自ら修むる人は、過多き事を知るべし。自ら省みて我が過を知り、人の諫を聞きて我が過を改め、善に遷るべし。

常に我が身を省みて、先づ我が過を知るべし。既に過を知り

過則云々
論語學而篇に出づ。

「過を知りて改めざるは惡」

「氣質の偏に克つ道」

なば、速に改むべし。尙書に「改過不吝。」と言へり。吝とは惜しむなり。過を惜しまずして早く改むるをいふ。孔子も「過則勿憚改。」とのたまへり。我が身の過を知らざるは愚なり。過を知りて改めざるは即ち惡なり。知らずして過つより尙その罪重し。

貝原益軒

過は必ず氣質の偏より起る。剛なる人は心强き所より過起り、柔なる人は心弱き所より過起る。氣質の偏なる所に克ちて、過なからん事を求むべし。學者常に我が氣質の偏を察し、その過を省みて改むべし。かくの如くせざれば、學問の益なし。これ學者の專ら務め行ふべき所なり。過を改むるは、氣質の偏に克つ道なり。氣質の偏なる所には克ち難し。常に力めて十

むげに

離婁　昔支那の目のよく見えた人。

子路　孔子の弟子、姓は仲、名は由、路はその字。

程子　程顥、河南洛陽の人、宋時代の學者。

「我身の惡しきを知るは難し」

分の力を用ふべし。

我が身聖人にあらず、過多きはうべなりとて、過を知りながら改めざる人は、むげに道に志なき人なり。自暴自棄と言ふべし。斯樣の志なき人にならひて、我が過を宥すべからず。

人の目は百里の遠きを見れどもその背を見ず。明鏡と雖もその裏を照らさず。離婁が明目なるも、そのまつげを見る事なし。こゝをもて、人知ありと雖も、我が身のあやまりを知り難し、故に君子の學は、專ら我が身を省み、人の諫を聞き用ひ、過を知りて改むるを旨とす。子路は、我が過を人の告ぐるを喜べり。故に「百世の師なり。」と、程子もいへり。人を知る事誠に難しといへど、我が身の惡しきを知るは、また人を知るよりも尙難し。こをもて、我が過を告げ知らする人あらば、誠に喜ぶべし。人僅なる財を贈り、或は酒肴を贈るも、受くる人これを喜ぶ。況やい

ひ難き諫をいひ、みづから知り難き過を聞くをや。我が身に於てかゝる大なる益なし。諫を聞く事、豈幸ならずや。子路の喜べる事、うべなるかな。過を聞く事を嫌ひ、諫をふせぐは、惡しき事の至りなり。諫を聞きて過を改むるは、醫を招きて病をいやすが如し。過あれども諫をふせぎて、人の正す事を嫌ふは、病を育てて醫を嫌ふが如し。その身を失へども顧みず。悲しむべし。

古の賢者は我が過を聞く事を好み、人の諫を喜べり。諫を聞きて過を改め善に遷らば、道に進む事はまりなし。善なる事これより大なるはなし。また古の賢者は人に譽めらるゝを喜ばず、我が善を聞く事を好まず。我が善を聞きては益なきのみならず、若しすこしにても我が身にほこる心出できて、善をなすに怠らば、大なる害あり。今の人は我が過を聞くことを好まず、

人の我を譽むるを悅び、我が善を聞く事を好む。世にへつらへる小人多き故、譽むる者多し。それを誠ぞと心得て身にほこり、善を行ふに怠るは愚なり。末の世の人は、唐も大和もすべて人の諫を好まず。故に人を諫むるを、ひとへに世なれぬかたくなる人と思へり。父として子を諫むれば、我が父は老耄せりといひ、また老人は今の風を知らずとて毀りうらむ。臣として君を諫むれば、おごれり無禮なりとて怒り遠ざく。こゝをもて人毎に世の俗になれ、人の欲にしたがひ、へつらひて諫めず。この風若し世に行はれ風俗となりなば、善は日々にすたり、惡は日々にさかんになりて、道行はるべからず。悲しむべし。およそ諫を言ふ人有難し。古來唐も大和も諫を喜ぶ人は、尤も有難し。故に諫むる人も稀なり。

（大和俗訓）

老耄

「古の賢者と今の人」

大和俗訓　八卷、貝原益軒の教訓書。

貝原益軒　名は篤信、筑前の人、江戸時代の儒者、正德四年（一七一四）歿、年八十五。

二一　鞭

吉田絃二郎

鞭打たるゝ苦痛は、それが私達の生活をより善く、より强いものとさせる時、限りもなく貴い價値を持つてゐる。

愛によりて與へらるゝ鞭の苦痛に、限りない價値が潛んでゐるといふことは言ふまでもないことであるが、たとへ憎みによりて與へられた鞭の苦痛と言つても、自分をより尊く、より善く、より强きものとなさしめるに價値ある場合が少くはない……憎みが眞劍である限りは。

鞭打つといふことは、鞭打つ人の生活にとりてよりは、鞭打たるゝ人の生活にとりて多くの意義を持つてゐる。私たちが最初から完全な人間でないかぎり、鞭打たれるといふことは呪ふべきことではない……それは悲しい苦しい事實には違ひな

いが。

鞭打たれる苦痛に誰か泣かないで居られよう。鞭の痛さを知ればこそ、鞭打たれることが意義あるものとなつて來る。

鞭の痛さを何かにまぎらして忘れようとするのは臆病である、どこまでも鞭の痛さを、痛さとして味ははなければならぬ。

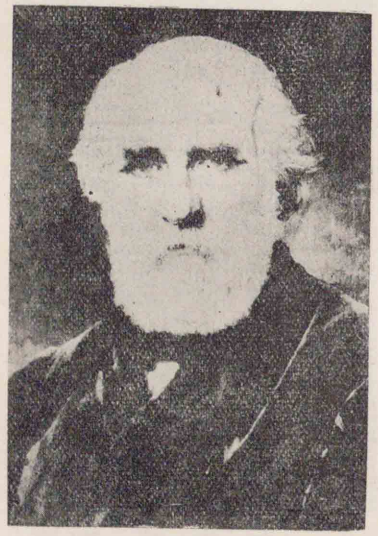
強い人間となることは、鞭の痛さを避けようとする者には不可能である。どこまでも強くなれ。そして、どのやうな殘忍な鞭にも、まともに向つて鞭の苦痛を味ははなければならぬ。鞭は私達をより善き人間とする　けれども、善き強き人間でなければ、鞭に耐へることは出來ない。

私達は與へられる鞭の苦痛を知ると同時に、尊いものであることを知つてゐる。けれども最後まで耐へ忍ぶには、往々にして餘りに弱い。弱きものはより惡しきものとなり、強きものは

より善きものとなる。善惡には二元はない。鞭を忍ぶと忍ばないとの差のみである。

鞭打たれるものに取つては、一つの輕い打擊も、より重き打擊と思はれる。鞭打つものに取つては、重き打擊も、あまりに輕きものと思はれるであらう。

鞭打つ打擊の餘りに重きを憂へる者は、愛の人であり、鞭打たれる打擊の餘りに輕きを感ずる者は、本當に自分を觀ることの出來る敬虔な生活者である。「俺は今日は何も與へる物を持たない。」と言つて、乞食の手を強く握つたツルゲーネフの心は美しい。併し鞭打たれ



ツルゲーネフ

ツルゲーネフ
ロシアの小說家。（西曆一八一八—一八八三）

る者よりも、より以上に深い悲しみと愛とを以てその友を鞭打つ者も尊い人格ではないか。

鞭打たれた痛さを忘れるものは愚人である。鞭打つことの辛さを忘れるものは冷酷な人間である。

鞭打たれるものは、終夜寢ることは出來ない。彼は輾轉として床上に悶える。鞭打つたものも亦終夜寢てはならぬ。自分の與へた鞭が友の心を傷つたとするならば、鞭打つた彼は、自分の心を傷るか、でなければ、友の心を築きなほしてやらなければならぬ。鞭打つ者には當然それだけの義務がある。

吉田絃二郎

輾轉　悶える

鞭を持つてゐる多くの人々は言ふ「自分は正しいことのために鞭打つた。」と。彼は、弱き不幸な惡人を鞭打つてすや〳〵と眠る。彼は繰り返して言ふ「正しきことのために鞭打つた。」と。そして彼は眠る。

彼等は誤つてゐる。鞭打たれるものの傷れた肉と傷れた心とは「正しきこと」のために慰められはしない。癒やされはしない。弱い人々にとり「正しきこと」は何の力も慰めも持つてゐない。彼等は愛に飢ゑてゐる。彼等は涙に渴してゐる。

鞭打たれたものの悲しみ以上に悲しみつゝ、夜もすがら悶えたことのある鞭打手でなければ、眞實の鞭打手ではない。

罪あるものを憎むものは、眞實の說教者となることは出來ぬ。罪あるものを愛し、罪を悲しむもののみが、鞭を使ふ權利を持つてゐる。

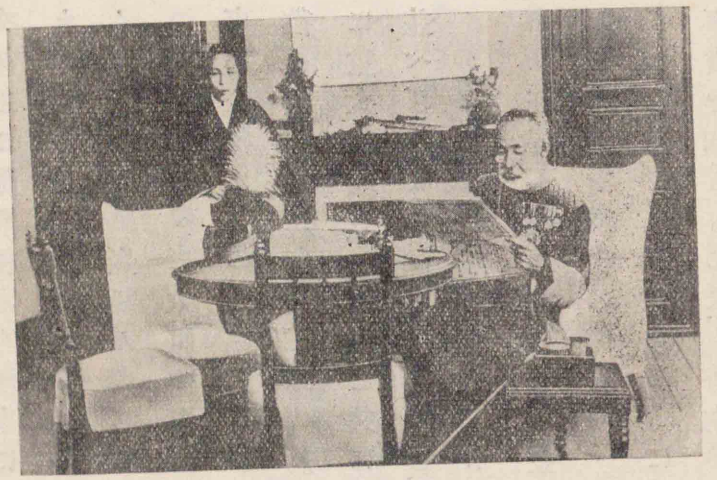
（生命の微光）

青天の霹靂
一大鐵槌
身を挺す
「大將の心事を誣ひてはならぬ」

二 乃木大將の殉死

德富蘇峰

乃木大將の自殺は、深夜の警鐘の如く、青天の霹靂の如く、多大深甚なる印象を天下に與へたり。苟くも心ある者は皆自己に與へられたる一大鐵槌として、これを受用するを禁ずる能はざりき。しかれども、乃木大將自殺の目的こゝに存したりとするは、これ決して大將の本意ならじ。恩賞は功勞に伴なふ。然れども恩賞を得んが爲に、身を挺して君國に奉じたりとするは、忠臣義士の心を商賣根性視するなり。大將の一死をわれに善用し、國に善用し、世道人心に善用するは吾人の責任なり。されど、後人に教訓せんが爲に、時世を警醒せんが爲に、汚風惰俗に大鐵槌を下さんが爲に、特に自殺したりといふに至りては、乃木大將の心事を誣ふるも亦甚し。



殉死當日の乃木夫婦

吾人の所見によれば、乃木大將の自殺の理由は、其の遺言書の第一條に於て盡くしたり。曰く。

自分此度御跡を追ひ奉り自殺候處恐入候。其の罪は不輕存候。然る處明治十年役に於て軍旗を失ひ、其の後死處得度心掛候へども其の機を得ず。皇恩の厚きに浴し、今日迄過分の御優遇を蒙り、追々老衰最早御役に立ち候時も無餘日候折柄、此度の御大變、何とも恐入候

「大將自殺の行徑、心事」

聚訴

黯然

暗淚萬斛

次第、茲に覺悟相定め候事に候。

と。大將自殺の行徑や此の如く明白なり。其の心事や、此の如く明々なり。豈紛々聚訴の餘地あらんや。

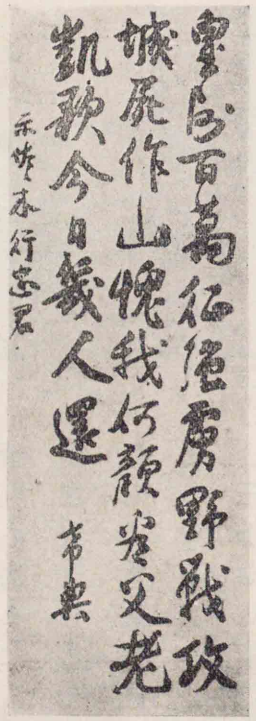
吾人はこゝに大將の事歴を説くの煩を必要とせじ。大將は事ある毎に、其の死處を尋ねたるを知れば足る。三十七八年戰役に際し、大將は第三軍の將として出征したり。其の責任や實に重大なりき。二兒と共に家を出づるに當りて、大將は三棺を並べざれば葬送する勿れと、家人を戒めたりといふ。

山川草木轉荒涼。　十里風腥新戰場。
征馬不前人不語。　金州城外立斜陽。

これ南山役後の作なり。無心にしてこれを讀む、尚黯然たらざるを得ず。況や此の時に於て、大將は其の一子を失ひたりし事實を知るものは、大將胸中の暗淚萬斛なりしを察して、自ら泣

「字々血淚の結晶」

かざらんとすとも能はざるべし。大將は本來多恨多情の質なれども、武士道の錬磨によりて剛腸の武士たりしなり。日本武士道の精華は、感情を發露するにあらずして、これを壓窄するにありき。一首二十八字、字々これ血淚の結晶なり。



旅順攻圍軍は古今未曾有の慘烈なる經驗を嘗めたりき。中隊・大隊さては聯隊の全滅さへ繰り返されたり。而して豫期より半歳を超越して、漸く開城を見るを得たり。大將は此の役に於てまた他の一兒を失ひたり。此の如くして二棺は豫期の如く出來たり。他の一棺は如何。

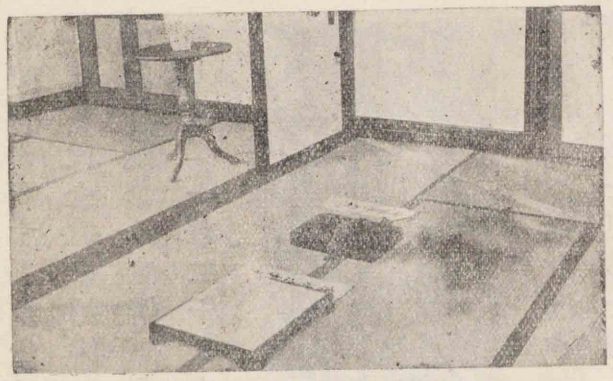
一將功成
一將功成リテ萬骨枯ル。（唐の曹松の句）

「旅順役後の大將の感懷」

「軍服を纏うた聖僧の俤」

結髮

皇師百萬征ニ強虜ヲ。
愧ル我何ノ顏看ニ父老ヲ。



殉死の室（將軍生前の居間）

野戰攻城屍作ル山。
凱歌今日幾人か還。

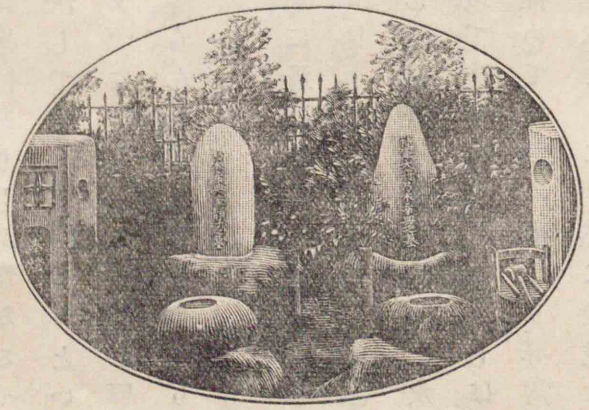
大將は實に一將功成萬骨枯の事實を痛感したり。銳敏なる良心・責任心・廉恥心はまたもや大將を驅りて、幾回か自決せしめんとしたり。されど、餘儀なく大將は徐に其の死處を待ちたり。

三十七八年以後の大將は、殆ど軍服を纏うたる聖僧なりき。然も獨善はその屑しとする所にあらず。大將は結髮以來、尊王愛國の大義を聞き、治國平天下の大道を學びたり。而して滔

明鑑
適材適所
鑑奬嘉諒

滔たる世潮に對して、及ぶ限りこれを矯正し、躬ら行ふ所を以てこれを及ぼし、以て大義・大道を支持せんとしたり。大將を學習院長に擢用し給ひたるは、先帝の明鑑にして、眞に適材を適所に置きたるものといふべし。

三十七八年戰役以來、孤獨なる家庭、淡枯なる生活中に表したる自損利他、奉公獻身の精誠は、深く先帝の鑑奬嘉諒し給ふ所となりたり。嘗て大將を擧げて、軍職に大用せんとの議を上りしものありしが、先帝は



乃木大將夫妻の墓

知遇
辱うす
鞠躬盡瘁

奇を衒ふ

固く執りてこれを容し給はざりきと傳ふ。畏けれども、これ大將を以て人の師表たるべきものと御推信ありしが爲なるべし。大將の進路は曲折あり頓挫ありて、決して和易輕快なりといふを得ざれども、其の晩節に於て、かくまでに聖天子の知遇を辱うしたり。大將が鞠躬盡瘁、老の將に至らんとするを知らざりし心事、以て察すべきにあらずや。

然るに、此の人にして先帝の御大患に逢ひ、崩御に逢ひたり。思ふに、大將は代らるべきものならば、身を以て代り奉らんと祈りしならん。最後まで確持したりし御平癒の希望は終に水泡に歸したり。こゝに於てか、一死を以て先帝に殉じ奉りしは、餘人にありては知らず、大將に於ては極めて自然の事なり、尋常の事なり。毎に求めてやまざりし死處は、こゝに偶然に發見せられたるなり。名を求むるにあらず、奇を衒ふにあらず、況や他人

ゆくなり

誄歌

闔門

「千古不朽の一大悲史」

にあてつくるが如きは大將の夢想だにせざりし所なり。

うつし世を神さりましし大君の
　　み跡慕ひて我はゆくなり

心事は唯此の如きのみ。蓋し乃木大將は先帝に殉じ、大將夫人は大將に殉じたり。大將夫妻の死は、宛も先帝大喪儀の最も壯嚴悲哀なる誄歌を合奏したるものなり。此の如くして豫期せられたる三棺は、豫期せられざる機會に四棺となりぬ。乃木家闔門・皆國事・王事に斃れぬ。明治・大正の過渡に於ける、血を以て描ける千古不朽の一大悲史は此の如くして出で來れり。嗚呼哀しいかな。

笹川臨風　名は種郎、東京市の人、明治三年生、歴史家、文學博士。
天空海濶　清濁併せ呑む
小牧山　愛知縣東春日井郡、天正十二年(三四四)ここで秀吉と家康とが戰つた。
千利休　名は宗易、千家流茶道の祖。
賤が岳　滋賀縣伊香郡、天正十一年(三四三)こゝで秀吉と柴田勝家とが戰つた。
佐久間玄蕃　名は盛政、柴田勝家の臣。
「天空海濶、勇快果斷の氣象」　進退度を失ふ　然諾を重んず　利害の打算

二三　男性美

笹川臨風

何をか男性美といふ。

氣象の天空海濶なるにあり、勇快果斷なるにあり。秀吉曰く、「我に謀叛するものはよもあるまじ。我ほどの主はあるまじきものを。」と。秀吉は男性美を發揮したる一人なり。彼の度量は大きく、胸は廣かりき。能く清濁併せ呑むの概ありき。小牧山の役、秀吉、千利久の茶會にあり。戰起ると聞くや、勇快果斷、そのまゝたち上り、尻をまくりて、えいや〳〵とて出陣せり。賤が岳の戰には、疾風迅雷の如く進軍し、須臾にして、金瓢の馬表、岳麓に現れ、佐久間玄蕃をして進退度を失はしめたり。

男性は義俠心あるべきなり。然諾を重んじ、他人の急に走り、利害の打算以外に面白き氣象あらざるべからず。往時我が國

市井の徒　氣魄　「義俠心がなければならぬ」　曖昧模糊

に男伊達といふものありき。多くは市井の徒にして、中には無賴漢もなきにあらず。その道德も偏頗にして、識見も高からざりしが、その勇氣ありて水火をも辭せざる底の心意氣に至りては、誠に欽すべきものありき。威武に屈せず、權貴を恐れず、自家の利益を犧牲にして他を濟ふの氣魄に至つては、また江戸時代の名物たるに恥ぢずと謂ふべし。

男性は能く責任を知る。事を曖昧模糊に附するは男子の爲すべき所にあらず。人の臣としては、人の臣たる責任を知り、人の將たらば、人の將たるべき責任を知る。學生としては學生の責任を知り、子としては子の責任を知る。凡ての人がみなこの責任を知らば、國運は隆々として旺なるべく、社會の文化は駸々として進むべし。野球・庭球の如き、又漕艇の如き、各人その責任を知つてこれを盡くすを以て、その遊技に統一あり興味あり。

「責任を知る」

左顧右眄

褐寛博

古聖人
孔子を指す。

若し個々勝手の事を爲して、その責任を蔑にせば、到底行はるべきものにあらず。遊技には獨り責任を知りて、その他には責任を忘れんとするが如きは、思はざるの甚しきものなり。

男性の美なるは常に後暗からざるにあり。後暗きものはとかくに隱れんとし、左顧右眄して、敢て進まざるなり。男子は公明正大、皎々として白日の如くなるべし。自ら潔きものは進むに勇あり、事を爲すに恐るゝ所なし。孟子曰く、「自反而不縮、雖褐寛博、吾不惴焉。自反而縮、雖千萬人、吾往矣。」と。人誰か過なからん。過を悔ゆるが男らしき所にして、男性美の存する所なり。古聖人はいへり、「過則勿憚改。」と。また曰く、「君子之過、如日月之食。」と。非を遂げ過を隱しおほせんとするは、畢竟自ら難地に踏み込んで、常に後暗き思ひをなすものなり。過あらば直にこれを悔い、悔いてこれを改むるを勇ありとなす。過は日月の蝕する

翳す

渇仰

「後暗からぬにある」

「大丈夫を以て任ぜねばならぬ」

彼の蒼

彼ノ蒼タル者ハ天、曷ゾ其レ極有ラン。韓愈。(祭二十二郎一文)

が如く、浮雲の翳すが如し。これを改むれば、また赫々として光明あり。男性美はその男らしきによりて現る。英雄といひ、偉人といひ、君子といふ、皆男性美を發揮したるによりて、他の渇仰を受くるなり。

古の氣概あるもの、識見あるものは、自ら稱して大丈夫といへり。大丈夫とは「ますらを」なり、男子なり、眞男子なり、最も能く男性美を發揮するものをいふ。自ら大丈夫と信ずれば、時に遇ふと遇はざると、運と不運と、皆問ふ所にあらず。自家が信ずる道に進み、その所信を貫徹するに於て、最も勇あり、斷あるなり。余は今の青年が常に自ら大丈夫を以て任じ、その男性美を發揮せんことを切望せずんばあらず。

彼の蒼たるものは天、我等が住める大地すら、既に滄海の一粟に過ぎず。況や我が生の須臾なるに於てをや。然れども、その

滄海の一粟
眇タル滄海ノ一粟ノミ。蘇東坡。（前赤壁賦）

人の褌を以て相撲をとる

「男性としての誇」

須臾なると、その滄海の一粟たるとは問ふを要せず。男性美は宇宙に於ける一奇觀なるべきなり。感化は永遠なり。男子の事業は悠久に亙りて渝らざるなり。我等は男と生まれたるを誇とす。男にして男らしからずんば、寧ろ男たらざるに若かず。既に男として生まれたる以上は、男性美を發揮せずんば、男としての生まれがひなきなり。

男子としては眞男子たるべし、大丈夫たるべし、人の褌を以て相撲を取る勿れ。我が力を賴みとし、我が生の眞面目を發揮し、我が事業をして久遠の事業たらしめよ。一時は花の如し。永遠は果實なり、種子なり。

（男性美）

芥川龍之介
東京市の人、明治二十五年生、小說家、昭和二年歿、年三十六。

ストリンドベルク
スウェーデンの大戲曲家。（西暦一八四九—一九一二）

一瞥
岐阜提燈

一瞥

二四 手巾

芥川龍之介

東京帝國法科大學教授、長谷川謹造先生は、ヴェランダの籐椅子に腰をかけて、ストリンドベルクの作劇術を讀んでゐた。

先生は警拔な一章を讀了るごとに、黃いろい布表紙の本を膝の上へ置いて、ヴェランダに吊してある岐阜提燈の方を、漫然と一瞥する。不思議な事に、さうするや否や、先生の思量はストリンドベルクを離れてしまふ。その代り、一緒にその岐阜提燈を買ひに行つた奧さんの事が心に浮んで來る。先生は、留學中、米國で結婚をした。だから奧さんは、勿論、亞米利加人である。が、日本と日本人とを愛する事は、先生と少しも變りがない。殊に、日本の巧緻なる美術工藝品は、少からず奧さんの氣に入つてゐる。隨つて、岐阜提燈をヴェランダにぶら下げたのも、先生の好

みと言ふよりは、寧ろ奥さんの日本趣味が、一端を現したものと見て、然るべきであらう。先生は、本を下に置く度に、奥さんと岐阜提燈と、さうして、その提燈によつて代表される日本の文明とを思つた。先生の信ずる所によると、日本の文明は、最近五十年間に、物質的方面では、可成顯著な進歩を示してゐる。が、精神的には、殆ど、これといふ程の進歩も認める事が出來ない。否、寧ろ、或意味では墮落してゐる。では、現代に於ける思想家の急務として、この墮落を救濟する途を講ずるのには、どうしたらいゝのであらうか。先生は、これを日本固有の武士道による外はないと論斷

芥川龍之介

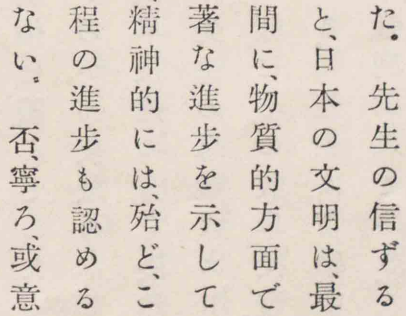
偏狹

歸趨

芥川龍之介筆

人生は落丁の多い本に似てゐる。一部を成してゐるとは稱し難い。しかし兎に角一部を成してゐる。

した。武士道なるものは、決して偏狹なる島國民の道德を以て、目せらるべきものでない。却つてその中には、歐米各國の基督教的精神と、一致すべきものさへある。この武士道によつて、現代日本の思潮に歸趨を知らしめる事が出來るならば、それは、獨り日本の精神的文明に貢獻する所があるばかりではない。延いては、歐米各國人と日本國民との相互の理解を容易にするといふ利益がある。或は國際間の平和も、これから促進されるといふことがあるであらう。――先生は、日頃から、この意味に於て、東西兩洋の間に横たはる橋梁にならうと思つてゐる。かういふ先生



芥川龍之介筆

丹念に
清興

にとつて、奥さんと岐阜提燈と、その提燈によつて代表された日本の文明とが、或調和を保つて、意識に上るのは決して不快な事ではない。

所が、何度かこんな滿足を繰り返してゐる中に、先生は、追々、讀んでゐる中でも、思量がストリンドベルクとは緣の遠くなるのに氣がついた。そこで、ちよいと、忌々しさうに頭を振つて、それから又丹念に、眼を細い活字の上に曝しはじめた。

しかし、先生は、その熱心な書見を中途でやめなければならなかつた。何故といへば、突然、訪客を告げる小間使が、先生の清興を妨げてしまつたからである。

先生は本を措いて、今し方小間使が持つて來た小さな名刺を一瞥した。名刺には小さく西山篤子と書いてある。どうも、今まで會つた事のある人ではないらしい。交際の廣い先生は、籐

椅子を離れながら、それでも念の爲に、一通り、頭の中の人名簿を繰つて見た。がやはり、それらしい顏も、記憶も浮んで來ない。そこで、栞代りに、名刺を本の間へはさんで、それを籐椅子の上に置くと、落着かない樣子で、銘仙の單衣の前を直しながら、ちよいと又、鼻の先の岐阜提燈へ眼をやつた。誰もさうであらうが、待たせてある客より、待たせて置く主人の方が、かういふ場合は多く待ち遠しい。

やがて、時刻を計つて、先生は、應接室の扉を開けた。中へ這入るのと、椅子に掛けて居た四十恰好の婦人の起ち上つたのとが、殆ど同時である。客は、先生の判別を超越した、上品な鐵御納戸の單衣を着て、それを黑の絽の羽織が、胸だけ細く餘した處に、帶止めの翡翠を、涼しい菱の形に浮き上らせてゐる。髮が、丸髷に結つてある事は、かういふ些事に無頓着な先生にもすぐわかつ

た。日本人に特有な、丸顔の、琥珀色の皮膚をした、賢母らしい婦人である。先生は一見して、この客の顔を、どこかで見たことがあるやうに思つた。

「私が長谷川です。」

先生は、愛想よく、會釋した。かういへば、會つた事があるのなら向うでいひ出すだらうと思つたからである。

「私は西山憲一郎の母で御座います。」

婦人は、はつきりした聲で、かう名乘つて、それから、丁寧に、會釋した。

西山憲一郎といへば、先生は覺えてゐる。よく思想問題を提げては、先生の許に出入した。それが、此の春、腹膜炎に罹つて、大學病院へ入院したので、先生も序ながら、一二度見舞に行つてやつた事がある。此の婦人の顔を、どこかで見た事があるやうに

朝鮮團扇

思つたのも、偶然ではない。あの眉の濃い、元氣のいゝ、青年と、此の婦人とは、日本の俗諺が、瓜二つと形容する樣に、驚く程、よく似てゐるのである。

「はあ、西山君の……さうですか。」

先生は獨り頷きながら、小さなテーブルの向うにある椅子を指した。

「どうか、あれへ。」

婦人は、一應、突然の訪問を謝してから、又、丁寧に禮をして、示された椅子に腰をかけた。その拍子に、袂から白いものを出したのは、手巾であらう。先生は、それを見ると、早速テーブルの朝鮮團扇を勸めながら、その向側の椅子に、座を占めた。

「結構なおすまひでございます。」

婦人は、稍〻、わざとらしく、室の中を見廻した。

「いや、廣いばかりで一向かまひません。」

斯ういふ挨拶に慣れた先生は、折から小間使の持つて來た冷茶を、客の前に直させながら、直に話題を相手の方へ轉換した。

「西山君は如何です。別段御容體に變りはありませんか。」

「はい。」

婦人は、つゝましく兩手を膝の上に重ねながら、ちよいと語を切つて、それから、靜に斯う言つた。やはり、落着いた、滑かな調子で言つたのである。

「實は、今日も悴の事で上つたのでございますが、あれも到頭いけませんでございました。在學中は、色々先生に御厄介になりまして……。」

婦人が手に取らないのを遠慮だと解釋した先生は、この時丁度、紅茶茶碗を口へ持つて行かうとしてゐた。なまじひに、くど

く、勸めるよりは、自分で啜つて見せる方がいゝと思つたからである。所が、まだ茶碗が柔らかな口髭に屆かない中に、婦人の語は、突然先生の耳をおびやかした。茶を飲んだものだらうか、飲まないものだらうか。――かういふ思案が、青年の死とは、全く獨立して、一瞬の間、先生の心を煩はした。が、何時までも、持ち上げた茶碗を、片づけずに置く譯には行かない。そこで先生は思ひ切つて、がぶりと半碗の茶を飲むと、心持ち眉を顰めながら、むせるやうな聲で、「そりやあ」と言つた。

「病院に居りました間も、よくあれがお噂を致したものでございますから、お忙しからうとは存じましたが、お知らせかたゞお禮を申し上げようと思ひまして。」

「いや、どうしまして。」

先生は、茶碗を下へ置いて、その代りに青い蠟を引いた團扇を取

憮然

り上げながら、憮然として、斯う言つた。

「到頭、いけませんでしたかなあ、丁度これからといふ年だつたのですが。……私は又、病院の方へも御無沙汰してゐたものですから、もう大抵、よくなられた事だとばかり、思つてゐました。

――すると、何日になりますかな、なくなられたのは。」

「昨日が丁度初七日でございます。」

「やはり病院の方で……。」

「さやうでございます。」

「いや、實際、意外でした。」

「何しろ、手の盡くせるだけは、盡くした上なのでございますから、あきらめるより外は、ございませんが、それでも、あれまでに致して見ますと、何かにつけて、愚痴が出ていけませんのでございます。」

擧措

日常茶飯事

訃音

こんな對話をしてゐる間に、先生は、意外な事實に氣がついた。それは、此の婦人の態度なり擧措なりが、少しも自分の息子の死を、語つてゐるらしくないと言ふ事である。眼には、涙もたまつてゐない。聲も、平生の通りである。その上、口角には、微笑さへ浮んでゐる。これで、話を聞かずに、外貌だけ見てゐるとしたら、誰でも、此の婦人は、日常茶飯事を語つてゐるとしか、思はなかつたに相違ない。――先生には、之が不思議であつた。

昔、先生が、伯林に留學してゐた時分の事である。ウィルヘルム第一世が崩御された。先生は、此の訃音を行きつけの珈琲店で耳にしたが、固より一通りの感銘しか受けなかつた。そこで、何時ものやうに、元氣のいゝ顏をして、杖を脇に挾みながら、下宿へ歸つて來ると、下宿の子供が二人、扉を開けるや否や、兩方から先生の頸に抱きついて、一度にわつと泣き出した。一人は、茶色

子煩惱

元首

怪訝

のジャケツを着た、十二になる女の子で、一人は紺の短いズボンを穿いた、九つになる男の子である。子煩惱な先生は、わけがわからないので、二人の明るい色をした髪の毛を撫でながら、頻に、「どうした〳〵。」と言つて慰めたが、子供は中々泣きやまない。

さうして、しやくり上げながら、こんな事を言ふ。

「おぢいさまの陛下がおなくなりなすつたのですつて。」

先生は、一國の元首の死が、子供にまで、これ程悲しまれるのを不思議に思つた。獨り皇室と人民との關係といふやうな問題を、考へさせられたばかりではない。西洋へ來て以來、何度も先生の視聽を動かした、西洋人の衝動的な感情の表白が、今更のやうに、日本人たり、武士道の信者たる先生を、驚かしたのである。其の時の怪訝と同情とを一緒にしたやうな心持は、今に忘れようとしても、忘れる事が出來ない。——先生は、今も丁度、其の位の

程度で、逆に、この婦人の泣かないのを不思議に思つてゐるのである。

が、第一の發見の後には、間もなく、第二の發見があつた。

丁度、主客の話題が、なくなつた青年の追懷から、その日常生活の細目に及んで、更に又、もとの追懷へ戻らうとしてゐた時である。何かの拍子で、朝鮮團扇が、先生の手を辷つて、ばたりと寄木の床の上に落ちた。會話は無論寸刻の中斷を許さない程、切迫してゐる譯ではない。そこで、先生は、半身を椅子から前へのり出しながら、下を向いて、床の方へ手を伸ばした。團扇は、小さなテーブルの下に——上草履に隱れた婦人の白足袋の側に落ちてゐる。その時、先生の眼には、偶然、婦人の膝が見えた。膝の上には、手巾を持つた手がのつてゐる。勿論これだけでは、發見でも何でもない。が、同時に、先生は、婦人の手がはげしくふるへて

ゐるのに氣が付いた。ふるへながら、それが感情の激動を强ひて抑へようとするせゐか、膝の上の手巾を、兩手で裂かないばかりに堅く握つてゐるのに氣が付いた。さうして、最後に、皺くちやになつた絹の手巾がしなやかな指の間で、さながら微風にでも吹かれてゐるやうに繡(ぬひとり)のある緣を動かしてゐるのに氣が付いた。――婦人は顏でこそ笑つてゐたが、實はさつきから全身で泣いてゐたのである。

團扇を拾つて、顏をあげた時に、先生の顏には今までにない表情があつた。見てはならないものを見たと言ふ敬虔な心持と、さういふ心持の意識から來る或滿足とが、多少の芝居氣で誇張されたやうな、甚だ複雜な表情である。

「いや、御心痛は、私のやうな子供の無いものにも、よくわかります。」

先生は、眩しいものでも見るやうに、稍、大仰に頸を反らせながら、低い、感情の籠つた聲でかう言つた。

「有難うございます。が、今更、何と申しましても、かへらない事でございますから……。」

婦人は心もち頭を下げた。晴々した顏には、依然として豐な微笑が湛へられてゐる。――

それから、二時間の後である。先生は湯に入つて、晩餐を濟ませて、食後の果物をつまんで、それから又、樂々と、ヴェランダの籐椅子に腰を下した。

長い夏の夕暮は、何時迄も薄明りを漂はせて、硝子戸を開けはなした廣いヴェランダは、まだ容易に暮れさうなけはひも無い。先生は、其の微な光の中で、さつきから、左の膝を右の膝の上へ載

せて、頭を籐椅子の背にもたせながら、ぼんやり岐阜提燈の赤い房を眺めて居る。先生の頭の中は、西山篤子夫人の健氣な振舞で、いまだに一杯になつてゐた。

先生は、飯を食ひながら、奥さんに其の一部始終を話して聞かせた。さうしてそれを、日本の女の武士道だと賞讃した。日本と日本人とを愛する奥さんが、此の話を聞いて同情しない筈がない。先生は奥さんに熱心な聽手を見出した事を滿足に思つた。奥さんとさつきの婦人と、それから岐阜提燈と――今では、此の三つが或倫理的な背景を持つて先生の意識に浮んで來る。

（羅生門）

高山樗牛
名は林次郎、山形縣の人、文學博士、文藝評論家、明治三十五年歿、年三十四。

喝破
「高天濶地、獨立獨歩の大豪傑」

二五 日蓮の溫情

高山樗牛

日蓮上人は、獨り鎌倉時代のみならず、日本歴史上の各時代を通じて類稀なる豪傑なり。實に上人は、宇宙間第一の眞理なりと確信せる法華經の大義を唱へて、滿天下の衆生を救はんとの大願を起し、この大願の前には如何なる迫害をも甘受すべしと覺悟し、「法華經の爲に此の臭き頭を刎ねられんは砂に黄金を換へ、糞に米を代ふるなり。」と、喝破し、眼中權勢もなく、威武もなく、眞に高天濶地、獨立獨歩の大豪傑なりき。さりとて又豪邁なる膽氣のみありて、溫柔なる人情に乏しかりしにはあらず。日蓮上人が、人情に篤く恩誼に深く、その情、時としては禽獸の末にまでも及びしことは、後世の人をして感涙に堪へざらしむるものあり。今、左に一二の例を擧ぐべし。

歸依
不惜身命
龍の口
川口村龍口寺の地、鎌倉幕府の刑場。
藹然
たとひ……とも

上人の信者に、四條金吾とて、江馬遠江守の老臣ありき。この人武士の身分ながら、夙に妙法に歸依して上人の門下に列り、不惜身命の覺悟をもつて、上人と共に諸〻の迫害を被れり。上人龍の口にて斬られんとせし時は、路上に馬の轡をとりて慟哭し、刑場に從ひて殉死せんと決心せり。上人は深くこの人の節義に感じ、後年幾多の消息文は常に藹然たる恩愛の情を湛へたり。就中、「殿にして若し死後地獄に墮せられなば、日蓮も亦共に地獄に墮すべし。たとひ釋尊及び十方の諸佛、手を引き袂をとらへて淨土に迎ふとも、振り切つて必ず殿とともに地獄に墮すべし。」との意を述べられたり。その恩愛の濃なること喩ふべきものなし。天下の威武を敵として一

日蓮上人

「上人は恩愛の情に篤かつた」

本化門下
身延山
南巨摩郡、南麓に日蓮宗の總本山久遠寺がある。

「上人は孝子傳中の人であつた」

檀越
波木井氏
南部實長、日蓮信者、入道して日圓といふ、永仁五年(一九五七)歿、年七十六。

歩も退讓することなき大丈夫の上人にして、他面に於てこの兒女の涕涙ある、殊に貴ぶべきを覺ゆ。

上人が親を思ふ心の切なる、六十年の生涯を通じて最も明かに現れ、夙に本化門下の龜鑑となれり。殊に晩年日本六十箇國、島二つの内に、五尺に足らざる身一つを置く處なくして、身延山の深谷に隱るゝや、九箇年が間、五十餘町の險山を日ごとに一度は必ず攀ぢ登りて、遙に上人の故郷なる房州を煙波の間に望み、經を捧げて父母の恩を拜謝せしが如きは、古今東西の如何なる孝子傳中にも、これと比較し得べき者あらざるべし。

上人、病篤くして甲州の身延より武州池上に移る時、身延山所領の檀越波木井氏より、乘馬一匹に舍人一人を添へて遣されけり。上人この馬をこよなく愛せられ、池上に著きて波木井殿に送れる書中にも、この馬を色々いたはしく思ふ旨を書かれたる

舍人

たとしへなく

こそ…あるなれ

「眞の豪傑としての上人」

終に、「知らぬ舍人を付けて候はんは、覺束なく覺え候。罷り歸り候はんまで、この舍人付けおき候はんと存じ候。」と、あるなど、自分の病苦を厭はず、ひとへに一匹の馬を慈しむ情、たとしへなく貴からずや。眞の豪傑は人の爲し難きことを爲すと同時に、人情に篤く恩愛に濃やかなるものなり。能く人に忍び世に戻るをのみ偉人の業と心得るは、豪傑の半面を遺れたるものなり。此の情愛なくば彼の豪邁もあらじ、彼の豪邁あればこそ此の情愛もあるなれ。二者表裏し融會して、こゝに豪傑の全人格を造るなり。かの美はしき薔薇の織物を見ずや、表に花と刺と別々に織り成さるれども、その裏面を見れば、花を織る絲、卽ち刺を織る絲にあらずや。

（樗牛全集）

幸田露伴
名は成行、東京市の人、慶應三年（一五七）生、文學者、文學博士。

大綱
細目

精刻恰當

二六 自覺

幸田露伴

それ自覺は眞智なり、眞德なり、眞情なり、而も又大威力なり。自覺に因らずんば一切の事能く成さるゝこと無く、能く保たること無し。自覺の一切の事功に及ぼす力は、喩へば水の一切の草木に及ぼす力の如し。一莖・一葉・一花瓣の微といへども、水の力の至らざるは無し。自覺の力一たび動けば、一切人間の事功は、大綱より細目に至るまで、眞正の人間の知識の漲り溢るゝを見ざること無し。自覺は卽ち眞智なればなり。

蓋し、自覺より生ずる調査ほど嚴正なる調査は無く、自覺より生ずる辨別ほど明細なる辨別は無く、自覺より生ずる思量決斷ほど精刻恰當なる思量決斷は無し。例せば、一人衞生の道の輕んずべからざるを自覺すれば、其の人の一切の所行は自ら衞生

こそ……口惜しけれ
緣無き衆生
度す

の道に背くことなきに至るべく、之を衞生の道の重んずべきを自覺すること無くして、他の保護監督を被れる蠻民の、動もすれば違法の擧動を爲さんとするに比しては、甚だ安全なるべきが如し。衞生の道の重んずべきは言ふ迄も無し。然れども民庶愚なれば蒙々たり。病んでは巫に問ひ、患ひては鬼に媚ぶるの俗の改まらまざるや、治を爲す者苦心焦慮して、法を立て訓を垂ると雖も、其の功甚だ少し。これ民庶が衞生の道を重んずべきを自覺せざればなり。

自覺の率ゐざる智は、喩へば氷の上の顏料の、其の色美ならざるにはあらざれども、つひに其の氷を染むること能はざるが如し。如何なる妙巧の智慧方便も、自覺せざる民庶には徒費せらるゝ定めなるこそ口惜しけれ。緣無き衆生は猶度すべくとも、自覺せざる衆生は實に度すべからざるなり。蓋し自覺せざる

杜絕

は卽ち眞智を杜絕せるものなればなり。

之に反して自覺の智に於けるは、喩へば窓を穿つて光線を得るが如し。窓あれば卽ち光線あり、自覺すれば卽ち眞智來る。一人衞生の道の重んずべきを自覺すれば、其の一人は必ず頓て衞生の道に於ける智を得べきなり。一戸自覺すれば、一戸其の智を得べきなり。而して、光線あれば則ち溫熱あるが如く、眞智あれば則ち妙果あるべく、衞生の道に於ける一人の眞智は一人の身を護るべく、一戸の眞智は一戸の民を護るべく、一村・一國眞智あらば、一村・一國長へに健全安穩の幸を享くべきなり。自覺なる哉、自覺なる哉、自覺は眞智なり。

豐島與志雄
福岡縣の人、明治二十三年生、佛文學者、東京帝國大學講師。

二七 生活の心境

豐島與志雄

人の生活に最も大事なのは、自分の生を愛し慈しむ感情である。生きてゐるといふことに對する自覺的な輝かしい感情である。なぜならば、さういふ感情からこそ、ほんたうに純な素直な力強い生活心境が生まれてくるのだから。

この自分の生を愛する心を、我々は忽忙たる人生の中にあつて、往々にして失ひがちである。そして、第二義的なものに——生の本質にではなくして、生の便宜たるものに——ばかり眼を向けがちである。名聲だの、金錢だのといふやうなものが、更に卑近な方面では、衣食住に關する餘贅なものが、我々の前に立ち塞がつて、我々の心を惑はし煩はしがちである。勿論、それ等の

功利
「ほんたうの生活の味」
「人を正しく生かすもの」

ものは生活に必要であり、活動力を刺激しはする。併しながら、それ等のものに捉はれる時、それ等のものばかりを追求する時、人はたゞ功利に走つて、ほんたうの生活の味を味はひ得なくなる。それ等のものが目的となつて、生きることが方便となる。

自分の生を——一生を方便とする、それほどみじめな、あさましいことがあらうか。人にとつては、生きることが目的であつて、名聲や金錢や衣食住に關する餘贅などは、生きる爲の方便であるべきである。勿論、こゝにいふ生きるといふことは、單に生命を持續することばかりでなく、生きるといふことが必然に包含してゐる仕事などをも含めていふのである。そして、人を正しく生かすものは、己の生を愛する心である。己の生を愛し慈しむ心を、我々は大自然に接する時、最も多く體得する。

拂拭
「大自然の君臨」
赤裸々
「ぽつりと冴えた心の眼」

大自然に接すると、我々は自己の微小を感ずる。人生に於て、我々の眼を強く牽きつけてゐたあらゆるものの價値が一時に拂拭され、すべてのものの中心であつた自分自身が微々たるものになつて、たゞ悠久永劫な大自然のみが、何ものにも無關心な大きさで君臨する。その時、我々自身は、もはや地上の蟲けらにも等しく、濱の眞砂の一粒にも等しくなる。さまゞの雜念にふくれあがつてゐた我々の心は、それ等の雜念を拂ひ落して、赤裸々な清さに澄みかへり、さまゞの雜事をまとつてゐた我々の生は、それ等の雜事を拂ひ落して、たゞあるべき儘の姿で横たはる。そこには、もはや生も死もなく、生死を超えた悠久な落著のみがある。そしてこの偉大な平靜の中に於ては、ぽつりと冴えた心の眼が、自分のあらはな生の上にぢかに据ゑられる。それは輝かしい直接內觀の瞬間である。生きてゐることが、如何

安念
小我
大我
消息

に有難く貴いかを、しみ〴〵と感じさせられる。そして自分の生を愛し慈しむ念が胸の底から湧き上つてくる。

深山幽谷に身を置く時、大海に舟を浮べる時、或は仰いで大空に見入る時、我々は最初、自己の微小を感ずるけれども、何等かの安念に支配されないかぎり、我々はその感じに壓倒されるものではない。自己を微々たるものと感ずるものは、あらゆる雜念雜事を拂ひ去つた赤裸々な、平素見なれない自分自身に對する一時の賴りなさに過ぎない。心を鎭めて觀ずれば、自己の微小はやがて自己の偉大となる。「小我を去つて大我に還る。」とはこの間の消息である。たとひ我々の生が、落ち散る一枚の木の葉に等しからうと、その一枚の木の葉は、やがて深山幽谷全體の氣魄に相通ふものである。たとひ我々の生が、波間に漂ふ一の

泡沫に等しからうと、その一つの泡沫は、やがて大海全體の力に相通ふものである。たとひ我々の生が、一つの仄な星の光に等しからうと、その一つの仄な星の光は、やがて天空に散布してゐる無數の星辰の輝きに相通ずるものである。しかも不思議なのは、微々たる自分の生を靜に見守ることによつて、さういふひろびろとした境地へ踏み出してゆく生きた心の働きである。生きてゐるといふことが、如何に輝かしい貴いことであるか。我々は大自然に接して、はじめてほんたうに自分の生を愛し、いつくしみたい念が、胸の底からしみ〴〵と湧き上つてくる。

星辰

「大自然に接して自己の生を愛するを知る」

二八　思想上の三勢力

北村透谷

北村透谷　名は門太郎、神奈川縣の人、文學者、明治二十七年歿、年二十七。

妍を競ふ
消長窮達

一國民の心性上の活動を支配する者三あり。曰く、過去の力。曰く、創造的勢力。曰く、交通の勢力。

今日の我が國民が思想上に於ける地位を詳にせんとせば、少くとも右の三勢力に訴へ、而して後明らかに其の關係を察せざるべからず。「過去」は無言なれども、能く「現在」の上に號令の權を握れり。歴史は意味なきペーヂの堆積に非ず。幾百世の國民は其が上に心血を印して去れり。骨は朽つべし、肉は爛るべし。然れども、人間の心血が捺印したる跡は之を抹すべからず。秋果熟すれば卽ち落つ。落つるは偶然にして、偶然にあらず。春日光暖にして、百花妍を競ふ。之も亦偶然にあらず。自然は意味なきに似て、大なる意味を有せり。一國民の消長窮達を言ふ

繫纏卓犖率ゐ

無明

無盡無絶

蓊鬱

時に於て、吾人は深く此の理を感ぜずんばあらず。引力により て相繫纏する物質の力、自由を以て獨自卓犖たる精神の力、この二者が相率ゐ、相爭ひ、相呼び、相結びて、幾千幾百年の間、一の因より一の果に、一の果より他の因に、轉々化し來りたる跡、豈一朝一夕に動かし去るべけんや。

然れども、「過去」は常に死に行くものなり。而して「現在」は恆に生き來るものなり。「過去」は運命之を抱きて、幽暗なる無明に投じ、「現在」は暫く紅顏の少年となりて、希望の袂に縋る。一は死して、一は生く。この生々死々の際、一國民は時代の車に乘りて無盡無絶の長途を輪轉す。

偉大なる思想は、一擧手一投足の間に發生すべきにあらず。寧ぞ知らん、一國民の耐久的修養の力なるものを俟つにあらざれば、蓊鬱たる大樹の如き思想は到底期すべからざるを。

好徵

癡人の夢

過去の勢力は之を輕んずべからず。然れども、徒に過去の勢力に頑迷して、乾枯せる歷史の槁木に夢醉するは、豈國民として有爲の好徵とすべけんや。創造的勢力は何れの時代にありても、之を缺くべからず。國民の生氣は、その創造的勢力によつてトするを得べし。最も多く保守的なるとき、最も多く固形的なる時、國民は自然に墳墓を眺めて進みつゝあるなり。創造的勢力は潮水を動かして前進せしむるもの、之なくしては思想豈圓滑の流動あらんや。之なくしては、國民豈進歩的生氣あらんや。

創造的勢力と馬を駢べて、相馳驅するものあり。之を交通の勢力とす。今や、思想に對する世界は、日一日より狹くなり行かんとす。東より西に動く潮あり。西より東に流るゝ潮あり。潮水は天然なり。人工を以て之を支へんとするは、癡人の夢に類するものなり。東西南北は思想の側のみ。思想の城廓にあ

らざるなり。思想の最極は圓環なり。叨(みだり)に東洋の思想に執著するも愚なり。叨に西洋思想に心醉するも癡なり。奔流・急湍に舟を行るは難し。然れども舟師は能く富士川を下りて、船客のこゝろを安うす。富士川を下るは難し。然れどもその最も難きは、東西の二大潮流が狂湧狂瀉して相撞突するの際にあり。此の際に於て、能く過去の勢力を無みせず、創造的勢力と、交通の勢力とを、鐵鞭の下に驅使するものあらば、吾人は之を國民が最も感謝すべき「國民的思想家なり。」と、云はんと欲す。（透谷全集）

狂湧狂瀉
無みす

三訂 新日本讀本 卷五（終）

常用漢字

（大正十二年五月臨時國語調査會發表、昭和六年五月修正）（千八百五十八字）

【一】一丁七丈三上下不世丙並【丨】中【丶】丸主【丿】之久乏乘【乙】乙九乞也乳亂【亅】了事【二】二互五井【亠】亡交京亭亦【人】人仁仇今介仕他付代令以仰仲件任伊伏伐休伯伴伺似位低住佐何余佛作伸使來佳例侍供依侮侯侵便係促俱俊俗保俠信修俳俵俸倆倉個倍倒候借倫假偉偏停健側偶傍傑備催働傳債傷傾僅像僚僞僧價儀億儉償優【儿】元兄充兆兇先光克兌免兒【入】入內全兩【八】八公六共兵具其典兼【冂】冊再【冖】冗【冫】冬冷凉准凌凍【几】凡【凵】凶出【刀】刀刃分切刊刑列初判別利到制刷券刺刻則削前剛副剩割創劇劍劑【力】力功加劣助努効勅勇勉動勘務勝勞募勢勤勳勵勸【勹】包【匕】化北【匚】匿【十】十千升午半卑卒卓協南博【卜】占【卩】印危却卵卷卽【厂】厄厘厚原厭【厶】去參【又】及友反叔取受【口】口古句叫召可史右司各合吉同名后吏吐向君吟否含呈吸吹告咸周味呼命和咽哀品員哲唐唯唱商問啓善喉喜喪喫單嗣嘉器噴嚴嚥【囗】囚四回因困固國圍園圓圖團【土】土在地坂均坊坑坪垂型埋城域執培基堀堂堅堤堪報場塔塗塵境墓塀增墨墮壁壇壓壞【士】士壯壹壽【夂】夏【夕】夕外多夜夢【大】大天太夫央失奇奉奏契奔奢奥奪奬奮【女】女奴好如妃妊妥妙妨妹妻姉始姑姓委姦姪姫姻姿威娘娯娠娼婚婦婿媒嫁嫡嫌孃【子】子字存孝季孤孫學【宀】宅守安宏完宗官定宜客宣室宮害宴家容宿寄密富寒察寢實審寫寛寶【寸】寸寺封射將專尉尊尋對導【小】小少尚【尢】就【尸】尺尼尾尿局居屆屈屋展層履屬

【山】山岡岩岳岸峠峯島
峡崇崎崩【巛】川州巡巣
【工】工左巧巨差【己】己
【巾】市布帆希帝帥師席
帳帶常帽幅幕幣【干】干
平年幸幹【幺】幻幼幾【广】
床庁底店府度座庫庭庶
諒諜廉廢廣廳【廴】延廷
建廻【廾】弄弊【弋】式
【弓】弓弔引弟弱張强彈
【彡】形彩彫影彰【彳】役
彼往征待律後徐徑徒得
從御復微徵德徹【心】心
必忌忍志忘忙忠快念怒
思怠急性怨怪怯恐恥恨
恩恭息悔悟悖患悲惟悼

情惑惜惠惡惰惱想愁愉
意愚愛感慈態慕慘慢慣
慣慨慮慰慶憂憐憚憲
憶憾憤憑應懲懷懸戀
【戈】成我戒戰戲戴【戶】
戸戻房所扇【手】手才打
扱扶批承技抑投抗折抱
抵押披抽拂拍拒拓抜拘
捌招拜括拳拾持指振捕
捧措拾掃授掌排掛探探
控推揚接提換握挿掲掬
援損搖捜摘携摩撫撰撃
操擔擄擬攘攝【支】支
【攴】收改攻放政故敍教
敏敷敗敢散敬敵敷數整
【文】文【斗】斗料斜【斤】
斤斥斬新斷斯【方】方旋
旅族族【无】既【日】日
旦旨早旬旭昇昌明易昔
星昏昭昨是映時晚晝普
景晴晶智暇暖暗暑暮暴
暦曇曜【曰】曲更書曹曾
替最會【月】月有朋服朕
朗望朝期【木】木未末本
札朱机朽杉村束柿杯
東松板枕林枚果枝枯架
柄某染秉歪枢柱柳栗校
株根格栽桃案桐桑梅條
梨械棄棋棒棟森棺植椙
業極榮構概樂樓標樞模
樣樹橋機横樹檢櫻闕權
【欠】次欲款歎歌歎歐歡
濟瀆瀧【火】火灰災炊
漫漸潔潤湖澤激濁濃温
滴滿漁漂漆漏演漕漠漢
湯源準溢溶溺滅滋滑滯
添減淵渡温測港渴湖湧
液涙涙淡淨淫深混清淺
派流浦浪浮浴海浸消渉
泣泥注泰泳洋洗津洪活
沸油治沼沿況泉泊法波
江池決汽沈沒沖沙汰河
氣【氵】水氷永汁求汗汚
比【毛】毛【氏】氐民【气】
殺毀毀【母】母每毒【比】
【毋】死殊殉殖殘【殳】段
【止】止正此歩武歳歴歸
炎炭烈無然煩煮煙照煩

茶草荒荷荘菊菌菓栄華
萬落葉著葬蒙蒸蓄蔓薄
藏藝藤藥【虍】虎虐處虚
號【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲
蠶蠻【血】血衆【行】行衒
街衝衡衛衛【衣】衣衰裏袋
袖被裁裂裏裕補裝裸製
複褒襲【西】西要覆【見】
見規視親覚覽觀【角】角
解觸【言】言訂計討訓託
記訟訪設許訴診詐詔評
詞詠試詩詰話詳誇誌認
誓誕誘語誠誤說課調談
講論諭諸諾謀謁諮講謝
謠謹謬證識譜警譯議護
釁讀變讓【谷】谷【豆】豆

縁緩緯練縛縣縫綰縱總
績繁織繕繪繭繰繼續
【缶】缺【网】罪置署罰罵
罷羅【羊】羊美羹義【羽】
羽翁翌習震【老】老考者
【而】耐【耒】耕【耳】耳聖
聞聯聲職聽【聿】肅肇
【肉】肉肖肝股肥肩肯肺
胃背胎胞胴胸能脊脈脊
脚脫陵腕腦腰腸腹膚膜
膝膽臆臍臓【臣】臣臥臨
【自】自臭【至】至致臺
【臼】興與舉舊【舌】舌舎
【舛】舞【舟】舟航般舵舶
舷艦【艮】良【色】色【艸】
芝花芽芳苑苗若苦英茂

豐【豕】豚象豪豫【貝】貝
貞負財貧貨販貫責貯貳
貴買貸費貿賀賃賄資賊
賓賜賞賢賣賤賦質賴購
贈贊【赤】赤【走】走赴起
超越趣【足】足距跡路踊
躍【身】身【車】車軌軍軒
軟軸較載輕輩輪輯輸輿
轉【辛】辛辨辭辯【辰】辰
農【辵】辷迎近返迫迭述
迷追退送逃逆透逐途通
速造連週進逸遂遇遊運
過道達違遙遞遠遣適遭
遲遷選遺避還邊邂【邑】
邦邪邸郊郎郡部郵都鄉
【酉】酌配酒酢酬酷酸醉
醜醫【釆】釋【里】里重野
量【金】金釜針釣鈍鈴鉛
鉢銀銑銅銘鋭鋒鋼錯錄
錢鍋鎖鎭鏡鑄鐘鐵鑑鑛
【長】長【門】門閉開閑問
閣閲關【阜】防附降限陛
院陣除陪陳陰陵陶陷陸
陽隆隊階隔隙際障隣隨
險隱【隹】隻雀雄雅集雇
雌雙雜離難【雨】雨雪雲
零雷電需震霜霧露靈
【青】青靜【非】非【面】面
【革】革靴【音】音響【頁】
頂項順頓預頑領頭頻題
額顏願顚類顧顯【風】風
【飛】飛飜【食】食飢飲飯
飾養餓餘餅館餐【首】首
【香】香【馬】馬馳駁駄駐
騎騰騒驅驗驚驛【骨】骨
髓體【高】高【髟】髮【鬥】
鬪【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮
鯉鯛【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄
【鹵】鹽【鹿】鹿麗【麥】麥
【麻】麻【黃】黃【黑】黑默
點黨【鼓】鼓【鼻】鼻【齊】
齋【齒】齒齡【龍】龍【龜】
龜

注意

（一）本表にない漢字は假名で書くこと（二）固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、ただし外國（支那を除く）の人名地名は假名書とすること（三）代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞および助詞はなるべく假名で書くこと（四）外來語は假名で書くこと。

略字表

左の字體を本位として用ひること。
（括弧内の小字は字典體）

勧（勸）権（權）滝（瀧）歓（歡）観（觀）
沢（澤）択（擇）訳（譯）駅（驛）釈（釋）
変（變）恋（戀）蛮（蠻）湾（灣）
茎（莖）径（徑）経（經）軽（輕）
併（併）塀（塀）瓶（甁）餅（餅）研（研）
斉（齊）斎（齋）済（濟）剤（劑）
残（殘）浅（淺）賤（賤）銭（錢）
労（勞）営（營）栄（榮）学（學）覚（覺）
挙（擧）誉（譽）断（斷）継（繼）
歯（齒）齢（齡）湿（濕）顕（顯）
窓（窗）総（總）属（屬）嘱（囑）
為（爲）偽（僞）帯（帶）滞（滯）
参（參）惨（慘）両（兩）満（滿）
発（發）廃（廢）鼠（鼠）猟（獵）
乱（亂）辞（辭）潜（潛）賛（贊）
走（走）徒（徒）従（從）縦（縱）
悩（惱）脳（腦）処（處）拠（據）
担（擔）胆（膽）来（來）麦（麥）
寿（壽）鋳（鑄）数（數）楼（樓）

楽(樂)	薬(藥)	読(讀)	続(續)
竜(龍)	滝(瀧)	随(隨)	髄(髓)
麻(鹿)	麗(麗)	聴(聽)	廳(廳)
虚(虛)	戯(戲)	遅(遲)	鮮(解)
独(獨)	触(觸)	畳(疊)	摂(攝)
虫(蟲)	蚕(蠶)	仮(假)	児(兒)
励(勵)	嘗(嘗)	国(國)	囲(圍)
円(圓)	図(圖)	壱(壹)	実(實)
写(寫)	宝(寶)	扣(控)	叙(敍)
条(條)	様(樣)	帰(歸)	気(氣)
炉(爐)	犠(犧)	献(獻)	画(畫)

酉(酉)	尽(盡)	礼(禮)	称(稱)
糸(絲)	欠(缺)	声(聲)	台(臺)
旧(舊)	万(萬)	号(號)	証(證)
豊(豐)	弁(辨辯)	逓(遞)	辺(邊)
医(醫)	鉄(鐵)	関(關)	双(雙)
霊(靈)	余(餘)	舘(館)	体(體)
塩(鹽)	点(點)	覚(覺)	
闘(鬪)	刺(刻)	亀(龜)	

略字表 終

文語動詞活用表

活用の種類	語根	活用形 未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段	書	カ	キ	ク	ク	ケ	ケ
上二段	起	キ	キ	ク	クル	クレ	キヨ
上一段（着）		キ	キ	キル	キル	キレ	キヨ
下二段	兼	ネ	ネ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネヨ
下一段（蹴）		ケ	ケ	ケル	ケル	ケレ	ケヨ
カ行變格（來）		コ	キ	ク	クル	クレ	コヨ
サ行變格（爲）		セ	シ	ス	スル	スレ	セヨ
ナ行變格	死	ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ
ラ行變格	有	ラ	リ	リ	ル	レ	レ

口語動詞活用表

活用の種類	語根	活用形 未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段	書	カ	キ	ク	ク	ケ	ケ
四段	死	ナ	ニ	ヌ	ヌ	ネ	ネ
四段	有	ラ	リ	ル	ル	レ	レ
上一段	起	キ	キ	キル	キル	キレ	キヨ(ロ)
上一段	着	キ	キ	キル	キル	キレ	キヨ(ロ)
下一段	兼	ネ	ネ	ネル	ネル	ネレ	ネヨ(ロ)
下一段	蹴	ケ	ケ	ケル	ケル	ケレ	ケヨ(ロ)
カ行變格	來	コ	キ	クル	クル	クレ	コイ
サ行變格	爲	セ(シ)	シ	スル	スル	スレ	セヨ(シロ)

文語形容詞活用表

活用の種類	語根	活用形 未然	連用	終止	連體	已然
ク活用	清	ク	ク	シ	キ	ケレ
シク活用	涼	シク	シク	シ	シキ	シケレ

口語形容詞活用表

活用の種類	語根	活用形 未然	連用	終止	連體	已然
ク活用	清	ク	ク(ウ)	イ	イ	ケレ
シク活用	涼	シク	シク(ウ)	シイ	シイ	シケレ

文語助動詞活用表

助動詞の種類	語	活用形 未然	連用	終止	連體	已然	命令
受身 可能 尊敬	る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
使役 尊敬	す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
	し	め	め	む	むる	むれ	めよ
	さす	せ	せ	す	する	すれ	せよ
時	り	ら	り	り	る	れ	れ
	たり	ら	り	り	る	れ	れ
	けり	ら	り	り	る	れ	れ
指定	たり	ら	り	り	る	れ	れ
	なり	ら	り	り	る	れ	れ
否定	ざり	ら	り	り	る	れ	れ
	ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
	つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ
下二段活用							
ラ行變格活用							
ナ變							

口語助動詞活用表

助動詞の種類	語	活用形 未然	連用	終止	連體	已然	命令
受身 可能 尊敬	れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ
下一段							

音便表

動詞	形容詞
一 い音便	一 白き花―い
二 う音便―言ひて―う	二 甘くなる―う
三 撥音便	三 重くす―ん
四 促音便	

- 一 い音便：書きて → 防ぎて → い
- 三 撥音便：死にて → 飛びて → 積みて → ん
- 四 促音便：立ちて → 買ひて → 破りて → つ

文語形容詞活用表

活用の種類	語根	活用形 未然	連用	終止	連體	已然
ク活用	清	ク	ク	シ	キ	ケレ
シク活用	涼	シク	シク	シ	シキ	シケレ

文語助動詞活用表

助動詞の種類	語	活用形 未然	連用	終止	連體	已然	命令	
受身 可能 尊敬	る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ	下二段活用
使役 尊敬	す	せ	せ	す	する	すれ	せよ	下二段活用
尊敬	しむ	めむ	めむ	むむ	むる	むれ	めよ	下二段活用
受身 可能 尊敬	らる	れ	れ	る	るる	るれ	れよ	下二段活用
打消	ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	ナ變
完了	つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ	下二段活用
指定	り	ら	り	り	る	れ	れ	ラ行變格活用
指定	たり	ら	り	り	る	れ	れ	ラ行變格活用
指定	なり	ら	り	り	る	れ	れ	ラ行變格活用
指定	たり	ら	り	り	る	れ	れ	ラ行變格活用
指定	けり	ら	り	り	る	れ	れ	ラ行變格活用
指定	たり	ら	り	り	る	れ	れ	ラ行變格活用
否定	ざり	ら	り	り	る	れ	れ	ラ行變格活用
否定	べかり	ら	り	り	り	—	れ	ラ行變格活用
推量	べし	く	く	し	き	け	—	形容詞活用
推量	らし	く	く	○	き	け	—	形容詞活用
推量	まじ	く	く	○	き	け	—	形容詞活用
比況	ごとし	く	く	し	き	—	—	形容詞活用
希望	たし	く	く	し	き	けれ	—	形容詞活用
否定	ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	—	特種活用
否定	じ	じ	じ	じ	じ	じ	—	特種活用
時	き	—	—	き	し	しか	—	特種活用
時	む	む	む	む	む	め	—	特種活用
推量	けむ	—	—	む	むる	むれ	めよ	下二段活用
推量	らむ	—	—	む	むる	むれ	めよ	下二段活用

動詞助動詞接續法

未然形に	連用形に	終止形に	連體形に	已然形に
る（四段・子・ラ變活用に限る）	つ	らむ	なり	り（四段活用に限る）
らる（上・下・一・二・段・カ・サ變活用に限る）	ぬ	べし	ごとし	
す（四段・子・ラ變活用に限る）	たり（時）	べかり	らし	
さす（上・下・一・二・段・カ・サ變活用に限る）	き（カ・サ變活用につゞく場合に然外あり）	らし	めり	
しむ	けり		まじ	
む	けむ		なり（嘆詠）	
まし	たし			
ず				
ざり				
じ				
まほし				
り（サ變に限る）				

なりは體言にもつゞく如しは助詞のごとくにつゞくことあり。

ラ變に限り連體形につゞく

接續助詞と動詞形容詞との接續法

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
ば	て	と	（と）	ば
で	つつ	とも	（とも）	ど
			が	ども
			を	
			に	
ば			が	ば
とも			を	ど
			に	ども

動詞

形容詞

●括弧内のものは今文にのみ用ひらるゝもの。

口語形容詞活用表

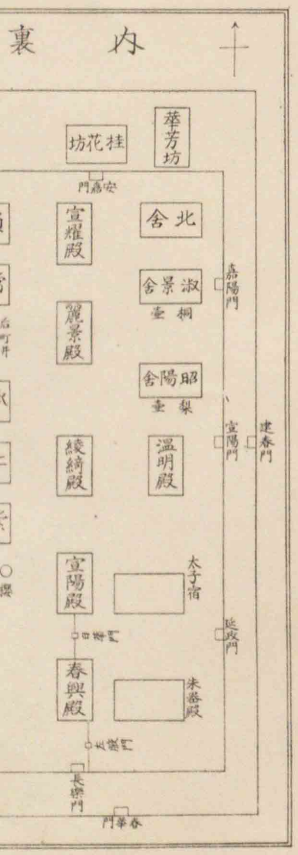
活用の種類	語根	活用形 未然	連用	終止	連體	已然
ク活用	清	ク	ク（ウ）	イ	イ	ケレ
シク活用	涼	シク	シク（ウ）	シイ	シイ	シケレ

音便表

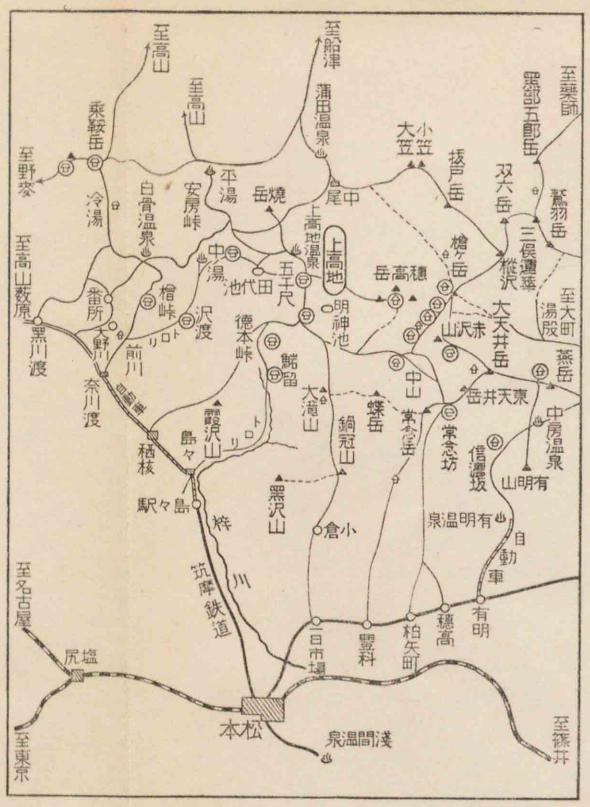
動詞	一 い音便	書き て 防ぎ て —い
	二 う音便	言ひて—う
	三 撥音便	死に て 飛び て 積み て —ん
	四 促音便	立ち て 買ひ て 破り て —つ
形容詞	一 白き花—い	
	二 甘くなる—う	
	三 重くす—ん	

口語助動詞活用表

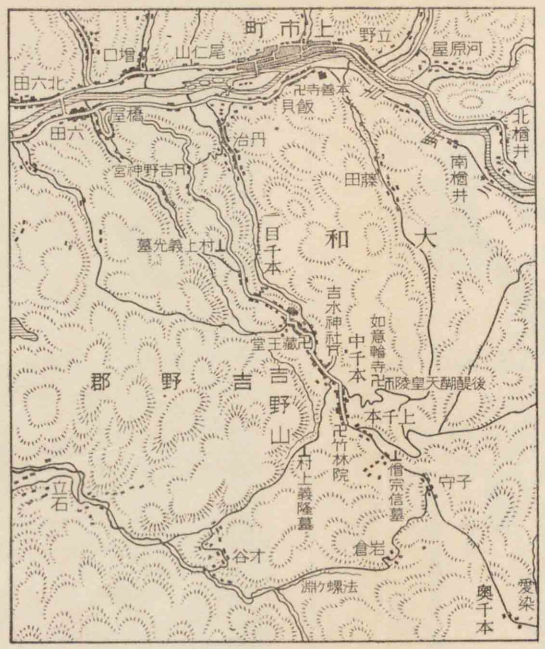
助動詞の種類	語	活用形 未然	連用	終止	連體	已然	命令	
受身 可能 尊敬	れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ	下一段活用
使役	せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ	下一段活用
使役	させる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ	下一段活用
尊敬	られる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ	下一段活用
否定	ない	く	く	い	い	けれ	—	形容詞活用
推量	らしい	く	く	い	い	けれ	—	形容詞活用
希望	たい	く	く	い	い	けれ	—	形容詞活用
時	た	たら	た	た	た	たれ	—	特種活用
指定	だ	だら	だ	だ	—	—	—	特種活用
時	う	—	う	う	—	—	—	特種活用
時	よう	—	—	—	—	—	—	特種活用
推量	まい	—	まい	まい	—	—	—	特種活用



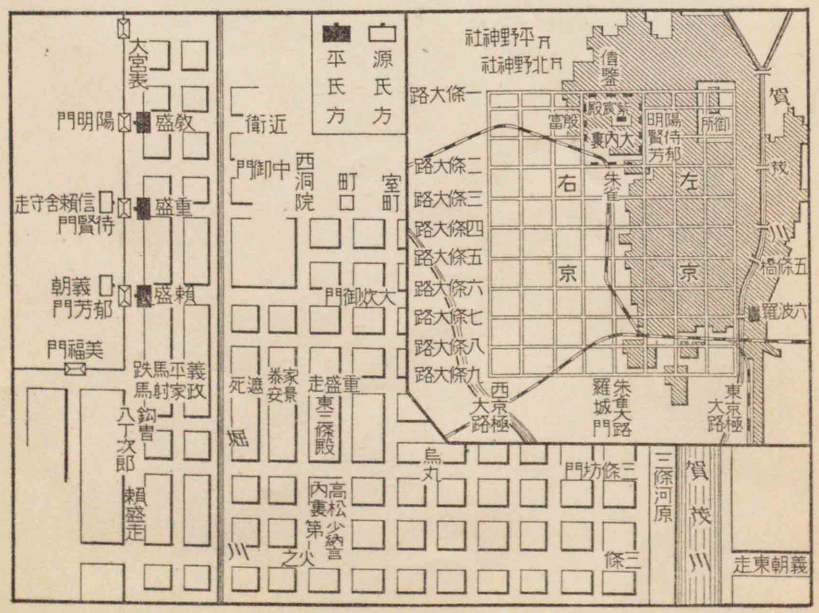
第十八課（二）



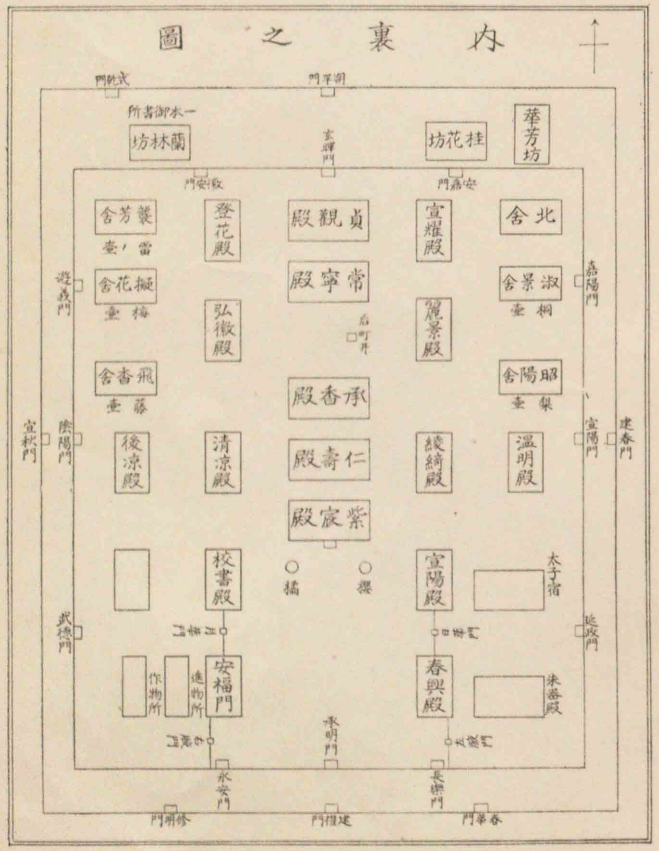
第十七課（上高地の神祕境）參照



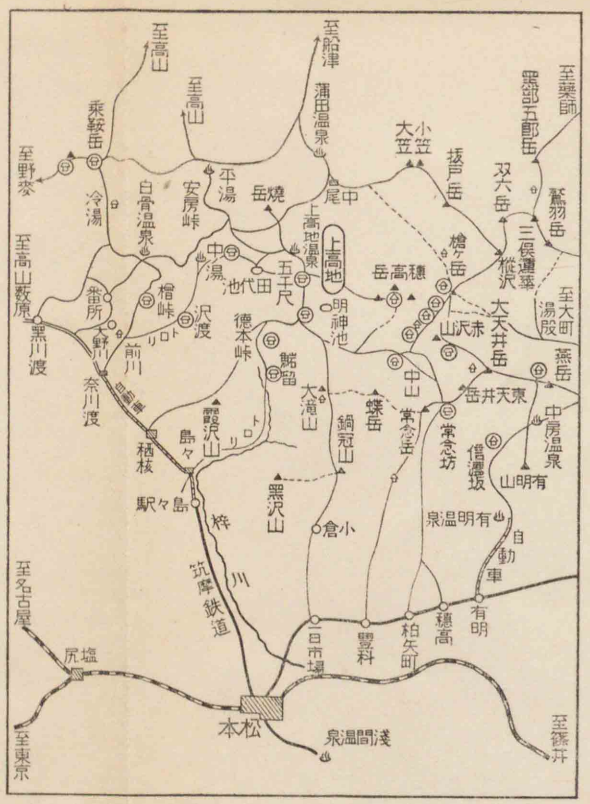
第四課（花影の中に）參照



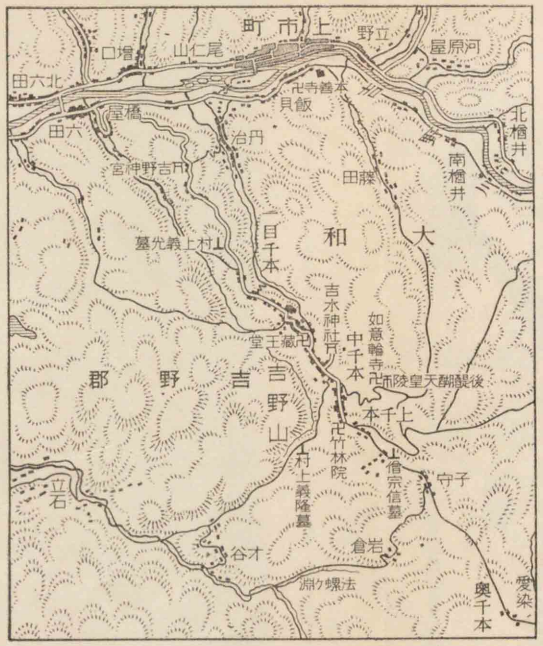
第十八課（待賢門の戰）參照（一）



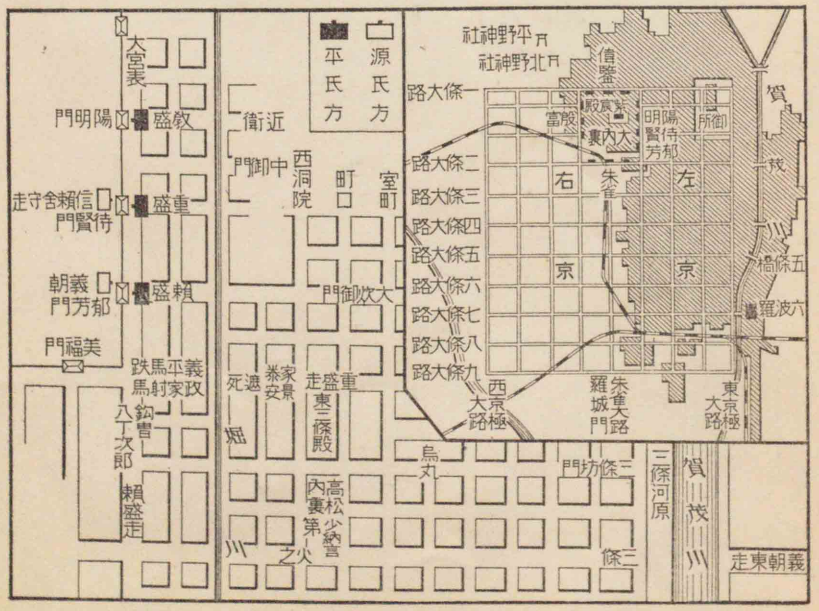
第十八課（待賢門の戦）參照　（二）



第十七課（上高地の神祕境）參照



第四課（花の影に中）參照



第十八課（待賢門の戦）參照　（一）

新日本讀本卷五參考圖

龍頭ノ兜
甲冑正面
星
菱縫ノ板
鳩尾ノ板
射向ノ袖
脇板
蝶裾金物
弦走リ
發傳
尻鞘
弦袋
臑當
大中黒ノ狙矢（征矢）
全背面
八幡座
菊座
板付の板
板の板
板の板
鉢
二
三
四
馬手ノ草摺
引の板數

緋縅
萌黄匂縅
小櫻縅
卯花縅
澤瀉縅
黒糸縅
赤地錦ノ直垂
大紋
直衣（冬）
腹當
木蘭地ノ直垂
指貫

連錢葦毛の馬

絲ガオモ
鞍ノ輪覆金
鞦シリガイ
障泥アヲリ
鐙アブミ
鞦ムナガイ
尻繻
弦袋
臑當
大中黒ノ狙矢（征矢）
菱縫ノ板
鳩尾ノ板
射向ノ袖
蝶ノ裾金物
脇板
弦走リ
發傳
鞦シタガラ
矢筈ノ金具
柄
檀ノ板
鍬形
眞向
庇
眉
吹返シ
龍頭ノ兜
星
甲冑正面
八幡座
菊座
仝背面
切斑の矢
截生ノ矢（切斑）
板の板板板付ののの鉢二三四
又上巻付の板
逆板
腰巻
一二三四のののの板板板板
馬手ノ草摺
銀の蛭巻したる小長刀
兵庫鎌ノ太刀「柄モ鞘モ銀ノ延金ニテ包ム」
ヒルマキ
日輪巻
滋籐弓
センダン巻
カブラ籐
束笘
鞘
矢ツリ籐
ニギリ
鳥首
月輪巻
カブラ籐
笘本
熊ノ尻鞘
引の板
胡籙

文部省檢定濟

昭和六年十一月二十八日　中學校國語漢文科用
昭和八年七月六日　實業學校國語科用

三訂新日本讀本

定價　卷一—六　各金六十錢
　　卷七—十　各金五十五錢

大正十四年十月十日印刷
大正十五年一月三日訂正再版印刷
昭和三年七月二十日訂正三版印刷
昭和三年十一月一日訂正四版印刷
昭和六年七月廿八日訂正五版印刷

大正十四年十月十三日發行
大正十五年一月五日訂正再版發行
昭和三年七月廿三日訂正三版發行
昭和三年十一月五日訂正四版發行
昭和六年七月廿一日訂正五版發行

昭和六年十一月十七日訂正六版印刷
昭和六年十一月二十日訂正六版發行

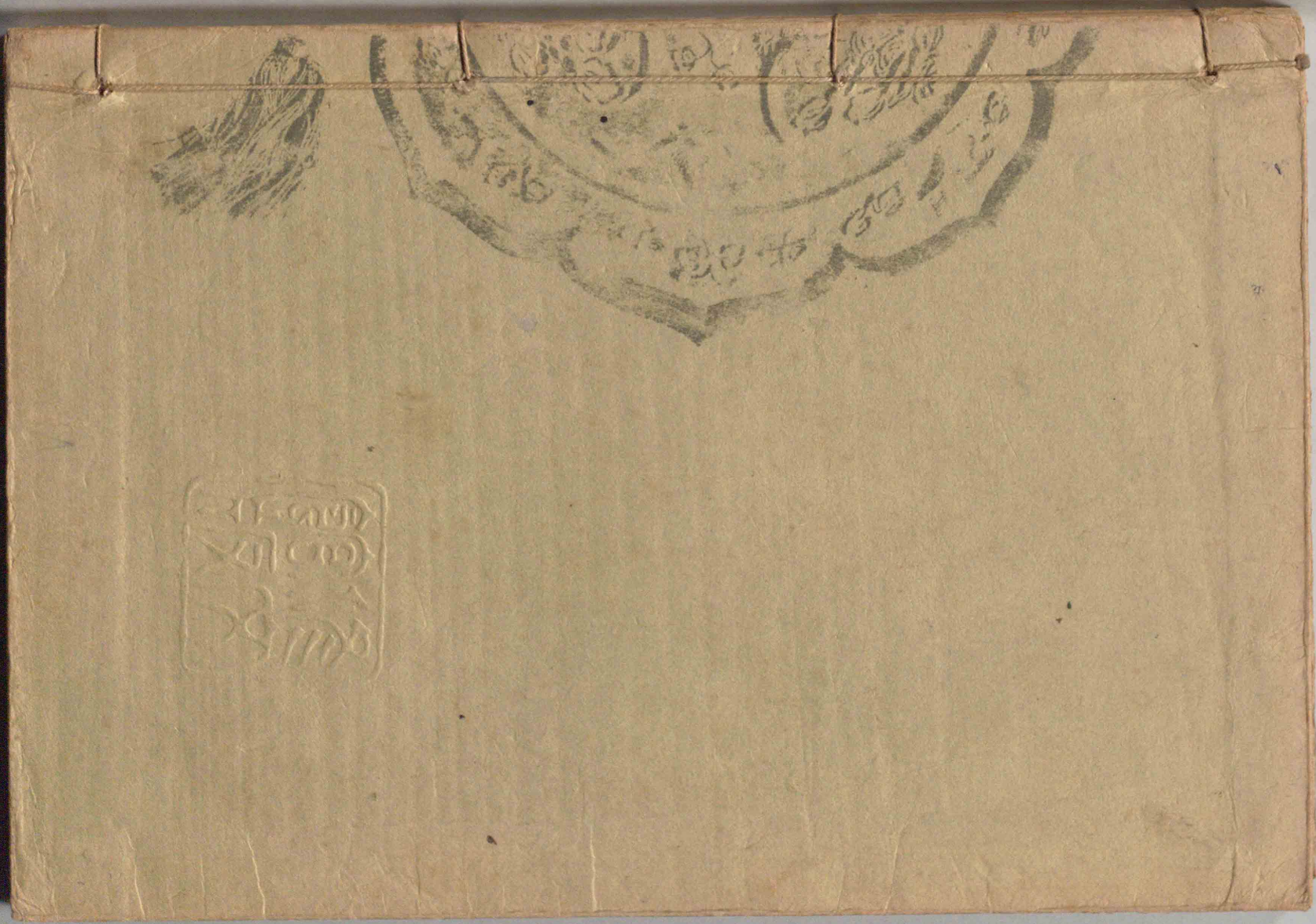
發兌

編者　京都市左京區修學院西沮澤町四　吉澤義則

發印發行兼印刷者　東京市神田區神保町一丁目二五ノ一　鈴木政雄

發行者　大阪市東區博勞町五丁目五十六番地　鈴木常松

東京市神田區神保町一丁目二五ノ一
修文館
大阪市東區博勞町五丁目五十六番地

振替口座東京二六四四番
振替口座大阪四七一番

—交進社印刷所—